

平成29年度  
神戸グローバルチャレンジプログラム  
自己点検・評価報告書

国立大学法人神戸大学 大学教育推進機構  
神戸グローバルチャレンジプログラム委員会  
平成30年4月

## 目 次

|                                                 |    |
|-------------------------------------------------|----|
| 1. 神戸大学グローバルチャレンジプログラムの概要                       | 3  |
| 1－1. 神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム                | 4  |
| 1－1－1. クォーター制の導入                                | 4  |
| 1－1－2. 神戸スタンダードと教養教育改革                          | 5  |
| 1－2. 事業の目標と取組計画                                 | 6  |
| 1－2－1. 事業概要と成果指標                                | 6  |
| 1－2－2. 事業年度（5年）を通じての取組計画概要                      | 6  |
| （1）プログラム内容の開発及び実施                               | 6  |
| （2）学修の実施と成果の把握・指標                               | 7  |
| （3）学生等への周知や広報、FD・SD の実施、他大学への情報提供               | 8  |
| （4）プログラムの活動資金の確保                                | 8  |
| （5）学生の主体的な活動企画                                  | 8  |
| 1－3. 実施体制                                       | 8  |
| 1－3－1. 学内の実施体制                                  | 8  |
| 1－3－2. 評価体制とPDCAサイクル                            | 10 |
| 2. 平成 29 年度の取組                                  | 11 |
| 2－1. プログラムの実施と自己評価                              | 12 |
| 2－1－1. プログラム実施計画                                | 12 |
| 2－1－2. プログラムの取組実績・具体的成果                         | 13 |
| 2－2. 各コースの実施と自己評価                               | 20 |
| （1）ニューヨークのアートとファイナンスのフィールドワーク（ニューヨークコース）        | 21 |
| （2）ハンブルク異文化理解コース（ハンブルクコース）                      | 23 |
| （3）アジア・フィールドワークコース                              | 25 |
| （4）理学グローバルチャレンジプログラム UPLB コース（理学 UPLB コース）      | 27 |
| （5）理学グローバルチャレンジ Nanyang/Sci コース（理学 Nanyang コース） | 29 |
| （6）ギャップターム海外協定校派遣コース                            | 31 |
| （7）UPLB 農学英語コース（UPLB コース）                       | 33 |
| （8）EU フィールドワークコース（KUPES コース）                    | 35 |
| （9）グローバルチャレンジコース（学生企画型）（グローバルチャレンジコース）          | 38 |

|                                                      |       |    |
|------------------------------------------------------|-------|----|
| (10) インターンシップチャレンジコース（募集型）（インターンシップコース）              | ..... | 42 |
| (11) フィールドワークチャレンジコース（募集型）（フィールドワークコース）              | ..... | 44 |
| (12) カナダ・トロントの多文化社会研究（トロント大学コース）                     | ..... | 48 |
| (13) 国際産官学連携アドバンストコース（国際連携アドバンストコース）                 | ..... | 48 |
| (14) 理学グローバルチャレンジ Tsinghua/Life コース（理学 Tsinghua コース） | ..... | 48 |
| 3. プログラム全体の自己評価 ―成果と課題―                              | ..... | 49 |
| 3－1. プログラム目標能力に関する自己評価                               | ..... | 50 |
| 3－1－1. ルーブリック指標に基づく自己評価（平成 29 年度参加学生）                | ..... | 51 |
| 3－1－2. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化（平成 28 年度参加学生）           | ..... | 69 |
| 3－2. プログラム参加後のアンケート結果と分析                             | ..... | 80 |
| 3－3. 大学教育再生加速プログラム (AP) 中間評価結果                       | ..... | 87 |
| 3－4. プログラム全体の自己評価総括                                  | ..... | 89 |
| (1) 自己評価総括                                           | ..... | 89 |
| (2) 課題への対応状況                                         | ..... | 89 |
| (3) 今後の課題                                            | ..... | 89 |

## 1. 神戸グローバルチャレンジプログラムの概要

## 1-1. 神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム

神戸大学はこれまで、人文社会科学系学部を中心とする「経済社会を牽引するグローバル人材育成支援」プログラムを始め、各学部でグローバル人材育成のために留学を組み込んだ様々な取組を行ってきた。これらの取組を促進するとともに、対象を全学生へと拡大するため、本学では、学士課程の学生を「自ら地球的課題を発見しその解決にリーダーシップを発揮できる人材」（「課題発見・解決型グローバル人材」）に育成することを目標に、平成28年4月から、以下のとおり教育改革を実施している。神戸グローバルチャレンジプログラム（以下「神戸GCP」という。）は本学の教育改革を活用し、その効果を大きく高めるプログラムである。



### 1-1-1. クォーター制の導入

前期・後期の授業期間をそれぞれ分割し、各8週で授業を行うクォーター制を導入した。これにより、週1回または週2回8週の授業による集中的な学修を可能とするとともに、特定のクォーターをギャップタームとして利用することが可能となった。また、学生はギャップタームを活用することにより、海外短期留学、海外のサマースクール、海外インターンシップ、ボランティア等の様々な学外学修において多様な経験をし、4年間で卒業することが可能となった。

神戸GCPにおいては、このクォーター制により生じるギャップタームを利用し、学生が1・2年次に国際的なフィールドで行うインターンシップなどの学外学修を促進する。



### 1-1-2. 神戸スタンダードと教養教育改革

神戸大学では、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき以下の能力を新たに「神戸スタンダード」として定め、神戸スタンダードの修得を教養教育の学修目標とした。

- 複眼的に思考する能力：専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける
- 多様性と地球的課題を理解する能力：多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける
- 協働して実践する能力：専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

また、「神戸スタンダード」を全学部生が身につけるよう、主として1・2年生が学修していた教養科目を見直し、平成28年4月から「基礎教養科目」及び「総合教養科目」に再編した。さらに、平成29年度より、高学年の学部生を対象とする新たな科目として、「高度教養科目」を設け、4年間を通じて学ぶ教養教育のカリキュラムを提供している。「神戸スタンダード」の各能力と各教養科目は、以下のように対応している。



- ・「複眼的に思考する能力」  
⇒⇒⇒「基礎教養科目」において身につける目標
- ・「多様性と地球的課題を理解する能力」  
⇒⇒⇒「総合教養科目」において身につける目標
- ・「協働して実践する能力」  
⇒⇒⇒「高度教養科目」において身につける目標

神戸GCPでは、学生の学外活動による学修に事前学修・事後学修を組み合わせることで学修成果を高め、「総合教養科目」の「グローバルチャレンジ実習」として単位授与を行う。このことにより、神戸GCPは体系的な教養教育のカリキュラム内に位置づけられるとともに、全学部生の受講が可能となっている。

## 1-2. 事業の目標と取組計画

### 1-2-1. 事業概要と成果指標

神戸 GCP は、学部 1・2 年生の 1 つのクォーターをギャップタームとして設定し、国際的なフィールドで学生が行う自主的な活動を、「グローバルチャレンジ実習」として単位授与するプログラムである。その目的は、参加学生が低年次において自らの体験に基づき「神戸スタンダード」の必要性を体感し、「学びとは何か」を主体的に考え、「学びの動機づけ」を得ることである。学生は国際的なフィールドでの活動や異文化環境下での体験に基づき、外国語でのコミュニケーション能力を高めるとともに、「課題発見・解決能力」の必要性を体感することができる。このことにより、課題解決に向けた意欲を高め、学生自らが学修目標・計画を立てて活動に取り組み、主体的な学修姿勢を大学入学後の早い時期から身につけることが期待される。また、学生は本プログラムに参加し、主体的に活動することを通じて、本学が独自に設定した「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」を身につけることができる。

#### 【独自指標】

##### I) プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力

「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」（ループリックによる測定）

H29 水準 2 に達した学生 50%、水準 3 に達した学生 10%

H31 水準 2 に達した学生 75%、水準 3 に達した学生 30%

##### II) プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合

H29 20.0% (29/145)、H31 50.0% (250/500)

#### 【必須指標】

##### i) 長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 [% (参加学生数 / 全学生数)]

H29 1.77% (210/11,849)、H31 2.53% (300/11,849)

長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 [% (参加学生数 / 1、2 年生の学生数)]

H29 3.97% (210/5,294)、H31 5.67% (300/5,294)

##### ii) 上記プログラムを経た学生の成績評価 [プログラムに参加した学生と不参加学生の GPA の平均の差]

H29 0.27、H31 0.41

##### iii) 退学率 [% (退学者 (除籍者を含む) / 在籍者数)]

H29 1.03% (122/11,849)、H31 0.98% (116/11,849)

##### iv) 学生の授業外学修時間 [時間数 (1 週間当たり (時間) ~ 教務情報システムを利用し、半期毎に全学部生にアンケートを行って把握)]

全学生 : H29 6 時間、H31 6.5 時間

プログラム参加学生 : H29 8 時間、H31 12 時間

##### v) 進路決定の割合 [% ((就職決定者数 + 進学者数) / 卒業者数)]

H29 92.51% (2,458/2,657)、H31 94.09% (2,500/2,657)

##### VI) 学生が企画する活動数 (活動数) (大学関与分のみ)

H29 100 件、H31 150 件

### 1-2-2. 事業年度 (5 年) を通じての取組計画概要

神戸 GCP の実施に当たっての取組計画は、以下のとおりである。

#### (1) プログラム内容の開発及び実施

神戸 GCP として実施する取組は、各担当教員が現地視察及び受入先との協議等により開発を進め、同

プログラム委員会（以下、「委員会」という。）において認定する。認定基準は、本プログラムで身に付けることが期待される3つの能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」に基づくものとする。

1・2年生に同プログラムに参加することで学修への動機づけを行い、上位学年において、海外留学等の国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする力を学生が修得することをねらいとする。

神戸GCPでは、開講コースを「フィールドワーク型」「サマースクール型」「学生企画型」「インターンシップ型」「ボランティア型」の5つのタイプ（型）に分類して実施している。プログラムに参加する全ての学生には、学修目標を定め、企画書・計画書を作成することを求める。学生は、神戸グローバルチャレンジプログラムコーディネーター（以下、コーディネーター）またはアドバイザー教員の指導の下、事前・渡航中・事後の学修を行い、学修成果をまとめる。学生がまとめた学修成果は、コーディネーターまたはアドバイザー教員が委員会に報告し、「総合教養科目」の中に位置付けられる「グローバルチャレンジ実習」として単位授与（1～2単位）を行う。

## （2）学修の実施と成果の把握・指標

### ・事前学修・事後学修

学外活動学修の前後に、事前・事後学修を実施する。学生は事前学修時に企画書・計画書（チャレンジシート）を作成するほか、安全管理についてのオリエンテーション・講習会の受講を義務化し、海外等学外へ出る際の心構え、安全管理について学修する。在外学修に参加する学生には、保険加入を義務付けるとともに、「留学生危機管理システム」の登録を義務付ける。また、事後学修時に学修の振り返りを行い、報告書（リフレクションシート）を提出する。主体的な学修を身に付けさせるため、アクティブ・ラーニングを取り入れた学修を行う。学外学修で得た経験を基にグローバル人材に必要な能力や自らの能力・可能性に対する「気づき」を有し、今後の学修へのモチベーションを高める動機づけにつなげる。

### ・合同報告会

プログラム参加者主催による合同報告会を開催する。学生同士がネットワークを構築し、刺激し合うことでモチベーションの維持を図り、上位学年において、海外留学等の国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする力を付けさせる。

### ・学修ポートフォリオの利用

神戸大学学修支援システム BEEF を本プログラムの学修ポートフォリオとして活用する。チャレンジシートの提出・保存、事前学修として安全管理マニュアル等の配付、SNS 機能による海外等滞在中の指導、事後学修時のリフレクションシートの提出に BEEF を活用し、参加学生の学修状況・学修時間・学修成果の把握と保管を行う。

### ・英語外部試験の活用

全学部生が入学直後に英語外部試験を受験し、その結果を本プログラム対象者の選抜に利用する。点数の低い学生は必要なスコアを修得するまで事前学修を行う。プログラム実施後には再び英語外部試験を受験し、プログラム実施前からの英語力の伸びを測定し、語学力向上に向けた学修に活用する。

### ・学修成果の評価指標

学生の質的な成長について、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」を神戸GCP独自の指標とし、ルーブリックを作成の上、評価する。事前学修・海外活動・事後学修・事後活動などの実績（学修ポートフォリオ）と報告会（プレゼンテーションと質疑応答）を基に、多面的な評価を行う。

### (3) 学生等への周知や広報、FD・SDの実施、他大学への情報提供

本プログラムのウェブサイトを作成し、学生への周知や広報を行う。また、プログラムの成果を可視化してウェブサイト等で公表する。

また、派遣先での安全管理や異文化理解等、国際的なフィールドでの活動に関する知識や方法について十分な知識が必要となるため、教職員に対して海外研修や計画的なFD・SDを実施し、学生の国際的なフィールドでの学外学修を的確にサポートできる人材養成を行う。

大学教育再生加速プログラム(AP)採択校をはじめ、他大学等への情報提供を行って取組の波及を図り、平成31年度には報告書を作成して公表する。

### (4) プログラムの活動資金の確保

プログラムの活動において、渡航費等は学生が自ら負担することが原則であるが、より多くの学生が参加できるよう、以下のとおり資金を確保する。教育上サポートが必要な場合や、教育的効果が高いと判断できる取組に対し、資金の一部補助を行う。

- ・神戸大学基金
- ・全学及び各学部後援会・同窓会からの援助
- ・日本学生支援機構等の各種奨学金

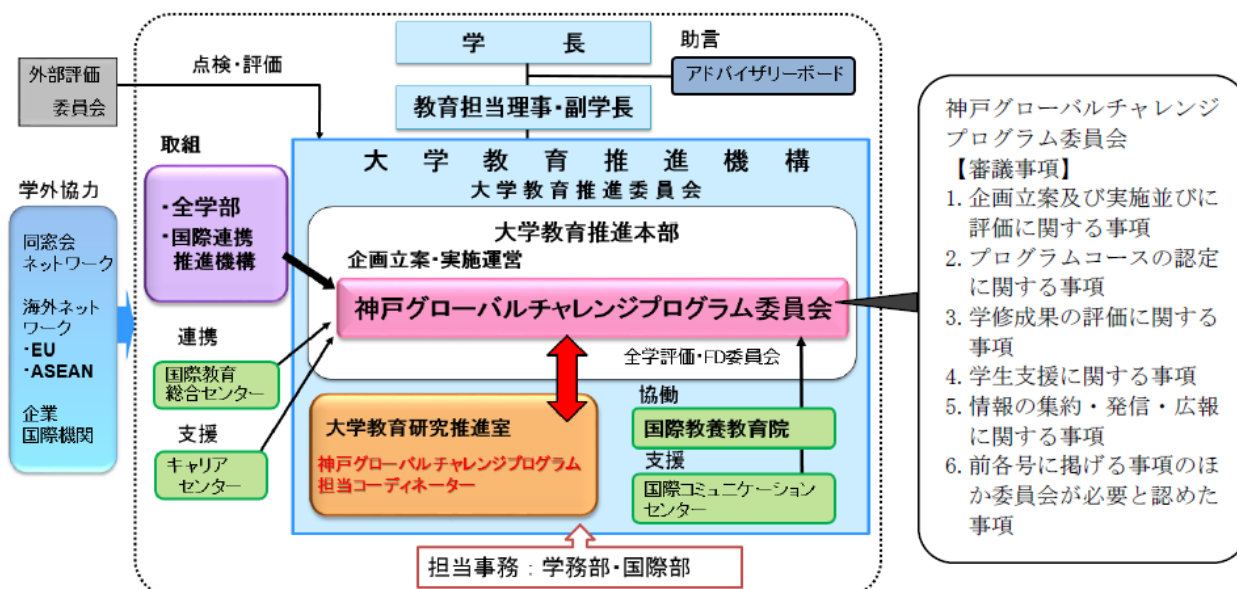
### (5) 学生の主体的な活動企画

本プログラムに参加した学生は、海外等のフィールドの中で活動を行った経験に基づき、問題意識を高め、課題解決に向けた意欲を高めることが期待できる。また、合同報告会等における学修成果の報告、アクティブ・ラーニングの拡大及びラーニングコモンズ整備によりプログラム不参加学生への波及効果を期待される。これらの取組により、学修意欲の高い学生による自主ゼミやセミナー、海外フィールドワーク等の多様な主体的活動の増加が期待される。

## 1-3. 事業の実施体制

### 1-3-1. 学内の実施体制

神戸グローバルチャレンジプログラム実施体制図



### （１）神戸グローバルチャレンジプログラム委員会

本学の教学マネジメントを行う大学教育推進機構の下に、「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会（以下、「委員会」という。）」を設置している。委員会は、大学教育推進本部副本部長、国際教養教育院長、国際コミュニケーションセンター長、神戸グローバルチャレンジプログラムを実施する部局から選出された教員各１人、キャリアセンター長、国際連携推進機構国際教育総合センター長、大学教育研究推進室長、神戸グローバルチャレンジプログラム担当コーディネーター、国際部長、学務部長により構成し、本プログラムの実施責任者である大学教育推進本部副本部長（学長補佐（グローバル教育担当））を委員長としている。

委員会は、大学教育研究推進室及び国際教養教育院と協働し、本事業の企画・立案、運営及び実施について全学的な意思決定を行う。具体的には、各コースの審査・認定・予算配分及びプログラムの運営についての意思決定を行うとともに、自己点検・評価を行っている。

### （２）神戸グローバルチャレンジプログラムコーディネーターの配置

神戸グローバルチャレンジプログラム担当コーディネーター（以下、「コーディネーター」という。）を「大学教育研究推進室」に配置し、全学を対象としたコースの企画・立案や受入先との交渉、調整等を行い、平成 29 年度現在、9 つの国・地域でコースを設置している。また、海外での学外学修活動に必要な危機管理学修をプログラム全体で実施しているほか、緊急時対応シミュレーション訓練や各種 F D ・講演会等の企画・実施、本プログラムに関する説明会や参加学生による全体報告会・パネル展示、ホームページやパンフレットによる広報・情報発信等、コーディネーターが本プログラムの中心となり様々な取組を推進している。

### （３）大学教育研究推進室の役割

本学の教育全体を推進する「大学教育研究推進室」は、ルーブリック指標や学修ポートフォリオの作成・活用により、本事業における学修成果の明確化及び向上に努めている。また室に配置されるコーディネーターを中心に、教育的効果の高いプログラムの企画・立案を行っている。

### （４）大学教育推進委員会による適切性の担保

委員会において決定した本事業の人材配置については、本学の全部局教育担当責任者により構成され、全学における教育のマネジメントを行う「大学教育推進委員会」において審議・承認し、また委員会での決定事項を「大学教育推進委員会」にて報告・点検することで、その適切性を全学的に担保している。

### （５）全学評価・F D 委員会等における学内点検

本事業は、委員会のほか、全学の教育を担う「大学教育推進委員会」が事業の全体管理を、また、全学の教育評価・F D を担当する「全学評価・F D 委員会」が本事業の点検・評価・改善についての助言を行い、学内の P D C A サイクルを確立している。

### （６）適切な事業実施のための事務体制

本事業の業務は、全学の教育事務を統括する学務部、国際交流を担当する国際部及び各コースを実施する各部局が担当している。また、本事業に関わる予算については、学務部の会計担当部署による組織的な管理と適切な執行を行っている。

### （７）学内各種センターとの連携

学生のキャリア支援を行っている「キャリアセンター」は、企業との繋がりや、インターンシップ及びボランティアの実施、運営における豊富な経験を活かし、本事業の企画・実施部局への助言役や仲介役としてコースの円滑な実施を支援している。また、全学の外国語教育を担当する「国際コミュニケーションセンター」は、本事業の柱の一つである外国語能力の向上・強化に関わる教育プログラムを推進している。

### （８）同窓会及び海外同窓会ネットワークとの連携

国籍や専門を超えた本学の「海外同窓会ネットワーク（14 拠点：東アジア・東南、中央アジア・欧州）」等を活用してプログラムの更なる展開を行う。特に、海外同窓会ネットワークを統括している国際教育総合センターと密接な連携の下、これら海外同窓会ネットワークを活用して、派遣国を開拓し、プログラムの更なる拡充を目指している。

### （９）グローバル企業や国際機関との連携

国際機関やグローバルに事業を展開する企業と本学とのネットワークを最大限に活用し、連携して多様なコースを開発・実施しており、平成 29 年度は 7 学部等でフィールドワークやインターンシップなどの 11 コースを実施した。

### （10）アドバイザーボードの活用

社会の意見を本学の教育研究に反映させるため、平成 27 年度 4 月に学長の下に設置した「アドバイザーボード」を活用し、産業界・学界・官界・政界等の幅広い視点から本事業全体についての助言を受け、事業全体に反映させ、プログラムの質向上を図ることとしている。

## 1－3－2. 評価体制とPDCAサイクル

本プログラムの効果的な展開のため、「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会」において、各実施コース及びプログラム全体に関する自己点検・評価を行っている。また、全学の教育評価・FDを担当する「全学評価・FD委員会」が本事業を点検して評価・改善に関する助言を行うとともに、全学の教育を担う「大学教育推進委員会」が、事業の全体を管理し、学内のPDCAサイクルを確立している。

さらに、学外の有識者による本プログラムの点検・評価を行うために、国際的な活動実績のある社会人や国際交流の専門家、教育関係者等で構成される「外部評価委員会」を設置し、平成 29 年 2 月にはプログラム参加学生を交えて外部評価委員会を開催した。外部評価委員からは今後の取組に対する助言や指摘を受け、その意見をもとにより客観的な評価が可能となるようにループリックの見直しを行い、平成 29 年度より活用を開始するなど、外部評価の結果を次年度以降の本プログラムの改善へとつなげることができた。

## 2. 平成 29 年度の取組

## 2-1. プログラムの実施と自己評価

平成 29 年度において、本プログラムでは以下のとおり取組を行った。

なお、2-1-2 の自己評価においては、取組計画に対し 5 段階（「5：計画を大幅に超えて実施できた」「4：計画を十分実施できた」「3：計画どおり実施できた」「2：計画どおり十分に実施できなかった」「1：実施できなかった」）で評価を行った。

### 2-1-1. プログラム実施計画

平成 29 年度は補助金調書において次のとおりプログラムの実施を計画した。

#### ・平成 29 年度実施計画

（総論）本補助事業の本年度の目的は、補助事業全体の目的を達成するために、下記の取組を実施することである。

- 1）平成 27、28 年度に構築した本プログラムの各コースを実施する。実施に当たっては、平成 28 年度に実施した本補助事業の自己点検・評価、及び外部評価の結果を踏まえて、事業の改善や本プログラムの各コースの更なる充実を図るとともに、広報を充実することにより参加学生の増加を図る。
- 2）事業の継続・発展を目指し、平成 30 年度実施に向けて新たなコースの開拓・調査を行い派遣先の拡充を図る。
- 3）前年度参加した学生について、ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化を分析するとともに、さらなる国際的なフィールドでの活動へのチャレンジに繋げるべくプログラム意見交換会を実施し、学修成果やモチベーションの維持・向上を図る。

（具体的な取組内容）

- ①プログラム担当のコーディネーター等教職員を雇用する。
- ②プログラムに係るウェブサイトを保守・更新する。
- ③神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を開催する。
- ④プログラムの各コースを実施する。
- ⑤プログラム実施に係る TA や SA、学生補佐員を雇用する。
- ⑥学生受け入れ先の開拓・調査を行い、派遣先の拡充を図る。
- ⑦教職員への FD・SD を実施する。
- ⑧外国人講師を雇用し、学生向けの英語力向上セミナーを実施する。
- ⑨前年度参加学生とのプログラム意見交換会を実施する。
- ⑩全学部 1 年生を対象に英語外部試験を実施する。
- ⑪プログラム参加学生による全体報告会を実施する。
- ⑫次年度以降の事業の在り方について検討を行う。
- ⑬ルーブリックを活用して、プログラム参加学生の評価を行う。また、評価結果の経年変化を分析する。
- ⑭次年度実施するコースを神戸グローバルチャレンジプログラム委員会で認定する。
- ⑮事業の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において行う。
- ⑯次年度のプログラムに関するパンフレットを作成し、学生への配布と学内外への広報を行う。
- ⑰事業の点検を全学評価・FD 委員会、大学教育推進委員会において行う。

## 2-1-2. プログラムの取組実績・具体的成果

(総論)

【自己評価】4：計画を十分実施できた

### 取組実績

補助事業全体の目的を達成するために、平成29年度は主として次の①～③の取組を実施した。

- ①平成28年度の神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において認定された14コース（大学教育推進機構、国際文化学部、発達科学部、経済学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センターにて企画）で参加学生を募集し、うち11コースを実施した。計98名の学生が本プログラムに参加し、うち96名が海外で学外学修活動を行った。
- ②平成30年度に実施するプログラムのコースについて全学部で検討を行い、コース実施に向けて受入先との協議や実地調査を進めた結果、9月に開催した神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において計15コースを認定した。
- ③ルーブリック指標について、外部評価委員からの意見に基づき、各レベルの違いをより分かりやすくするとともに、高い水準で回答する場合にはそのことを示す具体的な内容を記述することで、ルーブリック自体をより客観的な指標となるよう改善を図った。さらに、本学の教務システムを用いて卒業時まで経年変化を測る仕組みを新たに構築した。また、本プログラムに対する学生の意見や要望を聞き取り、事業改善に向けた取組として、平成28年度のプログラム参加学生11名と教職員19名が出席して意見交換会を実施した。

### 具体的な成果

- ①平成29年度のコース実施に当たり、各種ガイダンスにおける説明のほか、4月には主として新入生を対象として前年度参加学生の活動成果報告会を組み込んだ説明会を実施（延べ460人の学生が参加）するなど広報を充実させた結果、海外コースへの参加者は前年度の75名から96名へと増加した。コース参加後のアンケートでは、参加コースについて非常に高い満足度（「満足」82%、「おおむね満足」16%）を得ており、海外での学外学修活動コースの充実を図ることができた。同アンケートでは、本プログラムへの参加を契機としたさらなる留学や関心を持ったテーマについて回答を求めている。この点に関しては、「より長期的な留学等に挑戦したい」「より深く学修したい」との回答がともに85%を超えており、長期留学等の国際的な活動への更なるチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標に対して、順調に成果が現れていると言える。
- ②新たな学外学修先の調査・開拓を進めた結果、計15コースで最大168名を募集することとなった。平成30年度参加学生への資金援助の一環として、JASSOの海外留学支援制度に申請し採択され、プログラム参加者数の増加に向けた運営体制を強化することができた。
- ③ルーブリックで高い水準で回答する場合にはそのことを示す具体的な内容を記述するよう改訂したことにより、客観性を高めることができた。例えば、「チームワーク力」については、これまでは水準のみを回答していたのに対して、「クラブ活動において、チーフとしての役割を確認し、組織をまとめるような言動や行動を心がけている」「夏休みにカンボジアに行って、日本人の参加者と海外の参加者とともに、子供に英語を教えるときの計画から実行までを担当し、うまくいった」など、具体的な根拠を記述することで、評価における客観性を高めることができた。また、前年度参加学生とのプログラム意見交換会を実施したことにより、参加学生は学修内容を振り

返ることで学修効果を定着させるとともに、学生同士がネットワークを構築し、刺激し合ってモチベーションを維持・向上させることで、更なる活動にチャレンジする意識を高めることができた。なお、平成 28～29 年度に海外での学外学修活動に参加した 158 名(実人数)のうち 13 名(対実人数比 8.2%)が本プログラムの別のコースに再チャレンジするなど、参加学生が海外での更なる活動にチャレンジしていることも確認できた。

#### (具体的な取組内容)

#### ①プログラム担当のコーディネーター等教職員を雇用する。

##### 取組実績

本プログラム担当のコーディネーターを大学教育研究推進室に引き続き配置し、また、事業実施を補佐する職員を雇用した。

##### 具体的な成果

本事業の中心的な役割を担うプログラム担当のコーディネーターを雇用したことで、コースの企画・立案・実施や受入先との交渉、調整を行うことが可能となり、学生の学外学修を順調に実施することができた。また、事務作業を補助するために非常勤職員を雇用したことで、円滑にプログラムを実施することができた。

#### ②プログラムに係るウェブサイトを保守・更新する。

##### 取組実績

各コースの募集案内や参加した学生の体験談、各種セミナーや研修の案内・実施報告など、本プログラムの取組に関する最新の情報をウェブサイトに掲載して学内外に広く情報発信した。

##### 具体的な成果

セミナーの案内やコースの紹介・募集などに加えて、学生の体験談や自己評価・外部評価の報告書を掲載するなどウェブサイトの充実を図った結果、本プログラムの詳細な内容を広く学内外に情報発信することができ、学内における本プログラムの認知度を高めることで参加学生を増加させることができた。

#### ③神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を開催する。

##### 取組実績

神戸グローバルチャレンジプログラム委員会を 7 回開催した。委員会では、平成 29 年度のコースの実施状況の点検、平成 30 年度実施コースの審査・認定、予算執行、参加学生の単位授与、関連する制度の整備、危機管理体制、学生及び学内外への本プログラムの周知方法の検討及びその他本プログラムの運営についての意思決定を行った。

##### 【平成 29 年度神戸 GCP 委員会 審議事項】

第 1 回委員会（平成 29 年 4 月 14 日(金)開催）

1. 平成 29 年度神戸 GCP 予算配分について
2. 学外学修活動実施コースの参加要項について

3. 学生の単位授与について
4. 平成 28 年度実績報告書について
5. 平成 28 年度外部評価報告書について
6. BEEF 及び BEEF VENTURE の活用方法について
7. 神戸大学基金の支給について

第 2 回委員会（平成 29 年 6 月 9 日（金）開催）

1. 大学教育再生加速プログラム（AP）平成 29 年度補助金学内配分額について
2. 緊急時対応シミュレーションについて
3. ホームカミングデイ記念式典での神戸 GCP の発表について
4. 平成 29 年度神戸 GCP フェアについて
5. プログラム目標能力に関する自己評価の改訂について

第 3 回委員会（平成 29 年 9 月 8 日（金）開催）

1. 平成 30 年度海外留学支援制度（協定派遣）の申請について
2. 大学教育再生加速プログラム（AP）中間評価調査について
3. 平成 29 年度大学改革推進等補助金（AP 事業）学内再配分について
4. 平成 29 年度神戸 GCP 参加学生との懇談会の実施について
5. 平成 29 年度神戸 GCP フェアの実施について
6. 神戸 GCP 指標「プログラム参加後の海外学修関連活動状況」の調査について

第 4 回委員会（平成 29 年 10 月 13 日（金）開催）

1. 平成 30 年度実施コースの申請及び認定について
2. 平成 30 年度 JASSO 奨学金の申請について

第 5 回委員会（平成 29 年 12 月 8 日（金）開催）

1. 平成 30 年度補助金配分方針について
2. 学生の単位授与について
3. 神戸 GCP 指標「プログラム参加後の海外学修活動状況」の調査について
4. 神戸 GCP 指標「学生の企画する活動数」の調査について
5. 平成 30 年度神戸 GCP フェアの実施について
6. チャレンジシート及びリフレクションシートの改訂について

第 6 回委員会（平成 30 年 1 月 9 日（火）～1 月 12 日（火）開催（持ち回り審議））

1. 平成 29 年度自己点検・評価について

第 7 回委員会（平成 30 年 1 月 31 日（水）～2 月 5 日（月）開催（持ち回り審議））

1. コース実施に関する申合せについて

## 具体的な成果

平成 29 年度のコースの実施状況の点検、平成 30 年度実施コースの審査・認定、予算執行、参加学生の単位授与、関連する制度の整備、学外学修時の危機管理体制、学生及び学内外への本プログラムの周知方法の検討及びその他本プログラムの運営について委員会が中心となり意思決定を行うことで、本事業を円滑に実施することができた。

#### ④プログラムの各コースを実施する。

##### 取組実績

平成 28 年度の神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において認定された 14 コース(大学教育推進機構、国際文化学部、発達科学部、経済学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センターにて企画)で参加学生を募集し、うち 11 コースを実施した。計 98 名の学生が本プログラムに参加し、うち 96 名が海外で学外学修活動を行った。

##### 具体的な成果

参加後のアンケートでは、参加コースについて高い満足度を得るとともに、本プログラムへの参加を契機としたさらなる留学や関心を持ったテーマについて「より長期的な留学等に挑戦したい」「より深く学修したい」との回答がともに 85%を超えており、長期留学等の国際的な活動への更なるチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標に対して順調に成果が現れていることが確認できた。

#### ⑤プログラム実施に係る TA や SA、学生補佐員を雇用する。

##### 取組実績

TA は本プログラムで企画・開講した総合科目 1「アジアへの誘い」にて講義運営補助、出席管理補助、資料整理等を行い、SA は学外学修帰国後の事後学修にて、全体説明会で行われる活動成果の報告発表及びパネル展示資料作成の指導補助にあたった。また、学生補佐員は大学全体の催事等でのイベント運営補助業務を行った。

##### 具体的な成果

アジアでの学外学修経験のある TA を雇用したことにより、自らの経験を活かして質問に答えることでアジアへの親近感をより湧きやすくなるなど、受講学生のアジアへの関心を促進させる効果があった。また、学外学修活動参加経験のある SA が事後学修の指導補助にあたることで、本プログラム参加学生の報告資料作成をスムーズに進めることができた。さらに、参加学生を学生補佐員として雇用し、学修成果の展示報告やホームカミングデイでの活動成果報告を行うことで、自己の能力を更に高めるよう意識づけられるとともに、他の学生にも刺激を与え、学修を牽引していく効果が得られた。

#### ⑥学生受け入れ先の開拓・調査を行い、派遣先の拡充を図る。

##### 取組実績

プログラムのコースの拡充のため、コーディネーター及びコース責任者等が、国内外の本学現地同窓会や協定校、大学関係者のネットワークを活用しつつ、学生の受入機関の調査・開拓を行った。

##### 具体的な成果

国内外の本学現地同窓会や協定校を中心に、大学関係者ネットワークの支援を受けつつ、現地の情報収集や現地調査を行い、受入先との協議を行うことで、学生の安全確保を踏まえた実施環境を整備することができた。また、海外の企業、国際機関、協定校等と受け入れについて協議を行うことで、学生の学外学修活動先の更なる拡充を図ることができた。

## ⑦教職員へのFD・SDを実施する。

### 取組実績

海外プログラム参加学生を帰国後どうフォローするかについて、専門家を招聘してFD・SDセミナーを実施し、プログラムに関わる教職員 29 名が参加した。また、学生海外派遣に関わる実践的な危機管理体制の構築に向けて、神戸グローバルチャレンジプログラム委員会が中心となり、本事業を担当する職員が参加する「緊急時対応シミュレーション訓練」を企画・実施した。

### 具体的な成果

海外プログラムから帰国した学生に対するフォローについて、他大学における具体的な取組・手法の紹介、それを踏まえた学内外の教職員による活発な意見交換の結果、参加者アンケートでは「知識が深まった」との回答が 95%を超える結果となり、事前・事後学修やその後の継続的な教育について理解を深め、本学の取組の改善に繋がる有意義な機会とすることができた。また、コース実施部局により実施した「緊急時対応シミュレーション訓練」では、緊急時の連絡体制を点検・確認して危機管理体制を構築するとともに、本取組を参考にして平成 30 年度からは全学的なシミュレーション訓練が実施されることとなり、学内への波及効果があった。

## ⑧外国人講師を雇用し、学生向けの英語力向上セミナーを実施する。

### 取組実績

外国人講師を雇用し、本プログラム対象者である 1・2 年次生を主に対象としたスピーキング力の向上に重点をおいた英語力向上セミナーを実施した。

### 具体的な成果

英語力向上セミナーを実施し、学生が事前学修期間中に外国人講師によるネイティブの英語に触れることで、語学面において、国際的なフィールドでの学外学修活動に取り組みやすくなった。また、正規の授業以外の場で実践的なスピーキング力を向上させる良い機会となった。

## ⑨前年度参加学生とのプログラム意見交換会を実施する。

### 取組実績

本プログラムに対する学生の意見や要望を聞き取り、事業改善に向けた取組として、平成 28 年度に実施したコースの参加学生と学修成果等の情報共有を行うプログラム意見交換会（参加学生 11 名、教職員 19 名）を 1 月に実施した。

### 具体的な成果

前年度参加学生とのプログラム意見交換会を実施したことにより、参加学生は学修内容を振り返ることで学修効果を定着させるとともに、学生同士がネットワークを構築し、刺激し合ってモチベーションを維持・向上させることで、更なる活動にチャレンジする力を付けることができた。併せて、参加学生からの要望を聞き、今後の本事業の運営における改善点について検討を行うことができた。

## ⑩全学部 1 年生を対象に英語外部試験を実施する。

### 取組実績

全学部の新入生を対象に、4 月に英語外部試験（TOEIC または TOEFL）を実施し、1 年次生 2,621 名中

2,547 名が受験した。

### 具体的な成果

英語外部試験を受験させたことで、学生に自己の英語能力を認識させ、自主的な英語学修を促進することができた。また、英語外部試験の結果をプログラム参加学生の選考と事前学修に活用することができた。

### ⑪プログラム参加学生による全体報告会を実施する。

#### 取組実績

全学部 1・2 年次生を対象に、4 月に 5 回、10 月に 3 回、全体報告会を実施し、延べ 588 名が参加した。

### 具体的な成果

全体報告会を開催することで、学生同士がネットワークを構築し、刺激し合ってモチベーションの維持を図り、更なる活動にチャレンジする力を付けさせるとともに、学修内容を振り返ることで学修効果を定着させることができた。特に 4 月の報告会は、主として新入生を対象として開催した説明会の中に、参加学生による報告会を組み込んだことで、本プログラムの成果を広く学内にアピールし、より多くの学生にプログラムの周知を図ることができ、海外での学外学修活動への更なる参加を促すことができた。

### ⑫次年度以降の事業の在り方について検討を行う。

#### 取組実績

平成 29 年度の中間評価結果を踏まえ、危機管理やプログラム参加学生のルーブリック評価結果の経年変化の分析方法等について検討を進めた。

### 具体的な成果

危機管理については、引き続き学外学修先との連携を強化するとともに、本事業における取組「緊急時対応シミュレーション訓練」を学内でアピールすることにより、全学的取組へと発展させることとなった。また、ルーブリック指標による自己評価を本学の教務システムを用いて実施することで、卒業時まで経年変化を測ることができる仕組みを新たに構築することができた。

### ⑬ルーブリックを活用して、プログラム参加学生の評価を行う。また、評価結果の経年変化を分析する。

#### 取組実績

本プログラム参加学生が伸ばすことが期待される 3 つの力、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」について、外部評価委員からの意見に基づき改訂したルーブリック指標により、事前学修時及び事後学修時に参加学生が自己評価を行った。また、経年変化の分析のために、前年度参加学生に対して、本学の教務システムを用いて同じルーブリック指標による自己評価を 3 月末より開始した。

### 具体的な成果

ルーブリックを用いて評価を行うことで、本プログラムで身につけることが期待される 3 つの能力を統一的に測定することができ、コース参加学生に対して統一的な評価を行うとともに、本プログラムの教育効果を把握することができた。また、外部評価委員からの意見に基づき、ルーブリックにおける各

レベルの違いをより分かりやすくした。また、高い水準で回答する場合にはそのことを示す具体的な内容を記述するよう改訂したことにより、ループリック自体をより客観的な指標へと改善した。さらに卒業時まで経年変化を測るために、本学の教務システムを用いた新たな仕組みを構築することができた。

#### ⑭次年度実施するコースを神戸グローバルチャレンジプログラム委員会で認定する。

##### 取組実績

平成 30 年度に実施するプログラムのコースについて検討を行い、9 月に開催した神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において、実施コースを認定した。その後、平成 30 年度から開始する各コースの準備及び学生募集を開始した。

##### 具体的な成果

各部局が学生の活動先と協定等を交わして企画したコースを、教育効果の観点を踏まえて委員会で審査し、本プログラムにおけるコースとして認定することで、本プログラムにおける各コースの教育の質を保証することができた。また、平成 30 年度からは平成 29 年度に新設した国際人間科学部が加わり、6 部局等（大学教育推進機構、国際人間科学部、理学部、工学部、農学部、国際教育総合センター）で 15 コースを実施することとし、本事業の継続・発展を図ることが可能となった。

#### ⑮事業の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において行う。

##### 取組実績

1 月の神戸グローバルチャレンジプログラム委員会において、事業全体及び各取組部局の実施状況について自己点検・評価を依頼し、その結果をとりまとめて確認することとした。

##### 具体的な成果

プログラム全体の運営体制、平成 29 年度に実施した各コースの取組状況、ループリックに基づく参加学生の自己評価及びプログラム参加後のアンケート結果により本プログラムの実施状況を点検した結果、多くの学生は本プログラムへの参加を通じて「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、「学びの動機づけ」を得て「主体的な学修姿勢」を身につけており、本プログラムの目標達成に向けた活動は計画どおり進行していることが確認できた。

#### ⑯次年度のプログラムに関するパンフレットを作成し、学生への配布と学内外への広報を行う。

##### 取組実績

次年度のプログラムに関するパンフレットを 8,000 部作成し、全学の 1・2 年生に配布するとともに、全国主要都市で開催した入学説明会にて全国の SGH 指定校や近畿圏の主要高等学校などに対してパンフレットを配布するなど、学修活動の新規受入先や受験生に対してもパンフレットを配布し、本プログラムの広報を行った。

##### 具体的な成果

本事業の具体的な取組や手続き、募集についての情報を本学の学生に周知することができた。また、パンフレットを用いてコースの内容や実績をアピールすることで、学外学修先の新規開拓を行うとともに、本学を志望する受験生にもアピールすることができた。

⑰事業の点検を全学評価・FD 委員会、大学教育推進委員会において行う。

取組実績

5 月の大学教育推進委員会において、前年度の自己評価・外部評価の結果を報告・点検した。また、8 月には本事業の中間評価を受審するとともに、平成 29 年度の自己点検・評価を神戸グローバルチャレンジプログラム委員会で実施し、中間評価の結果とあわせて学内の委員会に報告することとした。

具体的な成果

本プログラムを本学の全学的な委員会で点検することで、PDCA サイクルを適切に実施するとともに、外部評価委員会における事業の点検結果を受けて、より客観的な評価が可能となるようにループリッックを見直し、平成 29 年度より活用を開始するなど、外部評価の結果を次年度以降の本プログラムの改善へとつなげることができた。

## 2-2. 各コースの実施と自己評価

神戸 GCP における学外学修コースについては、プログラム委員会で実施について認定を行うこととしており、平成 29 年度に学外学修を行うコースとして 14 コースが認定された。そのうち、11 コースについては平成 29 年 7 月～9 月、及び平成 30 年 2 月～4 月に海外で学外活動学修が行われた。

なお、自己評価においては、取組計画に対し 5 段階（「5：計画を大幅に超えて実施できた」「4：計画を十分実施できた」「3：計画どおり実施できた」「2：計画どおり十分に実施できなかった」「1：実施できなかった」）で評価を行った。

## (1) ニューヨークのアートとファイナンスのフィールドワーク（ニューヨークコース）

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：10 名
- ・学外活動学修時期：平成 29 年 9 月
- ・学外活動学修先：アメリカ合衆国・ニューヨーク市

### 《学修目標・期待される効果》

ニューヨーク市内のフィールドワークに向けた事前の調査プランづくり、現地での実際のフィールドワーク調査、帰国後の報告会に向けた調査の分析をつうじて、参加学生たちは集団での討論能力、企画立案能力、交渉能力、実践的な英語の運用能力、危機管理能力、歴史にたいする想像力を総合的に涵養することが期待される。米国におけるアートとファイナンスの動態を学ぶことが学修目標である。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

ニューヨーク市立大学クイーンズ校に附属する語学学校 (ELI) に受け入れをお願いしただけでなく、クイーンズ校の the Division of Arts and Humanities の教員である Mari Fujimoto 氏との協議のもとで、クイーンズ校の学生有志の会である日本文化クラブ (JCC) との交流の機会を開拓した。

#### ・事前学修

平成 29 年度の第 2 クォーターの火曜日 4 時限と 5 時限に事前学修をおこなった。この事前学修では、ニューヨーク市内の各地域の特徴や交通機関の仕組みといった基本的情報のグループ学習にくわえて、各自の個人フィールドワークの構想を、パワーポイントをつかってプレゼンテーションさせた。プレゼンテーション後の質疑応答では、英語による質疑応答も採り入れた。また、ニューヨークのアートにかんする課題図書を設定した。

#### ・学外学修

語学学校の先生方のサポートを得つつ、複数の site visits を実施した。具体的な実施先としては、ルイ・アームストロングミュージアム（クイーンズ区）、テネメントミュージアム（マンハッタン）、自由の女神ならびにエリス島移民博物館（マンハッタン）である。また、現地にて在外研究中であった国際文化科学研究科の池上裕子准教授の支援を得て、ニューヨーク近代美術館におけるロバート・ラウシェンバークの回顧展に参加し、キュレーターから英語でレクチャーを受けた。

#### ・事後学修

平成 29 年の 10 月のお昼休みを中心に事後学修を実施した。事後学修では、学生企画活動である、クイーンズ校で知り合った日本文化クラブの学生のなかで本人が移民の一世ないしは二世の学生に対して、自分たちで考えた質問をもとにインタビューをおこない、それを動画に撮影したものの発表をおこなった。その発表を踏まえ、アメリカという国やそこに住む人びとについて全体で意見交換した。

#### ・学生が企画した活動

上記のとおり、参加学生たちはクイーンズ校で知り合った日本文化クラブの学生のなかで本人が移民の一世ないしは二世の学生にたいして、自分たちで考えた質問をもとにインタビューをおこない、それをスマートフォンの動画機能を使って記録した。参加学生 10 名が、3 つのグループにわか

れてこの活動をおこなった。それぞれ、香港、プエルトリコ、フィリピンに出自をもつ現地学生にインタビューをおこなった。

## 《自己評価・成果及び課題》

### 【自己評価】3：計画通り実施できた

当初の学修目標は、米国におけるアートとファイナンスの動態を学ぶことであり、これは経済学部が一定数参加し、経済学研究科の教員の協力も得ることを想定してのものだったが、実際には経済学部の学生の参加はなく、それにともない経済学研究科との連携は中止となった。そのためニューヨークコースとしてはアートのみを学修することに計画を変更せざるを得なかった。ただし、アートの学修という点に限れば、十分に計画を実施できたと言える。総じて、実施初年度ということもあり、多くの試行錯誤が事前、学外、事後のすべての段階で必要となった。

#### ・ループリック評価

事前と事後学修時のループリック評価を比較すると、2-1 や 2-2 の指標、つまり行動の見直しや苦手克服という点でスコアの上昇が観察された。具体的にはニューヨークコースへの参加を踏まえて長期留学への希望が深まったと推測される。実際に、このコースに参加した 10 名の学生のうち 5 名が、国際文化学部ないしは全学の主管する協定校への交換留学の内定を得ている。また、1-2 のメンバーとの協力の指標でも上昇が観察され、学生企画活動のインタビューにコメントのなかで触れている者が 2 名いたことは特記できる。

#### ・具体的な成果

具体的な成果としては上述のとおり、このコースに参加した 10 名の学生のうち 5 名が、国際文化学部ないしは全学の主管する協定校への交換留学の内定を得た点である。

#### ・今後の課題・改善点

参加者の匿名アンケートからもわかるとおり、語学学校の時間数を増やしてほしいという声は多かった。また、語学学校でのクラスがニューヨークコースの参加学生のみから編成され、他の国の学生との交流がとれない点にも不満が多く寄せられた。この点を改善するためには、ハイシーズンも避けて 8 月最初からニューヨークに出発する必要があるが、現行のクォーター制度では不可能である。次善の策としては、日本文化クラブとの交流の機会を増やすことが考えられる。

## 《その他》

#### ・派遣先の拡充 (H30)

クイーンズ校の the Division of Arts and Humanities の教員である Mana Kobuchi-Philip 氏と現地で打ち合わせ、次年度実施の際は Kobuchi-Philip 氏のクイーンズ校のクラスにも参加学生を受け入れていただく予定である。

#### ・非常勤職員の雇用

引率に際して学生補佐員を雇用した。この学生補佐員は、ニューヨーク市立大学クイーンズ校の交換留学経験者であり、事前学修にもゲストとして参加し、現地で生活しなければわからない危険情報や生活上の有益な情報を参加学生に伝達してくれたばかりか、現地での学外学修中には積極的に英語でコミュニケーションを現地の人々ととり、参加学生にとって上回生のロールモデルとしての役割を果たした。長期留学経験のある学生補佐員の雇用は、きわめて教育効果が高いと感じた。

## (2) ハンブルク異文化理解コース(ハンブルクコース)

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：6名
- ・学外活動学修時期：平成 29 年 8 月 1 日～8 月 31 日
- ・学外活動学修先：ドイツ・ハンブルク

### 《学修目標・期待される効果》

外国で一ヶ月間生活して異文化を体験し、その異文化を意識化することを目指す。差異を観察して要因を考察するとともにその差異に関連する課題について発見し、その解決に向けた方策を思考し議論する能力を学生に身につけさせることを学修目標とする。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

ハンブルク大学との協定を利用し、ハンブルク市内の強制収容所視察やハンザ都市リューベック見学などについて、ハンブルク大学教員と打ち合わせを行った。

#### ・事前学修

- ・学生の活動計画について発表し合い、参加者同士で情報を共有し協力できる体制を構築した。昨年度参加者に、フィールドワークの具体例について報告してもらい、質疑応答を行った。
- ・ドイツ語で自己紹介ができるよう指導した。
- ・異文化環境で生活する上で事前に知っておくべき知識を身に付けると共に危機管理について学んだ。

#### ・学外学修

ハンブルク大学ドイツ語サマースクールの参加の機会を利用し、自身の学修計画に基づき、ハンブルク大学の学生と交流しつつ、ハンブルク市内の施設等でのフィールドワークを行った。これまで当たり前だと信じてきたことが当たり前でない異文化環境で、差異を発見し、それについて参加者同士で意見交換した。

#### ・事後学修

派遣先での学修について振り返り、口頭での報告を行うとともに報告書を提出した。全学で実施される「グローバルチャレンジ合同報告会」に向け、ポスター発表の準備を行った。

#### ・学生が企画した活動

各自が企画して活動を行った（6件）

- ・車いす利用者が参加者の中におり、バリアフリーがどの程度なされているか調査した（駅や道路）。
- ・スポーツ文化の差異を知るために、サッカースタジアムでの観客同士の距離感を調べた。
- ・農学部学生は、スーパーで売られている野菜や果物の表示や売られ方について調査した。
- ・店員と客とのコミュニケーションの取り方について調査した。
- ・ドイツで看板や表示などで日本語がどの程度使用されているか調査した。

## 《自己評価・成果及び課題》

### 【自己評価】 4：計画を十分実施できた

#### ・ルーブリック評価

2項目で自己評価が上がった学生が2名、全項目で評価が上がった学生が1名いた。

#### ・具体的な成果

参加者同士が協力し合うことで、情報収集や議論において自分と違う視点での意見の重要性が学べた。また異文化に触れて物おじせずにコミュニケーションを図ることができ、次への学修の意欲が高まった。

#### ・今後の課題・改善点

全学部が対象であるため、参加者の授業にばらつきがあり、事前学修の時間の都合が合いにくい。また昼休みなども利用しているが学部間移動も簡単ではない。

## 《その他》

#### ・派遣先の拡充(H30)

今年度の実施時に、次年度実施についてもハンブルク大学教員にサポートをお願いした。またその際、日本人学校視察など活動拡充の可能性と問題点について意見交換を行った。

#### ・広報関係

学部ウェブサイトで情報を公開・学内数箇所にポスターを掲示・1年生のドイツ語全クラスでチラシを配布・説明会を実施

### (3) アジア・フィールドワークコース

#### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：5名
- ・学外活動学修時期：平成 29 年 9 月
- ・学外活動学修先：中国・上海市及び周辺

#### 《学修目標・期待される効果》

参加学生は、言葉や宗教、文化の異なるコミュニティにおいて自己表現方法を学ぶ。さらに現地の大学生、地域住民、地方行政など様々な立場の人々から協力を得ながら、自らが立案したフィールドワークを遂行し、その成果や体験を報告書にまとめ、発表するという一連のプロセスを学ぶ。これらの短期フィールドワーク経験を通して、国や地域をこえた様々な問題に対して、グローバルな視点とローカルな視点の多面的にとらえようとする探究心を育てる。そして、将来的には国際的な広がりをもった就職や研究活動へ目を向ける契機となることが期待される。

#### 《実施内容》

##### ・学生受入先の開拓・調査

上海交通大学の担当者と協議し、H31 年度以降の学修について、今年度同様の上海近郊に加え、雲南省におけるコース実施の可能性について議論した。また、H30 年度に実施するインドネシアのコースをふたつのサブコースにわけて実施するための調整を行った。

##### ・事前学修

日本と中国における水質の変化状況に関する事前学修を行った。

##### ・学外学修

中国の太湖を訪れ、水質調査を行い、日本国内の湖と水質パラメータの違いを理解した。また、上海郊外から中心部にかけての人々の生活様式の違いなどについて学んだ。学外学修の期間中、原則として上海交通大学の大学院生と行動をともにし、英語でコミュニケーションをとった。最終日には学外学修で学んだことについてのプレゼンテーションを上海交通大学で行い、先方の大学教員及び大学院生と内容に関するディスカッションを行った。

##### ・事後学修

学外学修について振り返り、水質や生活様式など学んだことに関するまとめを行った。

##### ・学生が企画した活動

特になし

## 《自己評価・成果及び課題》

### 【自己評価】 4：計画を十分実施できた

#### ・ルーブリック評価

多くの学生が、「学内外への活動へ参加し、自分の役割を担う」という点が向上したと自己評価した。また、「得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する」についても半数の学生が向上したと自己評価した。いくつかの項目では事前より事後の評価を下げた学生もいたが、全体としては評価が向上していた。

#### ・具体的な成果

現地を訪れ、現地の雰囲気を感じるというテーマを持って学外学習を行ったが、学生のリフレクションシートから、行ってみることでそれまで持っていた中国という国や人々に対する偏見がなくなるなど、一定の成果があったことが伺えた。また、受講生は毎日現地大学院生と行動をともにし、英語でのコミュニケーションを通じて、彼らと自分たちの考え方の共通性や違いについて知ることが出来た。

#### ・今後の課題・改善点

国に対するイメージの問題からか、参加者を集めるのに苦労した。渡航先の魅力を発信できるよう、広報活動をより充実させたい。

## 《その他》

#### ・派遣先の拡充(H30)

H30 年度に実施予定のインドネシアにおけるサブコースを開拓し、2 サブコースでの実施体制を整えた。

#### ・広報

来年度に向けて、コースのパンフレットを作成した。

#### (4) 理学グローバルチャレンジプログラム UPLB コース (理学 UPLB コース)

##### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：4名
- ・学外活動学修時期：平成 29 年 9 月 3 日～9 月 23 日
- ・学外活動学修先：フィリピン共和国国立フィリピン大学ロスバニョス校

##### 《学修目標・期待される効果》

基本となるサイエンスを学ぶだけでなく、異文化に身を置くことにより、自らの置く専門分野以外のサイエンスをも含めてより総合的に学ぶことによって、サイエンスの理解をさらに深化させる。

##### 《実施内容》

###### ・学生受入先の開拓・調査

受け入れ側との事前の打ち合わせが十分なされている。

###### ・事前学修

以下の内容の講義を行う。

- 1) 海外での安全について
- 2) 海外での健康管理について
- 3) フィリピンの生活と文化
- 4) タガログ語講座
- 5) コースの内容と注意事項

###### ・学外学修

- ・3 週間の英語語学研修 (LITE) プログラム(UPLB 農学英語コースとの共催) を受ける。原則、午前中 2 時間、午後 2 時間程度。
- ・平日は英語レッスン終了後(16:00～18:00) に UPLB 所属の進行補助学生と様々な交流活動を行う。この活動により状況に応じた活きた英語を学ぶ。また派遣期間中、数度のキャンパス内外での集団活動を行い植物園、国際稲研究所、化学研究所等を訪問・見学する。

###### ・事後学修

派遣先での学修について、振り返りを行い、リフレクションシートを作成・提出する。全学で実施される「グローバルチャレンジ合同報告会」に向け、プレゼンテーションの準備を行う。

###### ・学生が企画した活動

該当なし

##### 《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

###### ・ルーブリック評価

より積極性を獲得した学生もいることから、評価は上昇している。

###### ・具体的な成果

英語力の向上や積極性の獲得。

###### ・今後の課題・改善点

派遣先での健康管理についての周知をより徹底したい。

《その他》

・派遣先の拡充 (H30)

オーストリアのグラーツ工科大学と協議中

・FD・SD の実施

危機管理に関する訓練等

・広報関係

理学部 WEB において広報している。

<http://www.sci.kobe-u.ac.jp/gcp/index.htm>

## (5) 理学グローバルチャレンジ Nanyang/Sci コース (理学 Nanyang コース)

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：1名
- ・学外活動学修時期：平成 29 年 9 月 18 日～9 月 30 日
- ・学外活動学修先：シンガポール共和国南洋理工大学

### 《学修目標・期待される効果》

基本となるサイエンスを学ぶだけでなく、異文化に身を置くことにより、自らの置く専門分野以外のサイエンスをも含めてより総合的に学ぶことによって、サイエンスの理解をさらに深化させる。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

受け入れ側との事前の打ち合わせが十分なされている。

#### ・事前学修

アドバイザー教員指導の下、詳細な学修目標・計画を記入したチャレンジシートと企画書を提出する。危機管理オリエンテーションおよび OSSMA 講習会に参加し、安全管理について学ぶ。

#### ・学外学修

学修目標・計画に従い現地で学修を行う。60 分、120 分、60 分がセットになった科目を 5 科目 2 週間にわたり履修。

#### ・事後学修

派遣先での学修について、振り返りを行い、リフレクションシートを作成・提出する。全学で実施される「グローバルチャレンジ合同報告会」に向け、プレゼンテーションの準備を行う。

#### ・学生が企画した活動

該当なし

### 《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

#### ・ルーブリック評価

課外活動にも積極性が増すなどの効果を確認。

#### ・具体的な成果

国際評価の高い大学を体験し本学の教育の充実ぶりを認識。

#### ・今後の課題・改善点

きめ細かい事前指導に労力を要する。工夫が必要。

## 《その他》

### ・派遣先の拡充 (H30)

オーストリアのグラーツ工科大学と協議中

### ・FD・SD の実施

危機管理に関する訓練等

### ・広報関係

理学部 WEB において広報している。

<http://www.sci.kobe-u.ac.jp/gcp/index.htm>

## (6) ギャップターム海外協定校派遣コース

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：12 名
- ・学外活動学修時期：平成 29 年 9 月
- ・学外活動学修先：スウェーデン・リンショピン

### 《学修目標・期待される効果》

下記の各項の目標の達成による、「工学をグローバルに学ぶことへの動機づけ」が効果として期待される。

- ・英語コミュニケーション力の向上。
- ・英語による工学知識を習得可能とする能力の向上。
- ・国内外でのインターンシップ等や協定校での体験を通して日本，ひいては各自の進むべき方向性を見出し，広い視野を獲得すること。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

協定校。

#### ・事前学修

本学部教員や外国人留学生 TA 等によるカウンセリングと修学指導の下、各自の学修目標・計画を明確にしたチャレンジシートを作成し提出する。講習会等に参加し、安全管理、緊急時行動フローチャート等について学ぶ。

#### ・学外学修

本学部においては、第 2 年次第 2 クォーター（ギャップターム）に海外協定校への派遣、国内外グローバル企業研修を実施する。派遣先の海外協定校では、工学施設や活動状況の見学と体験，および関連企業等へのインターン研修などの体験学修を想定しているが，詳細な内容は相手側との折衝の上で決めることになる。また派遣時期や日数等についても，相手側との合意のもとに決める必要があるため，現時点では想定である。学生は、派遣期間中、自らの活動や学修内容を記録し、帯同教員と議論することで、学修の振り返りを随時行わせ、より深い気づき、学びへとつなげていく。

#### ・事後学修

派遣先での学修内容について振り返りを行い，リフレクションシートを作成、提出させる。各自のグローバル体験をプレゼンテーションとしてまとめてグループディスカッションを行い、その成果をワークショップ（工学部内に公開）、グローバルチャレンジ合同報告会等にて発表する。

#### ・学生が企画した活動

無し

## 《自己評価・成果及び課題》

### 【自己評価】 3：計画通り実施できた

#### ・ルーブリック評価

積極性が向上した。

#### ・具体的な成果

海外における研修では国際性やコミュニケーション力等について多くのことを学ぶことができた。

#### ・今後の課題・改善点

GCP 企業インターンシップへの参加について、もう少し積極的に活動できるように指導する必要がある。

## 《その他》

#### ・派遣先の拡充 (H30)

国立台湾大学への訪問

#### ・非常勤職員の雇用

工学英語入門にて非常勤講師を雇用

#### ・英語力向上セミナー

工学英語入門を開講

#### ・広報関係

プログラムに係るパンフレットの作成や4月初旬の説明会の開催

## (7) UPLB 農学英语コース (UPLB コース)

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：20 名
- ・学外活動学修時期：平成 29 年 9 月
- ・学外活動学修先：フィリピン・ラグナ

### 《学修目標・期待される効果》

日本人としての確固たるアイデンティティを持ちつつ、国際社会で活躍できる、グローバル人材を養成することが目標である。異なる文化・考え方に触れる中で、それらを尊重しながら自己表現できる国際性を兼ね備えた「人間的総合力」を体得することが期待される。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

受け入れ先の開拓・調査は特に行っていない。

#### ・事前学修

- 1) 海外での安全について (6/30, 7/7)
- 2) フィリピンの生活と文化, 海外での健康管理について (7/21)
- 3) コースの内容と注意事項 (7/28)
- 4) 出発直前打ち合わせ (9/1)

#### ・学外学修

UPLB にて英語の集中レッスンを受けるとともに、人前でプレゼンテーションをするときの技術と注意点を、アイコンタクトの仕方、ジェスチャーを含めて総合的に学んだ。毎日レッスンが終わった後の 4:00 から 6:00 までは、UPLB 学生とさまざまな交流活動を行った (Guided Interaction)。さらに、Makling Botanic Gardens (植物園)、UPLB Museum of Natural History (自然史博物館)、International Rice Research Institute (IRRI、国際稲研究所) 等を訪問し、最前線の自然科学・農学研究の現状を見学した。  
(9/3～9/23)

#### ・事後学修

- 1) レポート指導 (9/24～10/1)
- 2) 意見交換会 (10/18)

#### ・学生が企画した活動

毎日、夕食後の 19:00～22:00 は、UPLB 学生をチューターとした night session としたが、その具体的内容の立案は、神戸大学生に任せた。

## 《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】 4：計画を十分実施できた

### ・ルーブリック評価

次の2パターンの思考により参加学生は自己を評価していることがうかがわれる：（１）自己の成長を、事前評価時を基準に「水準が上がった」と評価（２）経験の中で具体的な目標を見つけたことにより、目標とすべき自己を基準として「水準がまだ十分には及ばない」と評価

### ・具体的な成果

学生のプレゼンテーション力が格段に向上した。国際的視野・積極性が身についた。

### ・今後の課題・改善点

Street foods を食べて腹痛を起こし、病院で治療をうけた学生が少なからずいた。現地での健康管理にさらに気をつける必要がある。

## 《その他》

### ・英語力向上セミナー

該当なし。UPLB で行われるので特に必要性は感じない。

## (8) EU フィールドワークコース (KUPES コース)

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：8 名（履修登録した 9 名の内 1 名は体調不良により学外学修前に辞退）
- ・学外活動学修時期：平成 30 年 2 月 24 日～3 月 8 日
- ・学外活動学修先：ベルギー・ブリュッセル及びルーヴェン、フランス・パリ、  
ドイツ・ミュンヘン及びベルリン、イギリス・ケント及びロンドン

### 《学修目標・期待される効果》

「日欧比較」をテーマに、学生自らが企画し、計画・実施することにより、日欧が抱える共通課題を深く知ること、及び現地に赴くことで、その解決に向けた方策を思考する能力を学生に身に付けさせることを学修目標とする。またフィールドでの実践活動を経て、さらなるチャレンジ精神が鍛えられ、3 年生後期からの交換留学につながり、学生の成長と飛躍が期待できる。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

履修生がグループ毎に設定する研究テーマに関わる日本及び欧州のフィールドワーク先を開拓すべく、複数回東京に出張し在東京の国際機関（OECD 東京センター、国連大学）、EU 関連機関（フランス大使館、日仏会館、フリードリヒ・エーベルト財団、イタリア大使館・文化会館等）を訪問し、日欧におけるフィールドワークへの協力を依頼した。今回の学外学修にて OECD 東京センターを通しパリ OECD 本部への訪問が実現する等の成果があった。

#### ・事前学修

4 つのグループに分かれそれぞれフィールドワークでの研究テーマと研究の問いを設定、KUPES 担当教員の支援を受けながら活動計画（フィールドワーク計画書）と学修目標（チャレンジシート）の作成や訪問先にアポイントを取る等グループで協力して活動準備にあたった。KUPES 科目「日欧比較セミナーⅡ」の授業の 1 コマを使いフィールドワークの計画発表会を行ない、他の KUPES 生及び欧州からの交換留学生よりフィードバックを受け計画を改善した。また、協定校である英国ケント大学の学生 8 名とオンライン（スカイプやライン等を利用）で交流し、4 つのグループに同大の学生が 2 人ずつ参加し研究テーマに関する意見・情報交換をおこなった（4 月 5-6 日にオンラインで合同プレゼンテーションを開催予定）。更に、2 月の渡航前に春季アカデミックイングリッシュキャンプを開催し英語力を強化し、更に現地での活動に役立つソフトスキルを磨くとともに、渡航中の安全管理を学んだ。

#### ・学外学修

活動計画に基づき、全員またはグループ毎にフィールドワークを行った。主な活動として、最初の渡航先のベルギーでは本学協定校の KULeuven との合同ゼミの開催と EU 機関（欧州議会、EESC）への訪問、次のフランスでは協定校のパリ 7 大学との合同ゼミの開催と国際機関（OECD、UNESCO）を訪問した。その後 2 つのグループに分かれ、移民・難民問題をテーマにするグループはドイツに行き協定校のベルリン経済法科大学、移民関連施設、現地日系新聞社等を訪問し、EU 経済（単一市場・Brexit）をテーマにするもう 1 つのグループはイギリスに行き協定校のケント大学、商工会議所、在英日系企業等を訪問し関係者から聞き取り調査を行った。また本学ロンドン同窓会のメンバーの方々が歓迎会を開催してくれた。

## ・事後学修

履修者は自身の活動を振り返り、フィールドワーク報告書とリフレクションシートを作成・提出し活動成果をまとめた。また4月のグローバルチャレンジ合同報告会にてプレゼンテーションまたはパネル展示にて活動成果を発表予定である。

## ・学生が企画した活動

該当なし

## 《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

## ・ルーブリック評価

本コースに参加した学生の事前・事後学修時のルーブリック自己評価を比較、平均して全項目において事後評価が以下の通り高まった（上昇率）。

チームワーク力

1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う（142%）
2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する（117%）

自己修正力

3. 自己を認識し他者への理解を通して自分の考えや行動を見直すことができる（92%）
4. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する（118%）

課題探究能力

5. 課題を見つけ、解決をはかる（127%）

## ・具体的な成果

事前評価と比べ事後評価に大きな伸びが見られた「チームワーク力：学内外の活動へ参加し、自分の役割を担うこと」（142%）及び「課題探究能力」（127%）について、学生がグループ毎に設定した研究の問いに対する答えを事前学習そして学外活動を通してグループ内で役割を決め協力して探究した結果と考えられる。各自の得意分野を生かし且つ苦手分野を補いながら協働で課題をこなしていくことでチームワーク力を実感し、また自分にはない他のメンバーの能力、考え方、行動から互いに学ぶ合うことが多かったと思われる。更に、フィールドワークにて現地在住の社会人から学生まで多様な人々と交流し多くの気づきや刺激を受ける中で、自分の得意・関心分野、及び将来のキャリアの可能性を考えるよい機会となり、先ずは今年秋からの長期留学に向け留学計画を立て準備を行うモチベーションが向上したと言える。

## ・今後の課題・改善点

事前評価と比べ事後評価が下がった「自己修正力：自己を認識し他者への理解を通して自分の考えや行動を見直すことができる」（92%）に関連し、協定校のKULeuvenとパリ7大学との合同ゼミの際に、英語によるプレゼンテーション、質疑応答やディスカッションにて、英語力、コミュニケーション能力、知識量の問題で相手と意見交換が期待通り上手く出来なかったこと、また、訪問先の有識者への面接調査においても同様に、英語による話の聞き取りや質疑応答に苦勞したことが課題にあげられる。来年度は、合同ゼミに向けプレゼンテーションだけでなく想定される質問やディスカッションのポイントを想定し、納得のいく議論が出来るよう履修生の指導を行う。また、履修生が訪問先機関・企業等及び面接相手について事前調査を十分に行い、相手の話を理解し深い議論が出来るよう事前学修を

強化したい。

#### 《その他》

##### ・派遣先の拡充 (H30)

今回訪問した本学協定校、及び EU・国際機関、企業等に対し、来年度の履修生の訪問の受け入れを依頼し基本的に了承を得た。

##### ・英語力向上セミナー

上記春季アカデミックイングリッシュキャンプを 2/14-15 (1泊2日の合宿)、及び 2/19-23 (学内) で開催した。英語ネイティブの KUPES 担当教員と外部講師により、学生の英語力に応じて 3つのレベルに分けて英語 4技能と EU に関する基礎知識を英語で修得した。

##### ・広報関係

本コースの内容と学外報告を KUPES のパンフレットやウェブサイトに掲載し、更に全 KUPES 履修生が登録する Facebook の非公開グループに活動内容を適宜アップした。来年度のコース履修対象者となる KUPES に選抜された現 1 年生に対しても、KUPES の説明会やオリエンテーションにて本コースを紹介し履修を促した。

## (9) グローバルチャレンジコース（学生企画型）（グローバルチャレンジコース）

### <前期>

- ① スイス/グローバルチャレンジコース
- ② メキシコ/グローバルチャレンジコース
- ③ カナダ/グローバルチャレンジコース

### <後期>

- ④ オーストラリア/グローバルチャレンジコース
- ⑤ フィリピン・ドイツ/グローバルチャレンジコース

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：① 1 名，② 2 名，③ 13 名，④ 3 名，⑤ 1 名
- ・学外活動学修時期：
  - ① スイス H29. 7 月中旬～8 月上旬
  - ② メキシコ H29. 9 月初旬～下旬
  - ③ カナダ H29. 9 月初旬～下旬
  - ④ オーストラリア H30. 2 月中旬～3 月中旬
  - ⑤ フィリピン・ドイツ H30. 3 月上旬～中旬，3 月下旬～4 月上旬
- ・学外活動学修先：
  - ① スイス/サンティエ
  - ② メキシコ/リコン・デ・グアヤレス
  - ③ カナダ/バンクーバー
  - ④ オーストラリア/パース
  - ⑤ フィリピン・セブ，ドイツ・ベルリン

### 《学修目標・期待される効果》

【学修目標】渡航国の社会が抱える課題や現場について知見を深めることができ、それを基に上位学年での専門分野の研究などにつなげていく。また、単身渡航で自分の中で不便なところにある一定期間、身を置くことになるため、自己を見つめ直し、自分を知る機会となり、現地での社会生活で立ち足るであろう様々な壁を一つ一つ乗り越えていく方策を思考する能力を身につける。

【期待される効果】学生自らが海外学修活動を企画立案，受入機関と交渉を行うことで，社会人としての対応の仕方などを学ぶことができる。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

- ・コースオプションとして提案できそうなプログラムを持つ教育関連エージェントと随時打合せを行っている。
- ・一度本プログラムに参加した学生は海外活動について見えてくる視野や希望が広がるため、自分たちで企画を立てるよう促進
- ・学生団体 AISEC との連携

#### ・事前学修

- ・渡航国の概要，学外学修テーマに沿った渡航国の現状についての講義
- ・自分の関心や専門性，もしくは学外活動テーマに即した渡航国に関する発表
- ・活動先での活動内容の企画，準備（必要であれば資料作成）

- ・チャレンジシートの作成，本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・本プログラム危機管理学修（または参加プログラム提供団体の危機管理オリエンテーション参加）及びOSSMAオリエンテーション受講
- ・参加プログラム提供団体の渡航前オリエンテーション（都合がつく場合）

#### ・学外学修

（コースカテゴリ別で）

##### ＜学生企画型＞

学生自身が渡航したい国，取組みたい活動など，個々の関心に基づき，学外学修先，渡航時期，現地活動計画を決定した。

渡航先と現地活動内容は次の通り

- ・スイス：青少年対象のアートワークショップのサポート
- ・メキシコ：ウミガメ保護
- ・カナダ：地域サポート
- ・オーストラリア：公立中高等学校での日本語授業アシスタント
- ・フィリピン：現地フェアトレード団体及びその団体が支援している団体の視察
- ・ドイツ：夏のワークキャンプの運営準備

#### ・事後学修

（全コース共通で）

- ・活動の振り返りと共有
- ・活動報告書作成
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成，本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での報告発表やパネル展示での活動成果報告ポスターの作成

#### ・学生が企画した活動

オーストラリア：日本文化紹介発表2件，カルタ制作1件

### 《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

#### ・ループリック評価

##### ＜チームワーク力＞

- ・学外学修先は様々な国籍の人たちとの協働作業になるため，チームワーク力で確認している要素について学修先は異なれど，帰国後の評価は，全員まんべんなく水準を上げている。

##### ＜自己修正力/課題解決力＞

- ・帰国後の評価は，こちらもほぼ全員水準を上げている。

#### ・具体的な成果

- ・アカデミック面での自分の強み（特定分野の知識や英語以外の外国語能力）を身につけることの重要性の認識機会となった
- ・日本の美点の再認識

・チャレンジ精神の醸成

・ 今後の課題・改善点

本コースへの学生の参加促進のために、提携プログラムを增強し、活動オプションを増やす

《その他》

・ 派遣先の拡充 (H30)

- ・ 教育関連エージェント等で提供されているプログラムを調査中
- ・ すでに大学教育推進機構コースに参加した学生たちが本プログラムの要件に合うコースを作成し、参加学生を募集し、活動を実施することができるようにしていきたい。

・ 非常勤職員の雇用

- ・ 学生補佐員の雇用：延べ 41 名
  - ⇒ 全体説明会及び活動報告ポスター展示とその広報活動（4 月）、全体報告会及び活動報告ポスター展示（10 月）、ホームカミングデー（10 月）、国際教育総合センター主催留学フェアでの活動報告（11 月）
- ・ SA の雇用：延べ 1 名
  - ⇒ 帰国後の事後学修にて活動成果報告資料作成指導（10 月）
- ・ TA の雇用：延べ 1 名（12～2 月）
  - ⇒ 本プログラムで企画、開講した総合科目 1「アジアへの誘い」にて講義補助、出席管理補助、資料等整理
- ・ 非常勤講師の雇用：延べ 2 名
  - ⇒ 英語力向上セミナー指導（6～7 月）、前記「アジアへの誘い」（オムニバス形式）第 3 回目の授業にて講義（12 月）
- ・ ゲストスピーカー：延べ 2 名
  - ⇒ GCP 講演会登壇（6 月）、前記「アジアへの誘い」第 2 回目の授業にて講義（12 月）

・ FD・SD の実施

- ・ 6 月、アフリカ・ケニアにあるスラム街で貧困家庭の子どもたちが通う学校を運営している早川氏をお招きし、GCP 講演会を開催。スラムの生まれる背景と現状及び同校の子どもたちの成長について知る機会とし、学生を含め、教職員約 20 名程度が参加。
- ・ 3 月、名古屋大学国際機構 国際教育交流センターの岩城教授をお招きし、FD セミナー「海外プログラム参加学生を帰国後どうフォローするか～仕掛け作りとその展開～」を開催。セミナーの前半は、海外プログラムから帰国した学生のフォロー等に関し、名古屋大学の取組みについての講演を行い、後半は、学生の学修意欲維持などのフォローの仕方について、参加者と岩城教授との間で、活発な意見交換、質疑応答が行われ、教職員それぞれの立場で海外学修帰国後、どのように学生をフォローしていくかを考察したり、手法のヒントを得た。海外プログラムの運営に従事する学内外の教職員約 30 名が参加。

・ 英語力向上セミナー

英語ネイティブ講師指導の英語のスピーキングに重点を置いたセミナーを、6 月下旬から 7 月下旬にかけ実施した。開講クラスは 2 クラス、小規模人数のレッスンで、週一日 1 コマ（90 分）計 4 日間開講した。参加学生は、一つ目のクラスが 15 名、もう一つのクラスが 26 名。

## ・広報関係

### ＜プログラムパンフレット及び専用 HP＞

11 月より新年度パンフレット作成作業。2 月中旬，完成。3 月下旬より学内配布開始

GCP 関連イベントの告知，実施毎にイベント報告を専用 HP に掲載。また，学外学修コース参加学生の体験談，参加学生告知等も専用 HP にて発信。

### ＜学外広報＞

- ・近畿圏主要高校へ本プログラムパンフレットを送付（4 月）
- ・首都圏及び阪神地域で開催される大学フェアで本プログラムパンフレット配布（6～9 月）

### ＜その他本学発刊掲載冊子/雑誌, 学内参加イベント＞

- ・大学案内 2017, p. 12, p. 17. S
- ・学生生活案内 平成 29 年度版, p. 72.
- ・広報誌「風」9 号, 2017. 7 月, pp. 14-15.
- ・ホームカミングデー記念式典参加（10 月）
- ・国際部主催海外留学フェア参加（11 月）

## (10) インターンシップチャレンジコース（募集型）（インターンシップコース）

### <前期>

- ① モンゴル/インターンシップチャレンジコース
- ② ベトナム/インターンシップチャレンジコース
- ③ インド/インターンシップチャレンジコース

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：① 2 名，② 1 名  
③は、募集した結果、参加者が催行人数に達さず、実施しなかった。
- ・学外活動学修時期：①H29.8 月下旬～9 月下旬 ②H29.8 月中旬～9 月初旬 ③未実施
- ・学外活動学修先：①モンゴル/ウランバートル ②ベトナム/ホーチミン ③インド/デリー

### 《学修目標・期待される効果》

【学修目標】海外での生活は、現地の人々のサポートがなければ円滑に社会生活が営めないという実体験を通して、渡航国/地域の文化、歴史、宗教、慣習、考え方を深く知り、現地の人々を尊重することが重要であるということを再認識すること。また、日本社会を外から俯瞰することで、日本の尺度、価値観等が全てではないということを知ると同時にグローバルパーソンに求められる要素を考察する。

【期待される効果】海外である一定期間同じ場所に身を置くことで、自己を見つめ直し、新たな自分を知り、キャリアパスを考えるきっかけとすること。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

- ・モンゴル：  
平成 29 年 9 月、現地の実施体制を見直すため受入機関を訪問、協議。受入体制を再構築
- ・ベトナム・インド：  
受入先調査に関しては、受入先機関の日本人責任者が日本に一時帰国中に国内で打合せ等を行った。

#### ・事前学修

（全コース共通で）

- ・渡航国の概要、学外学修テーマに沿った渡航国の現状についての講義
- ・自分の関心や専門性、もしくは学外活動テーマに即した渡航国に関する発表
- ・活動先での活動内容の企画、準備（必要であれば資料作成）
- ・チャレンジシートの作成、本プログラムで設定した 3 つの目標能力の自己評価
- ・本プログラム危機管理学修及び OSSMA オリエンテーション受講

#### ・学外学修

- ・ベトナム：日系コンサルタント会社での業務補助、工場視察や商談同行
- ・モンゴル：高専の日本語授業補助及び日本事情教育指導

### <参考>未実施コース

- ・インド：日本語学校での日本語授業補助

## ・事後学修

(全コース共通)

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成，本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での報告発表やパネル展示での活動成果報告ポスターの作成

## ・学生が企画した活動

特になし

## 《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】4：計画を十分実施できた

## ・ルーブリック評価

＜チームワーク力＞

インターン先では周囲と連携してタスク遂行するほか，言われたことをやるだけでなく，自分で考えアクションを起こすことも多く求められるため，学外学修を通じ，所属先で自分の役割を把握し，行動する力や連携してタスクを遂行する力が伸ばせたと認識。

＜自己修正力＞

渡航前は2.1について水準3と評価する学生有。課題評価か設問の意図が伝わっていないと思われる。渡航後は全員水準2と認識

また，2.2に関し，渡航中は自分の得手不得手を自覚するに至っていない学生もいる。渡航後は，これを認識した者もいれば，依然自覚に至っていない学生もいる。

＜課題挑戦力＞

自ら課題を見つけ，解決を図ることを意識していなかった学生もいたが，渡航後はそれぞれ水準を一つ上げスキルを伸ばしていることが伺える。

## ・具体的な成果

- ・社会的なスキルが醸成できた（柔軟性，積極性，視点の転換等）
- ・異文化理解の重要性を認識
- ・コミュニケーション能力の向上

## ・今後の課題・改善点

- ・未実施となったコースについて，次年度では実施できるよう参加学生を募集すること
- ・PBL型のインターン受入をしてくださる企業/団体を開拓すること

## 《その他》

### ・派遣先の拡充(H30)

上述の開拓意欲はあるものの予定なし

※その他の事項については、「(12) グローバルチャレンジコース（学生企画型）（グローバルチャレンジコース）」にまとめて記載。

## (11) フィールドワークチャレンジコース（募集型）（フィールドワークコース）

### <前期>

- ① ネパール/フィールドワークチャレンジコース
- ② マレーシア/フィールドワークチャレンジコース

### <後期>

- ③ ミャンマー/フィールドワークチャレンジコース
- ④ タイ・チェンライ/フィールドワークチャレンジコース
- ⑤ ラオス/フィールドワークチャレンジコース
- ⑥ タイ・バンコク/フィールドワークコース
- ⑦ マレーシア/フィールドワークコース
- ⑧ ドイツ/フィールドワークコース

### 《平成 29 年度コース実績》

- ・参加学生数：① 3 名，② 13 名，③ 1 名，④ 3 名，⑤ 5 名  
⑥～⑧は、募集した結果、参加者が催行人数に達せず、実施しなかった。
- ・学外活動学修時期：①H29. 9 月中旬～下旬  
②H29. 9 月上旬～下旬  
③H30. 2 月中旬～下旬  
④H30. 2 月下旬～3 月上旬  
⑤H30. 3 月上旬～3 月中旬  
⑥H30. 2 月中旬～下旬  
⑦H30. 2 月中旬～3 月下旬  
⑧H30. 3 月上旬～中旬
- ・学外活動学修先：①ネパール/カトマンズ，ダゲイン郡 ②マレーシア/クアラルンプール ③ミャンマー/ヤンゴン，マンダレー  
④タイ・チェンライ ⑤ラオス/ビエンチャン，ルアンパバーン ⑥タイ/バンコク  
⑦マレーシア/カンパ，スガイロン ⑧ドイツ/フランクフルト，デュッセルドルフ

### 《学修目標・期待される効果》

- 【学修目標】様々な人々との出会い，意見交換，活動を通じ得た多様な気づきから自身のキャリア形成を意識する機会とする。
- 【期待される効果】マスメディアによる報道ではなく，アジア及びヨーロッパの現在を自分の眼で見て確かめることを通し，ともすれば狭くなりがちな自身の考え方，近未来の自分のキャリアにインパクトを与える効果が期待される。

### 《実施内容》

#### ・学生受入先の開拓・調査

5 月にマレーシアを訪問し，学外活動受入先を開拓すると同時に，実施にあたり現地関係機関と連携するためのネットワーク作りを行った。

#### ・事前学修

（全コース共通）

- ・渡航国の概要，学外学修テーマに沿った渡航国の現状についての講義
- ・自分の関心や専門性，もしくは学外活動テーマに即した渡航国に関する発表
- ・学修国で予定されている交流等の活動内容の企画，準備（必要であれば発表資料作成）
- ・チャレンジシートの作成，本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・本プログラム危機管理学修及び OSSMA オリエンテーション受講

## ・学外学修

### ＜フィールドワーク型＞

#### ② マレーシア

英語ブラッシュアップ研修，日系企業，JETRO，現地政府機関（MIDA）訪問，マレーシア神戸大学同窓会メンバーや孤児院で子どもたちとの交流，2～3人のグループでの街頭リサーチとその分析結果について英語でのプレゼン，マレーシアの多民族多文化多宗教社会を象徴する場所や施設の視察

#### ③ ミャンマー

日本大使館，JETRO，日系企業，現地日本語教育機関（ヤンゴン外国語大学，マンドレー外国語大学，ティンミャンマーランゲージスクール）への訪問，ミャンマー神戸大学同窓会メンバーや現地大学生との交流，仏教遺跡視察

#### ④ タイ・チェンライ

本学 OB が経営するコーヒー農園での清掃ボランティア，少数民族との交流，日系食品加工工場視察見学，ゴールデントライアングルの歴史学修，メーファールアン大学日本語クラスでの交流。また，バンコクにて現地政府機関（保健省），国際機関（UNESCO），日系物流企業を訪問し，タイの食品管理政策，日本までのタイ産農産物/加工品の流通現場について知見を深めたり，タイ山岳少数民族の実情等を学んだ。

### ＜ボランティア型＞

#### ① ネパール，⑤ ラオス

山間部の公立小学校で青少年活動や美術・工作指導。また，日本政府機関（JICA，日本大使館）を訪問し，両国における日本の経済支援状況，展開中の事業についてレクチャーを受けたり，農村部に行く前に都市部の公立小学校を訪問し，都市部の教育現場について知見を深めるとともに，教職員とともに日本と学修国の教育事情などについて意見交換を行ったり，地方の教育局を訪問し，その地域の教育事情，課題について意見交換を行った。

### ＜参考＞未実施コース

#### ⑥ タイ・バンコク/フィールドワークコース

チュラロンコーン大学にてタイ学入門のレクチャーを英語で受けながら，同大学の学生とバディを組みフィールドリサーチを行ったり，日系企業訪問をし，タイ駐在日系企業の現在を知る。

#### ⑦ マレーシア

トゥンクアブドゥル大学カンパーキャンパスにて英語集中研修と同大学スンガイロンキャンパスにて，華人村の入植の歴史を実際に漁村部，農村部にある華人村を訪問視察しながら学ぶ

#### ⑧ ドイツ/フィールドワークコース

フランクフルトで証券取引所や欧州中央銀行を訪問視察しヨーロッパ金融の事情を学ぶ。また，

デュッセルドルフでは在ドイツの日系企業や日本人学校、日本人街を訪問見学し、ヨーロッパ最大の邦人社会を見聞する。また、本学の同窓会ネットワークメンバーと交流し、海外勤務やキャリアについての意見交換会を実施予定だった。

#### ・事後学修

(全コース共通)

- ・活動の振り返りと共有
- ・リフレクションシートとフィードバックシートの作成、本プログラムで設定した3つの目標能力の自己評価
- ・全体報告会での報告発表やパネル展示での活動成果報告ポスターの作成

#### ・学生が企画した活動

- ・マレーシア：孤児院での日本文化交流活動1件  
(書道、茶道、ゲーム等)
- ・ネパール：村の公立小学校での青少年活動1件  
(折り紙、スポーツ大会、ボール遊び、歌)
- ・ミャンマー：日本文化紹介発表1件
- ・ラオス：日本文化紹介発表1件  
村の公立小学校での青少年活動1件  
(大縄、ボール遊び、折り紙、紙相撲とその工作、しゃぼん玉、ドッジビー、二人三脚、綱引き)

#### 《自己評価・成果及び課題》

【自己評価】3：計画通り実施できた

#### ・ルーブリック評価

＜チームワーク力＞

- ・渡航前の自己評価では、2項目とも水準1とする学生がほぼ半分以上を占めるが、帰国後では水準1の割合が半分に減り、水順2と自己評価する学生が半数以上となる。また、水準3も渡航前には10%ほどであったのが、帰国後は倍以上に増えている。

＜自己修正力＞

- ・チームワーク力とほぼ同じ傾向を示しているが、2.2については、渡航前にゼロだったものの、帰国後水準0と評価している学生がいる。

＜課題挑戦力＞

- ・上記2つと同じ傾向を示している。ただ、渡航前に水準0と自己評価した学生が帰国後も水準0と評価し変化が見られなかったり、渡航前に水準3としたものの、帰国後評価を下げている学生も見受けられる。

#### ・具体的な成果

- ・異文化理解力とコミュニケーション能力の醸成
- ・自分に足りないスキルや要素についての気づきを得た
- ・英語力があることの意義についての再認識した
- ・学修国での日本の評判を通じ、日本のブランド力の高さと信頼度などを再認識した

・ 今後の課題・改善点

- ・ 未実施となったコースについて，次年度では実施できるよう参加学生を募集すること
- ・ 語学学修を含めた学外学修コースを増やすか検討中
- ・ 欧米圏での学外学修コース作成する

《その他》

・ 派遣先の拡充 (H30)

カンボジアでの学外学修コース作成を検討中（なお，次年度コース申請としては未申請）

※その他の事項については、「(12) グローバルチャレンジコース（学生企画型）（グローバルチャレンジコース）」にまとめて記載。

なお、以下の3コースについては、募集した結果、参加者が催行人数に達さず、平成29年度は実施しなかった。

#### (12) カナダ・トロントの多文化社会研究(トロント大学コース)

##### 《平成29年度コース実績》

- ・学外活動学修時期：平成29年8月～平成29年9月
- ・学外活動学修先：トロント・カナダ

##### 《学修目標・期待される効果》

トロント市内でのフィールドワークに向けた事前の調査プラン作成、現地での実際のフィールドワーク調査、帰国後の報告会に向けた調査の分析を通じて、参加学生たちは集団での討論能力、企画立案能力、交渉能力、実践的な英語の運用能力、危機管理能力を総合的に涵養することが期待される。また、このトロント市のフィールドワークによって、グローバルな現代社会における移民等による非母語話者の言語使用、言語変容、多文化コミュニティの動態を多様な視点から学ぶことが、本コースの学修目標である。

#### (13) 国際産官学連携アドバンストコース（国際連携アドバンストコース）

##### 《平成29年度コース実績》

- ・学外活動学修時期：平成29年6月～平成29年10月
- ・学外活動学修先：ハノイ・ベトナム

##### 《学修目標・期待される効果》

海外協定大学での経済の専門性を高めるサマースクールに参加することで、経済学についての学習意欲を高めるとともに国際性が涵養される。

#### (14) 理学グローバルチャレンジTsinghua/Lifeコース（理学Tsinghuaコース）

##### 《平成29年度コース実績》

- ・学外活動学修時期：平成29年8月～平成29年9月
- ・学外活動学修先：中華人民共和国清華大学生命科学学院

##### 《学修目標・期待される効果》

基本となるサイエンスを学ぶだけでなく、異文化に身を置くことにより、自らの置く専門分野以外のサイエンスをも含めてより総合的に学ぶことによって、サイエンスの理解をさらに深化させる。

### 3. プログラム全体の自己評価 ―成果と課題―

### 3-1. プログラム目標能力に関する自己評価

本プログラムでは、参加学生が卒業するまでに身に付ける3つのチカラ（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）をループリックにより測定することとし、神戸GCP委員会で制定したループリック指標（表1）をプログラム全体で統一して利用している。参加学生は事前学修時、事後学修時に加えて、参加した翌年度以降も毎年1回、卒業時までループリックによる自己評価を行う。

平成28年度の参加学生が事前学修時と事後学修時にループリック指標に基づく自己評価を行った結果、コースへの参加により各能力がより高い水準へと向上したことが確認できた。一方、外部評価委員会（平成28年度末実施）において、ループリックを用いた自己評価については改善の余地がある旨の指摘を受けたことから、より客観的な評価が可能となるようにループリックの見直しを行い、各レベルの違いをより分かりやすくするとともに、水準2、水準3と回答した場合にはそのことを示す具体的な内容を記述するようにするなど、平成29年6月にループリック指標を改訂した。なお、平成29年度の参加学生だけでなく、平成28年度の参加学生も改訂したループリック指標により自己評価を行い、プログラム参加後の経年変化を測定している。

表1：ループリック指標（上段：平成28年度／下段：平成29年度以降（改訂版））

| H28 | 水準0     |                           | 水準1                                       |                               | 水準2                                      |                                        | 水準3                                  |                                      |
|-----|---------|---------------------------|-------------------------------------------|-------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|
|     | チームワーク力 | 他者とともに学ぶ                  | 一参加者としての段階                                |                               | 周辺の立場から運営に関わる段階                          |                                        | リーダー役やマネージャー役を果たす段階                  |                                      |
|     | 自己修正力   | 他者から学びとる                  | 他者からの指摘に耳を傾ける段階                           |                               | 指摘の意味を把握し自分のものとする段階                      |                                        | 自己の思考や学修方法を適切に修正できる段階                |                                      |
|     | 課題挑戦力   | 目標を見極める                   | 与えられた問題の解決に必要な能力を見極める段階                   |                               | 挑戦する価値のある課題を設定する段階                       |                                        | 課題を解決するための方略を策定し不断に挑戦し続ける段階          |                                      |
| H29 | 3つのチカラ  | 構成要素                      | 【水準0】<br>意識していない                          | 【水準1】<br>気づき                  | 【水準2】<br>分析・理解                           | 【水準3】<br>行動・成果                         | 記述（左の選択について、具体的に説明する。）               |                                      |
|     |         | 1 チームワーク力                 | 1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う                  | 水準1に達していない。                   | 活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。        | 活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。         | チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。   | 水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。<br>【記述】 |
|     |         | 1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する | 水準1に達していない。                               | メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。 | メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。 | メンバーと協力し、チームの目標を達成している。                | 水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。<br>【記述】 |                                      |
|     |         | 2 自己修正力                   | 2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる | 水準1に達していない。                   | 自分の考えや行動について認識している。                      | 自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。 | 自分以外の人の考えや行動を参考に、自分の考えや行動を見直している。    | 水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。<br>【記述】 |
| H29 | 3 課題挑戦力 | 2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する   | 水準1に達していない。                               | 自分の得意分野や苦手分野について理解している。       | 自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。        | 自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。    | 水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。<br>【記述】 |                                      |
|     |         | 3-1. 課題を見つけ、解決をはかる        | 水準1に達していない。                               | 解決すべき課題を見つけることができる。           | 見つけた課題を解決する方法を模索している。                    | 見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。                  | 水準2、水準3と回答した人は具体的な内容を書いて下さい。<br>【記述】 |                                      |

※ この「チームワーク」とは、神戸GCPで参加したコースにおけるチーム活動も含めますが、それ以外のチーム活動を想定した回答でも結構です。  
（例えば、クラブ活動、ゼミ活動など）

### 3-1-1. ルーブリック指標に基づく自己評価（平成 29 年度参加学生）

平成 29 年度参加学生が事前学修時（コース参加前）及び事後学修時（コース参加後）に行ったルーブリックによる自己評価結果は、表 1～5 のとおりである。

また、それぞれに関するコース参加前後の自己評価結果を比較したのが図 1～5 である。いずれの能力においても、コースへの参加によって向上したことが確認できる。

#### ① チームワーク力

事後学修時において「水準 3」と回答した学生が、1-1、1-2 それぞれ事前学修時より 15 ポイント程度増加した。水準 2 以上の学生は、1-1 では約 25 ポイント、1-2 では約 14 ポイント増加しており、全体では約 7 割の学生が事後学修時に水準 2 以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、

「フィールドワークで、メンバーで役割分担をして協力してプレゼンを成功させることができた」

「ボランティア活動で料理をつくる際、国や年齢も様々な仲間と相手を尊重しつつも、やってほしい

こと、アドバイスを伝え、また自らもそれを聞き、チームのとしての活動がうまくいっていた」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によってチームワーク力が高まったことが窺える。

#### ② 自己修正力

事後学修時において「水準 3」と回答した学生が、2-1 では 7.3 ポイント、2-2 では 13.4 ポイントそれぞれ事前学修時より増加した。水準 2 以上の学生は平均して 15 ポイント程度増加しており、全体では 6 割強の学生が事後学修時に水準 2 以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、

「語学学校で、最初の数日間は授業中に発言することはほとんどなかったが、間違いを気にせず積極的に発言する他国の学生を見て、自分も同じように積極的に発言するようになった」

「現地で見つけ出した課題を、その後継続的に学び生かそうとするかそこで終わらせてしまうかという点で自分は周囲の人より劣っていると感じ、克服すべきことだと思われた」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によって自己修正力が高まったことが窺える。

#### ③ 課題挑戦力

事後学修時において「水準 3」と回答した学生が、約 11 ポイント事前学修時より増加した。また水準 2 以上の学生が約 15 ポイント増加した。全体では約 55%の学生が事後学修時に水準 2 以上となっている。特に事後学修時の自己評価では、

「もともと寝る前に振り返り、課題を抽出することは癖のようにやっていたが、それを翌日挑戦できる外国で課題解決に積極的になった。小さなことからなんでもやってみることを大切にするようになった」

などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、これらのことから、コースへの参加によって課題挑戦力が高まったことが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

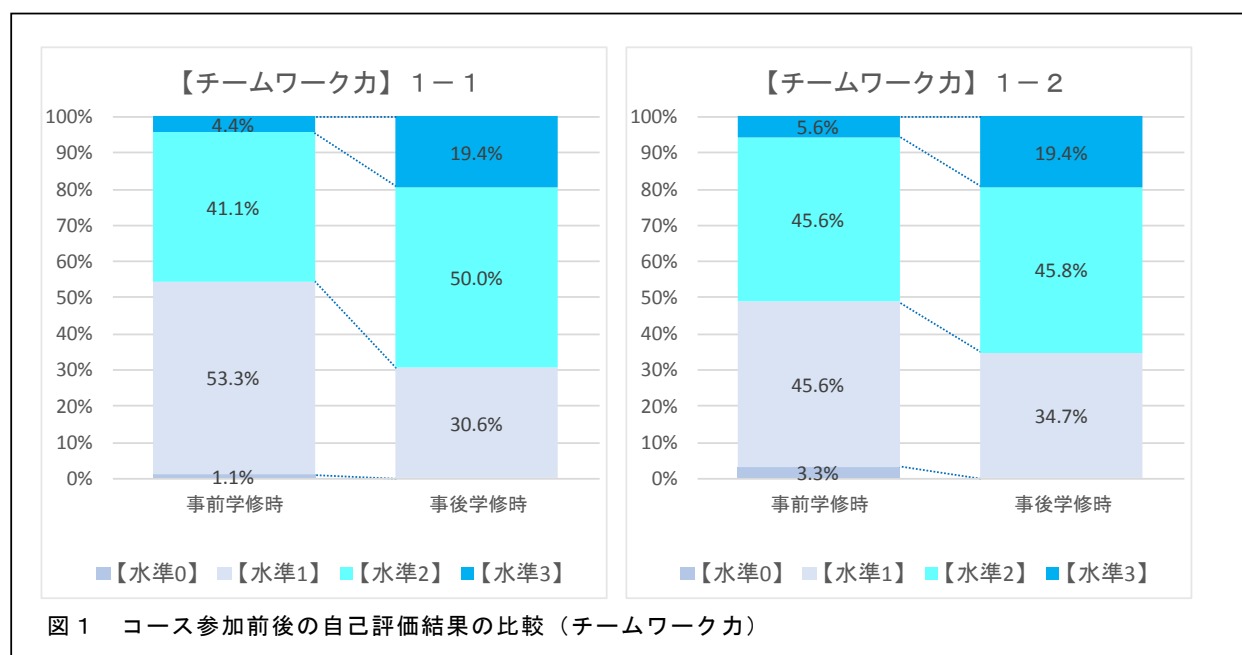
【チームワーク力】

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

|       |                                    | 事前学修<br>(人) | 事前学修時 | 事後学修<br>(人) | 事後学修時 |
|-------|------------------------------------|-------------|-------|-------------|-------|
| 【水準3】 | チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。 | 4           | 4.4%  | 14          | 19.4% |
| 【水準2】 | 活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。     | 37          | 41.1% | 36          | 50.0% |
| 【水準1】 | 活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。  | 48          | 53.3% | 22          | 30.6% |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。                        | 1           | 1.1%  | 0           | 0.0%  |

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

|       |                                          | 事前学修<br>(人) | 事前学修時 | 事後学修<br>(人) | 事後学修時 |
|-------|------------------------------------------|-------------|-------|-------------|-------|
| 【水準3】 | メンバーと協力し、チームの目標を達成している。                  | 5           | 5.6%  | 14          | 19.4% |
| 【水準2】 | メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。 | 41          | 45.6% | 33          | 45.8% |
| 【水準1】 | メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。            | 41          | 45.6% | 25          | 34.7% |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。                              | 3           | 3.3%  | 0           | 0.0%  |



—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【チームワーク力】 1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

●事前学修時

【水準3】

- ・インターンシップの事前学習において、自らの調査結果に基づき意見を表明し、メンバーと情報や意見の交換ができた。
- ・授業のグループワークで、自分の担当部分に取り組み、それについて発表している。

## 【水準 2】

- ・部活の先輩として相応しいよう、後輩の手本になるような行動をしている。
- ・部活内での発言などでは、発言する前に自分で、自分の立場上この発言をしてよいか自分で再考、または友人に確認してかれ動く。
- ・自分が上回生である場合、後輩に指導や指示ができる。
- ・ボランティア団体において役職の仕事の実行と達成
- ・企業研修では自分の得意な電気分野に関して意見を出したり、質問したりしている
- ・サークルの代表として団体を牽引しようと努めている
- ・ゼミの発表においては質問などを積極的に発言するように心がけている。
- ・メンバーでのイベントを定期的に開催し、プログラム開始前に友好関係を深める努力をした。
- ・インターン先での質問や、留学用のプレゼン作成
- ・GCP では、スウェーデンで行うプレゼンのリーダーとして、他のメンバーへ情報を共有したり、プレゼンについての意見をみんなに言うようにしている
- ・チームのメンバーが消極的で空気が暗いときは雰囲気明るくしようと尽力します。
- ・部活では次の運営の代として、ゼミ活動では早く先輩方に追いつけるように、物事を率先してしたり、積極的な発言を心がけている。
- ・サークル活動では次期副会長として同回生の意見をまとめ、どこか一方に偏った発言をしないようにしている。
- ・パワーポイントを用いた事前学習をまとめたプレゼンテーションなどを行った。友人のプレゼンテーションに対して皆で質問するなど参加した。
- ・部活動（オーケストラ）、留学生チューターの活動
- ・部活動においては、チーフマネージャーとしての役割を把握し、周りのことを考えて発言・行動している。
- ・国際文化・国際人間科学部の OESC プログラムにスタッフとして携わり、数ヶ月の準備期間で自分の役割を全うしようと行動した。
- ・チーム内での自らの立ち位置を理解し、その上でメンバーからどのような行動や発言を求められているか考えながら参加しています。
- ・友人と企画する際に、必要なことについて調べたり、提案したりしている。
- ・私は ESS という英語を使う部活に所属しておりそのうちの幾つかのアクティビティでリーダーをしており、みんなの意見をまとめてアクティビティを前に進めていけるように発言、行動しています。
- ・何か議論をする時、論点を見つめる姿勢。論点がずれることが不快なので、いつもずれた時は指摘するようにしている
- ・リーダーシップとフォロワーシップのどちらに徹するべきか考え行動をする。
- ・サークルで同期の代表として親睦を深めるために新年会を企画して、幹事となり開催しました。
- ・サークル活動の際、一回生という自分の立場を理解したうえで、プロジェクトの活動に取り組んでいる。
- ・自分が所属しているサークルの中で、1 回生ながら、自分には何ができるのか考えながら行動している。
- ・事前学習のプレゼンにおいて、アジアの国で気をつけねばならないことについて調べ発表した。
- ・サークルのプロジェクトでリーダーをすることになったので、決めなければならないことを把握し、質問や提案を投げかけ話を進める役割を果たしている。
- ・中学時代の部活動で部長をしていたため、部の顔となることを意識し行動した。

## ●事後学修時

### 【水準 3】

- ・リーダーとしてプログラムが円滑に進むように準備するようにする。積極的に質問することで自習をより実りあるものにする。
- ・ペアの人と協力してアポイントメント等を取ることができた。
- ・今回の研修では、自分の役割を積極的に質問をしてインタビューの流れをうまく保つことだと認識し、その結果良い答えや成果が得られたと考えるから。
- ・ヨーロッパでの経路を担当した。
- ・GCP のメンバーで企画して海外旅行に行った際、宿泊や食事の予約など役割分担をして、楽しい旅行にすることができた。
- ・部活動内で連盟委員の役割を任せられ、リーグ戦などが円滑に進むようにしている。
- ・クラブ活動での行事運営
- ・部活で遠征するときの宿泊先を決めた。LINE で話すのではなく、直接話すことが大事だと思った。
- ・ESSno
- ・ゼミの発表の時に司会進行役をつとめ、みんなにブレストしてもらってなるべく意見を活発化させるよう心がけ、結果見事3位だった。
- ・まず今回の渡航では団体行動が多かったので、他の人の足手まといにならないよう協力していました。基本ではありますが実は大事なことだと思います。
- ・普段から前に出るのが好きなタイプなのだが、自分を客観的にみて、今のチームに役割がないと考えたときは素直に引いて周りのサポートに徹する
- ・語学学校ではグループで活動する機会がたくさんあった。なるべく自分の意見を言うようにする努力をしていた。

### 【水準 2】

- ・部活動で、改善したほうが良いと考えたことをチームに伝え、改善した
- ・先生に与えられた役割をしっかりと認識している。
- ・2年生として、進んで活動しようとした。
- ・活動全体の部分的な要素を担っている
- ・インタビューの際には、RQ を解決するために質問や疑問を用意し、あらかじめ知識をメンバーと共有しておくことができた。一方で、その場での柔軟な質問を思いつくことができず、やや消極的な場面も見られた。
- ・今回のプログラムでリーダーをしたので、活動の段取りや分担を決めた。また、フィールドワークでは私が質問担当だったので、どう質問すればマレーシアの人たちが理解しやすいかなどを考えた。
- ・サークルのイベントの運営をする際様々な意見を出しながらよりよいものにしようとしている。
- ・アルバイトにおいて、自分の役割を認識し、果たしながら、自分の考えを周りに伝えている。
- ・自分に与えられた仕事はやりきるように意識している。
- ・その場の状況を把握して、自分がどういう発言、役割をするべきか考えて行動するようにしている。
- ・インターンにおいて、事前に調べ学習等を行った。
- ・事前学習や現地での課題等、グループメンバーと役割分担し、各々で責任をもって取り組んだと思う。
- ・リーダなどの役割は特にないが、周囲をなるべく見るようにし、その場に適した行動を心がけている。
- ・インタビューの時に、計画を立てた
- ・イベントの実行委員の代表を担い、その役割を意識して活動できている。

- ・積極的に質問をするよう努力しました。
- ・バレエの時に、大きいお姉さん、として小さい子に声をかけたり、ストレッチを手伝ったりできるようになった。
- ・学内の部活で、広報という重要な役割の担当を持ち始め、成果はまだ具体的ではないが、責任を持って取り組んでいる。
- ・活動で出た意見のまとめをしている
- ・バレーボールの部活で、まだレギュラー選手ではないが、試合中で声を出して応援したり、タオル、水を渡したり、コートの外から見た状況によってアドバイスしたりしようとしています。
- ・ディスカッションをするとき
- ・特に外国の人と協力するには自分の意見をしっかり言うことが必要と感じ、最年少ながら意見を言うていくことを意識した。
- ・チームにおける自分の立場を理解し、それを行動に移している。
- ・高校文化祭の茶道部のお茶会で後見を務めた、インターン先で自分の英語力を生かして翻訳の仕事
- ・集合から解散までの予定や日程を決める際、皆の状況や意見を聞いて、案を出す。
- ・サークルでの役職決めの会議の際、自分の立場なりに言える意見を積極的に発言しようとした。
- ・小学校での活動の際、一人になる子がいないように皆で遊べる雰囲気づくりを心掛けた。
- ・UPLBのプレゼンテーションのとき、ナレーター立場で演技の練習などをしなくてよいのでそのぶん、劇の設定の細かい部分を現地の大学生と打ち合わせしたりして。
- ・積極的に質問する
- ・あらゆる場面で心がけました。

## 【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

### ●事前学修時

#### 【水準3】

- ・メンバーで海外旅行に行き、問題解決能力や団結力を高める努力をした。
- ・チームの目標という、私の所属しているオーケストラでは、お客様に「すごい演奏だった」と言ってもらえるように日々練習しています。目標は演奏会ごとに達成していると言えるでしょう。

#### 【水準2】

- ・まず耳を傾ける事を重視し、チームに不和が起こらないように努めている。
- ・自分だけの意見を主張せず、周りの意見も参考にする。
- ・団体内でそれぞれが行っていることの情報共有を行い、不明な点を示し、理解に努める。チームの目標達成に協力する。
- ・部活動をする上で必要な仕事を分担して行なっている
- ・自身の意見を強行することなく、全員に発言の機会を与えている。
- ・サークル活動ではボランティアとして、特産物の販促を目指して活動している。
- ・サークル活動でチームリーダーをした時にチームのメンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んだ。
- ・前期に履修した専門科目の授業で、グループで調べて発表する際、話し合いと役割分担ができた。
- ・疑問点や解決策の共有

- ・プレゼンの内容などを意見交換して決めている
- ・ニューヨークでのフィールドワークに対して、メンバーのそれぞれが興味を持つ場所を調べて情報交換をした。
- ・神戸 GCP ではないが所属している少林寺拳法部において、各々の目標を大切にしながら、まとまった一つの団体として方向性を決めることや、大会、新歓イベントに積極的に取り組んでいる。
- ・上記のような状況において、メンバーの意見もしっかりと聞き、同意が得られる形での提案を心がけた。
- ・前に述べたように、サークル活動では対立した意見の両方を尊重しチーム全体で気持ちよく活動できるようにしている。
- ・プレゼンテーションに対して、メンバー同士で質問しあうなどした。
- ・自分とは全く異なる意見を受け入れ、チームが良い方向に向かうように柔軟性を持って考えることが出来る。
- ・部活でのステージマネージャー（当日責任者）としての職務を、ほかの係と協力し果たしている。
- ・サークルなどでダンスの指導などをメンバーなどを行うことによって目標に向かって頑張ったりしている。
- ・同プログラムにおいて、他のメンバーと意見を交わしながらプログラムをより良いものとするべく行動した。
- ・個々人の意見の相違を均していき、全員が納得できる案を進めるのが第一であるので、ディスカッションは丁寧に行なっています。
- ・部活動で仲間とときにぶつかり、励ましあいながらチームの目標に向かって努力している。
- ・国籍や職業、多様に生きる人たちの集まる NPO 法人・共存の森・でそれぞれの立場や考えを受け入れながら、積極的に自ら発言し、運営に携わっている
- ・クラブ活動の中の同じ系のメンバーで、合宿に向けて協力して準備を行なっている。
- ・上に書いていることと同じですが、まだ具体的な成果があるわけではないので水準2を選びました。
- ・部活で同じ部員の人たちとコミュニケーションを取りながら、ひとつの作品を作り上げている。
- ・相手の状況も考えること。
- ・部活動での練習メニューにおいて、目標を達成するためにどうすべきかをみんなで話し合った。
- ・事前学習における資料作成で、メンバーと共同作業を進めています。
- ・授業でのディスカッションで、メンバーの意見をそれぞれ尊重して最良のまとめができるように、例えば対立する二つの意見の妥協案を探ってアイデアをチームの皆に募ったり、自分で考えたりしている。
- ・実践農学入門で、グループで農家さんに師事し、メンバーと協力しながら活動している。
- ・クラブ活動ではチームの目標を達成するために、自分の意見を持ったりチームメイトから助言を受けたりした。
- ・野球サークルの活動で、チームメイトそれぞれアドバイスしあいながら、練習している。
- ・メンバーと意見を交わす際には、意見が食い違ってもまず自分の中に落とし込んで、すぐに反論しないようにしている。
- ・チーム間でコミュニケーションを頻繁にとることで、多様な意見が出て、成果はより充実したものになると思います
- ・インターンシップで、グループのリーダーとして新聞記事を書いた。
- ・部活動で対立が生まれた際に、両者の納得がいく方法を考え、話し合いの場を設けた。

## ●事後学修時

### 【水準 3】

- ・鷹の目の役割を意識して行動することを意識する。周りの状況を把握しながら自分の役割を果たせるようになった。協力しやすいように人間関係を早期に形成しようとするようになった。
- ・メンバーと協力し、様々なハプニングに対処した。
- ・授業において、積極的にグループでの会話を回すように意識した。フィールドワークにおいてもみんなで協力し、各自が役割や責任を持って取り組めた。
- ・アメリカに関する移民問題をインタビューによって学ぶことができた
- ・研修の現地でのグループワーク、寮のメンバーとの共同生活
- ・班員と予め質問内容を打合せて効率よく質疑応答を進めた。
- ・部活の仕事は1人で行うには多い仕事量なので、複数人で役割分担し、報告・連絡・相談は欠かさないようにしている。
- ・マレーシアでのフィールドワークで、メンバーで役割分担をして協力してプレゼンを成功させることができた。
- ・グループ発表などではメンバーの意見をもとに協力して準備している
- ・ネパールで折り紙を教える時に、作り方の手順をメンバーで作り、その手順のおかげで折り紙作りは成功したと思う。
- ・サークルで全体旅行の企画に携わったとき、皆が仲良くなれてかつ楽しめるような日程を考えていきました。サークルに入って間もない頃でうまくいくかとても不安でしたがほかのメンバーと協力して頑張りました。終わってから参加した子たちに楽しかったと言ってもらえて嬉しかったです。
- ・小学校での活動の内容を事前によく考え、日本の遊びをいくつか伝えることができた。

### 【水準 2】

- ・部活動の練習内容をしっかりとした議論によって決めた
- ・クイーンズカレッジの生徒へのインタビューの際、質問内容をグループの人と協力して考えました。
- ・自分から意見するだけでなく、周りの意見も尊重する。
- ・プレゼンの内容について、発表者と意見や情報を交換しあらかじめ共有する。また意見が食い違った時には、それぞれの情報を精査してアウフヘーベンする
- ・部活動で仕事をするとき、細かな点も連絡・確認しながら仕事を進めている。自分の担当する仕事を完全に1人で進めるのではなく、他の人の意見も取り入れて進めている。
- ・質問内容を2人で話して目標となる内容を調査することが出来た。
- ・アルバイトなどにおいて全体が一丸となれるような指導を後輩にしている。
- ・サークル活動において、相手の意見を聞き、自分の意見も伝えながら、話し合い、全員が納得のいく結論になるように積極的に働きかけている。
- ・自分一人では到底得ることができなかった量のNY現地の情報なども共有し、活動を進めました。
- ・学外研修での発表などで、メンバーと意思疎通を図りながら作り上げた
- ・積極的にメンバーの意見を考慮に入れようとした
- ・報告会などで協力して準備ができた。
- ・フィールドワークなど、限られた時間で仕上げなければならないときに、積極的に案を出し、スムーズに終わるように協力した。
- ・イベントの実行委員の代表として多くのスタッフが楽しめるように活動に取り組んでいる。

- ・ボランティア活動で料理をつくる際、国や年齢も様々な仲間と相手を尊重しつつも、やってほしいこと、アドバイス、を伝え、また自らもそれを聞き、チームのとしての活動がうまくいっていた。
- ・ネパールでみんなで折り紙を一緒に習って、手順を示すポスターを作って、そしてそれぞれ生徒たちのグループに入って教えました。
- ・反対側の意見もきく
- ・その都度周りの人が何をしたいか聞くようにしている。
- ・事前学習における発表で参加者がそれぞれどのような分野に興味を持っているのかを理解しようとし発表に関する質問もした。
- ・高校時代は弓道部部長としてメンバーの意見をまとめられたし、今回のプログラムでは英語での意思疎通をがんばった。
- ・自分は積極的な発言もするが、同時に人の意見も取り上げて議論を円滑に進めることができる
- ・参加したコースで、目標を達成するためにメンバーと活動について話し合うことで理解を深めようとした。
- ・仲間を信頼して、声を掛け合いながらモチベーションを上げつつ仕事ができる。
- ・1ー1と被ってくることはあるが、現地で子供たちとの遊びを成功させるために、出発前からこまめに連絡を取り合い、当日もメンバーとコミュニケーションをとりながら、活動に取り組むことができた。現地では予想していなかったことが起きても臨機応変に対応することができた。また、その日あった問題点を次の日には改善できるように考え、子供たちに楽しんでもらうことができたと思う。
- ・今回の GCP マレーシアコースではフィールドワークを行ったが、その中でうまくいかないことも多かったので、同じチームの人々と協力してその状況を打開できるように努力した。
- ・語学学校でのグループ活動で、英語で相手の意見を聞いたり自分の意見を伝えたりするのは難しかったがメンバー全員でグループ全体の意見をまとめることができた。
- ・最終プレゼンでの活動で主に心がけました。
- ・清掃や料理作り、片付けといった仕事は参加者と協力して行えた。朝食準備は時間通りに行き準備した。

表2 自己評価結果（自己修正力）

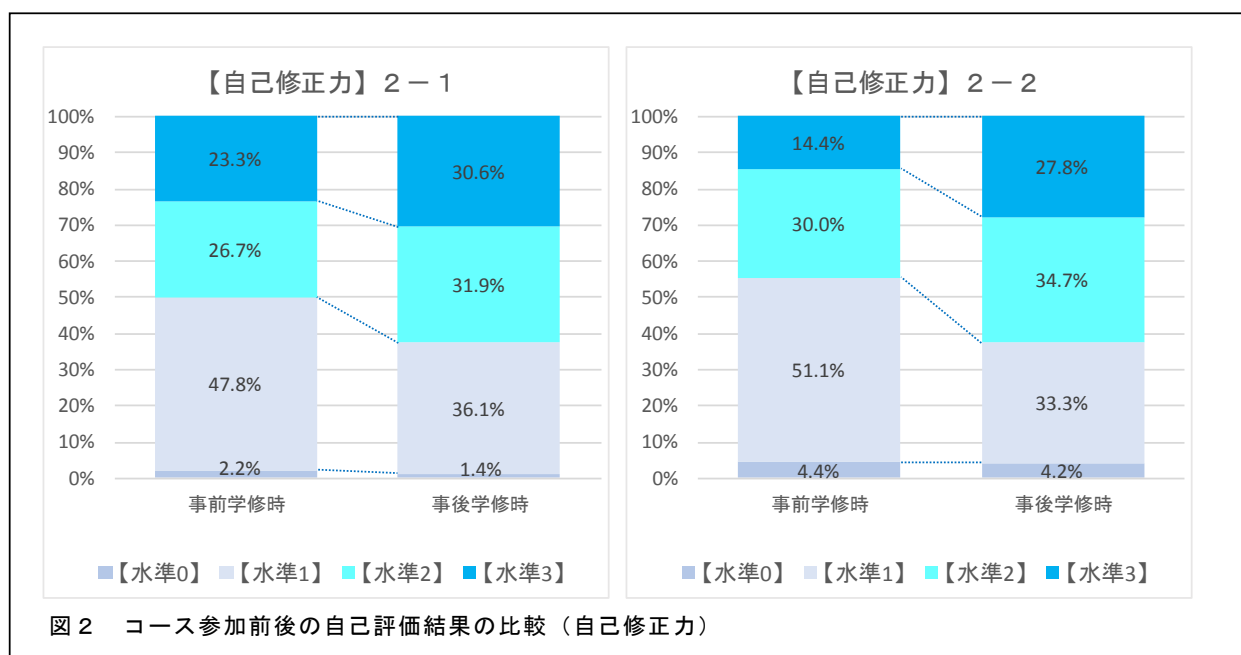
【自己修正力】

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

|       |                                        | 事前学修<br>(人) | 事前学修時 | 事後学修<br>(人) | 事後学修時 |
|-------|----------------------------------------|-------------|-------|-------------|-------|
| 【水準3】 | 自分以外の人の考えや行動を参考にして、自分の考えや行動を見直している。    | 21          | 23.3% | 22          | 30.6% |
| 【水準2】 | 自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。 | 24          | 26.7% | 23          | 31.9% |
| 【水準1】 | 自分の考えや行動について認識している。                    | 43          | 47.8% | 26          | 36.1% |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。                            | 2           | 2.2%  | 1           | 1.4%  |

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

|       |                                     | 事前学修<br>(人) | 事前学修時 | 事後学修<br>(人) | 事後学修時 |
|-------|-------------------------------------|-------------|-------|-------------|-------|
| 【水準3】 | 自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。 | 13          | 14.4% | 20          | 27.8% |
| 【水準2】 | 自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。   | 27          | 30.0% | 25          | 34.7% |
| 【水準1】 | 自分の得意分野や苦手分野について理解している。             | 46          | 51.1% | 24          | 33.3% |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。                         | 4           | 4.4%  | 3           | 4.2%  |



—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

●事前学修時

【水準3】

- ・古典をたくさん読んで、自分の生き方を見直している。
- ・自分の先輩の発言や行動を基に様々な先輩の良いなと思ったところや良くないと思った所を考え自分の行動に活かしています。

- ・自分以外の人のいいところを見つけ、良いところは自分の考え方や行動にとり入れるようにしている。
- ・話し合いのときに友達の意見を聞いて、自分の意見を考え直させられるとき。
- ・他人へのアドバイスや質問への答えをメモし、自分の学習振り返りへ利用する
- ・何事も主観ばかりでは自己満足にしかならないと思うので、客観的に見てくれる第三者をいつも置くようにしている。
- ・バイト先の4つ上の先輩を見て、社会人としてお客様に対してどうふるまえばよいのかを研究している。
- ・GCPの他のメンバーのインターンシップでの活動の様子に影響を受け、以前より積極的に質問、発言するようになっている。
- ・サークル活動で女子大生と神大生が対立した時に先輩方の経験を参考に双方が納得できる解決策を提案できる立場であるように自分を振り返るようにしている。
- ・部活動で見習いたい同期・先輩には自分から話しかけ、相手の良いところを自分に取り入れようとしている。
- ・相手の意見を尊重し行動することを心掛けている
- ・部活動において、先輩の言動・行動を見習い、そこから自分に足りないものを見直している。
- ・他人の行動を観察する事は自身の人間的に未熟な部分を理解することに繋がりますので、常に改善の参考にしています。
- ・部活内の先輩や同期の面白いと思った考え方やすごいなと思った部分はできるだけ真似するようにしている。
- ・人が注意されたことも自分に当てはめて聞いて改善しようとする。
- ・友達がやっていた面白い返しなどを参考にする。
- ・他人の行動を見て自分の行動を見直したり、よいものを取り入れたりしています。
- ・野球のサークルで、自分のできていないところを先輩等の動きを見て勉強をしている。
- ・上記と同じ

## 【水準2】

- ・他者の意見を尊重する。
- ・プログラムを通して自分が考えたことも無かったこと、反対だと思っていた意見に遭遇することがあったが、それらを受け入れ、自分の行動を見直してきた。
- ・より積極的に意見を出していくことが必要だと考えている。
- ・日欧比較セミナーのプレゼンでは、指摘に基づいて原稿やスライドに手を加える。
- ・サークルで自分のすべきことを明確にして改善しようとした。
- ・見直すべきことは理解しているが、自分の発言の後にそのことに気づくことも多い。
- ・自己学習や計画の甘さを、メンバーからの話を聞き認識し、改善しようとした。
- ・他人の考え方や行動と自分を照らし合わせて、自分に足りないことを考えることが出来る。
- ・考えすぎて行動がおそくなるが多々ある。しっかり考えてから動くことは大切であるが、そのマイナス面もあると自分で理解している。
- ・クラブ活動で先輩に教えてもらったことを実践しようとしている。
- ・高校のバレーボール部では厳しい上下関係があったので先輩たちの様子にちゃんと気を配って行動しないといけなくて、そしてできていないことがあればすぐに叱られていました。今大学の部活で、先輩が叱ることがないのだが、スポーツの技術も部活で先輩としての責任も、できていない時にすぐ自覚し、練習後日記を付け、反省するようにしています。

- ・日々の生活の中で、他者の観察、自分との比較を通して自分の欠点、改善すべき点を見つけ、把握している。
- ・自分のことをほったらかして世話焼きすぎる先輩を見て、まずは自分のことをきちんとできないと注意をしても説得力にかけると思い知った。
- ・自分を過信せず、他人の話を素直に受け入れる気持ちが大事だと思います
- ・自分の発言力が低いことを理解している。
- ・大学受験の際親に指摘されたとき、イライラして歯向っていましたが、今は意見を聞き入れられるようになった。
- ・自分以外の人への考えや行動の意味がわからなければ尋ね、自分の考えや行動に対する指摘は素直に受け入れるよう心がけている。

## ●事後学修時

### 【水準3】

- ・他大学の学生との交流を通し、視野を広げた
- ・活動中に他人のふるまいを見て自分の行動を振り返る。何でもやってみる。現地の人のように振舞ってみる。
- ・私と同じように大人しい性格でも、集団のなかで活躍している仲間を見て、自分だったらどう行動すれば良いのだろう、ということを頻繁に考える。
- ・ある人が起こした1つの行動に対しての周りからの評価を参考に自分を見直している
- ・英語でのコミュニケーションで支障があった際に、メンバーと協同するとともに、自らの語学力をあげるための反省を行い、改善に努める。
- ・語学学校で、最初の数日間は授業中に発言することはほとんどなかったが、間違いを気にせず積極的に発言する他国の学生を見て、自分も同じように積極的に発言するようになった。
- ・他のグループの人の良い質問方法等を吸収して自分の質問方法も改善できるようがんばった。
- ・他人のいいところは真似をし、悪いところは自分もしていないか見直すようにしている
- ・質疑応答等で積極的な姿勢を他のメンバーに見習った。
- ・GCPのメンバーは特に学業やそれ以外の活動に熱心な人が多く、みんなの経験談や考えを聞くことで自分がどうしたいか考え直すことができています。
- ・イベント実行委員の代表として活動するにあたり、他者のことを考えることが自分を見直すことにつながっている。
- ・部活で、他チームの様子を見て、自分がチームメイトの意見を尊重することで勝つことができた。
- ・ネパールの人は皆母国語以外の言語を2、3語話せるのに気づいて、1カ国語に甘んじている自分を直そうと思った。
- ・グローバルチャレンジプログラム中、コミュニケーション能力の高いメンバーを見て自分ももっと自分から話さなければと感じ、そう出来るよう努力した
- ・他人の行動をよく見て、よいものは自分に取り入れたり悪いものは自分にはしていないか我が身を振り返ったりしています。
- ・人と話をしていて、話が進まないときは相手と自分の間に考えの違いがあるということなので、そういったときにその人の考えを受け入れ必要だと思ったときに取り入れる。
- ・一緒にネパールへ行った3人と2週間ともに過ごしてきて、僕にはなく彼女たちにはあるものを多く知ることができ、その中から自分に合うものを吸収し、自分の行動や考えを考え直すことができた。この他人の良さを自分に取り入れるということは、それこそ苦手分野の克服にもつながってくると思う。

- ・現地の人が穏やかに暮らしている姿を見て、せっかちになりがちな私はもっと余裕を持って生きてもいいのかなと考えた。
- ・語学学校にいた人たちはみんな英語を上達させたいと思って来ているので、日本人でも私に英語で話しかけてくれた。なので、私もなるべく誰に対しても英語を使うように心がけていた。おかげで、時々英語でものを考えられるようになった。

## 【水準 2】

- ・授業内でより活発に発言することが大事だと実感しました。
- ・他者の意見を素直に受け入れる。
- ・様々な面においてこうありたいここを改善したいと思いながら生活している。
- ・サークル活動も、アルバイトも、上下関係にかかわらず、相手のよいと思った点は自分にも取り入れたり、自分の考えを見直したりしている。
- ・英語力
- ・現地で見つけ出した課題を、その後継続的に学び生かそうとするかそこで終わらせてしまうかという点で自分は周囲の人より劣っていると感じ、克服すべきことだと思わされた。
- ・外国人の友人と話すことで、自分の考えを伝えず、周りにあわせることが多いと認識した。
- ・GCP での他のメンバーが積極的に外国人と交流するのを見て、自分も英語力の向上を目指すために積極的にやろうと思った。
- ・計画性のないフィールドワークを行ってしまった
- ・特にこの研修では車いすの人と行動を共にすることが多かったのでバリアフリーの目線からものを見るが多かった。
- ・三週間まったく日本人、アジア人のいない環境に行くと、異文化理解と自己アイデンティティ、また自分の修正すべき点がとてもよく見える。
- ・他人から積極性を学んでいる
- ・部活で私はセッターという上がったボールをアタッカーにトスを上げるポジションです。この役割は個々のアタッカーの状況への把握とボールの好みをちゃんとわからないといけないので、これによって他人を合わせるために自分も調整しています。
- ・自分の短所を直そうとする
- ・常に周りを観察するようにしている。
- ・自分が悪いと感じたら素直に謝る
- ・今回の留学プログラムで初めて家族以外の人と長期間ずっと共に過ごしたので、自分が生活する中でどのような点が人よりも苦手かを意識できた（片付けができるかなど）
- ・友達が将来について真剣に考えていることを知って自分も将来について考えなければならないと思った。
- ・この3週間ではそのような機会が多く、自分のためになった。

## 【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

### ●事前学修時

## 【水準 3】

- ・得意分野、苦手分野に、より興味が持てるようにその分野に関して様々な活動をしている。
- ・留学に向け、英語学習を分野ごとに分けて取り組んでいる。

- ・苦手なことは、一度に複数のタスクをこなすことです。それを克服するために、わざと自分をマルチタスクな環境に置くことにしています。(勉強、部活、アルバイト)
- ・英語は好きだが、語彙が足りないので洋書を読んだり、英会話のレッスンに通ったりして語彙を増やす努力をしている。
- ・苦手なことは早い段階で量をこなすということを実践している。
- ・苦手はひたすら繰り返し慣れるしかない。得意は応用的なことにチャレンジする
- ・英語はもともと得意で頑張った、そしてあまり得意でない数学などを頑張った。
- ・新たな環境に飛び込むことが苦手で、そこを克服するためにも GCP に参加している。
- ・勉強や課外活動のみならず、普段の生活の中でも自分の得意不得意を把握し、考えて行動している。
- ・苦手分野については、様々な形で情報を得ることで理解を深めようとしている。特にレポートや論文を書くことが苦手なので、克服するための本を読み、まとまりのある文章を書こうとしている。
- ・スミニングクラブに所属していた時、日々の小さな目標と将来に向けた大きな目標を毎年目標を立てて頑張っていました。

## 【水準 2】

- ・苦手分野に対して、克服する方法を自分から積極的に模索している。
- ・勉強においては、得意科目は同じように勉強し続けて維持し、苦手科目は立ち向かって克服してきた、またはほかの分野で補ってきた。
- ・様々な活動に参加。視野を広げて凝り固まった考え方を少しでも柔軟かく。
- ・得意な設計演習に関しては模型作りの方法や既存の建築を研究して表現の幅を広げる努力をしているが、苦手な物理・数学については勉強方法を模索中。
- ・得意分野の情報技術に関する情報を集めたり、実際に触ってみたりして伸ばして行こうとしている。
- ・英語でのディスカッションが苦手であるので、toefl などの資格の勉強を通じて解決しようとしている。
- ・得意だと思っている英語力を伸ばすため、外部試験を受けたり、英語研修に参加したりしている
- ・英語のスピーキング力がまだまだ足りないので、話すよう努力はしている。
- ・英語力の向上に向け、積極的に英語を使って会話をしようとしたり、質問したりしている
- ・自分の得意分野である英語に関しては、能力が落ちないように日頃からニュース、本、音楽など英語に触れるようにしている。苦手なことに関しては、認識はしているが行動にはあまり伴っていない。
- ・初対面の人と話すことが苦手であるが、誰とでも仲良くなることができる友人の行動を参考に克服する方法を模索している。
- ・高校時代に歴史の授業を履修していなかったため、フィールドワーク先であるアメリカの歴史に関して勉強している。
- ・苦手分野が得意な人にどのようにすれば向上するのかなどを聞いてアドバイスをもらったりしている。(英語の上達方法など)
- ・リーダーシップや決断力・判断力、それに伴う勇気が足りないということを自覚しており、それらを伸ばすように努力している。
- ・不得意を標準以上に持って行く事はかなり難しいことです。未だに正解は分かりませんが、自分のできる事に取り組むことにしています。
- ・自分の苦手な英語の発音を理解しているが、克服するための実践を行えていない。
- ・大学に入ってから、自分の短所を直面し、直そうとしています。英語力が下がってきているので、毎週塾に通うことにしたり、英語で行う授業を受けたりして英語を使う機会を増やそうとしています。また、自

信と人間関係が苦手なので、いろいろなチームワーク、部活に参加し、自分の価値、人との関わり方を見つけようとしています。

- ・私は周りを見るのが苦手なので、できるだけ周りにも気を配れるよう身の回りを観察するようにしています。
- ・現地の子どもたちとの交流が良いものとなるよう自分の明るさをいかすとともにシャイな部分は克服できるよう初めての人にも積極的に話しかけています。
- ・自分の悪いところを克服しようと努力しています。気がきく人になりたいと思っているので達成できるよう日々心がけています。
- ・苦手分野にもいろいろあると思うのですが、たとえば自分はコミュニケーションを取るのがそこまでうまくないので、上手な人がどういう風に考え行動しているのか、といったことなどをできるだけ参考にしようと考えています（成功しているかはわかりません）
- ・自分の得意分野である音楽を伸ばす方法、苦手分野である英語のスピーキングを克服する方法を探している。
- ・対人関係を磨くため、接客業のアルバイトをしている。
- ・英語プレゼンセミナーに自主的に参加した。

## ●事後学修時

### 【水準 3】

- ・その分野に関連するイベントに参加した
- ・積極的に英語を話そうと心がけた
- ・下手でもともとと思って英語やタイ語を使ってみる。すぐに通じなくても使い続けて何とかする。押し通す積極性はついた。
- ・グループで自分の意思表示をすることが苦手なので、上手な人を見て勉強したり、自分に出来ることを模索したりする。
- ・自分の意見を主張しすぎてしまい、他の人の意見を受け入れていないときがあるので、先に相手の意見を聞くことを心がけている。
- ・得意分野である福祉問題について考えるために、労働についての質問を中心にした。
- ・英語力を向上させられるように、苦手なリスニングの強化に取り組んでいる。
- ・意見を発する力が足りないので、なるべく積極的に発信するようにしている
- ・英語で言うと、リスニング力はあるがコミュニケーション力がまだまだ足りない事を実感し克服するために色々な人と積極的に話すようにしている。結果、以前より友達が増えた。
- ・語学力の低さを感じ、特にリスニング力がウィークポイントだと考え、リスニング力を向上するために自分で英語を聞く機会を増やした。
- ・英語を勉強して、ある程度話せるようになった
- ・ELC の授業で自分の得意な文法力を活かしてクラスメイトに教え、また、それを通じて苦手なスピーキングを鍛えることができた。
- ・アルバイト先で作業が遅いのが悩みなのですが、それを克服するために少しでも効率的な方法を考えたり作業に集中して早く行動しようと気をつけています。
- ・英語のリスニング力を伸ばすために勉強している。
- ・語学について、得意なリーディングを伸ばすために洋書を読んでいる。苦手なスピーキングを克服するために英会話に行っている。
- ・TOEIC を定期的にうける

- ・ パースモダンスクールで百人一首のプレゼンをすることになった。しかし、古典が苦手だったので高校の時に習ったことを思い出しつつネットを使ってなんとかプレゼンを作ることができた。

## 【水準 2】

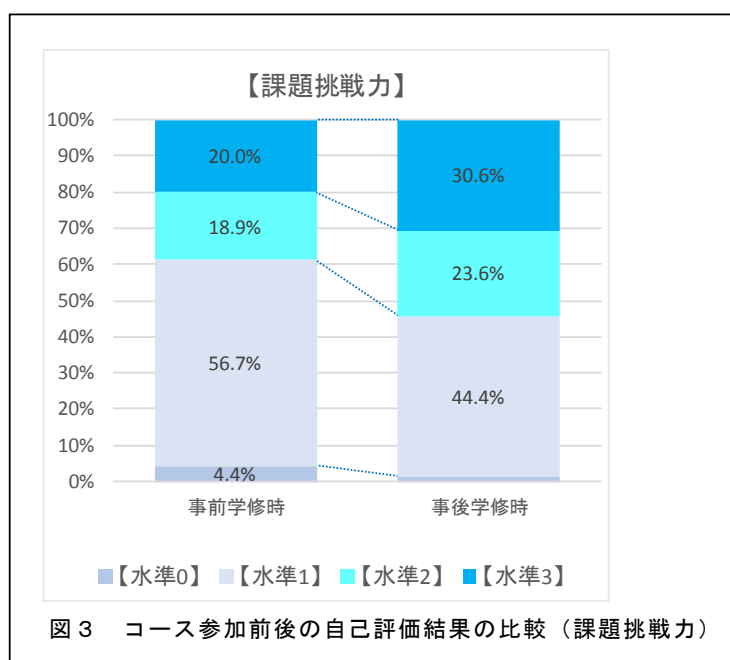
- ・ 苦手分野から逃げずに克服しようと努力している。
- ・ 英語で話かけるのは慣れておらず、緊張したが、英語でないとコミュニケーションが取れないので意をもって話した。
- ・ 語学運用力
- ・ ものごとを熟考する力が得意な一方で、英語などでの流ちょうなやり取りが苦手である。後者の克服のために、無理してでも会話を続けるといった経験を積むことが必要だと考えている。
- ・ 自分は、コミュニケーション能力などに苦手意識があるため、そこは克服しようとしつつも、一方、それを補うために、得意分野の知識を高めたり、ゆっくりでも、丁寧にやり遂げる力をこれからもどんどん伸ばしていきたいと考え行動している。
- ・ 例えば、自分の苦手な英語スピーキング能力を向上させるために、長期留学を検討しています。
- ・ スピーキングが苦手なのでいつもと違う環境を利用してなりふり構わず積極的に参加しようと努めた。
- ・ 方法自体は考えていないが意識して直していこうとしている。
- ・ 1対1で話すのは、得意だが、グループ内で話をするのが極端に苦手だ。ということを再認識し、伸ばす方法、克服する方法を現在模索している。
- ・ 自分の意見をうまく発信する方法を模索中
- ・ 得意分野は様々なことに挑戦する心を持っていることだと思います。例えば、フルマラソンや自転車で台湾一周や 4000m の山登り、そして今年のカナダ研修とネパールフィールドワークなどです。苦手分野といえ、人と接することは苦手だと思います。なので部活でどう溶け込めるかを模索したり、研修やフィールドワークといったグループワークの必要な活動に積極的に参加したりしています。
- ・ 現地での活動で自分にしかできないことは何かと考えている。
- ・ 自分の得意な、周囲の人の気持ちを汲み取ることと、苦手な、自分の考えを言っていくことのバランスを模索している
- ・ 得意分野と苦手分野は大体理解しているが、それを伸ばすために必要なことは何なのかを本を読んだり人の話を聞いたりして探している
- ・ 英会話などを通して英語に取り組み続けてきた
- ・ あらゆることに積極的に参加して全力で挑戦する姿勢を大切にしている
- ・ 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服するための方法というのは、今現在実践を始めたところである。今回の事後学習を機に先日一度自分を見つめ返した。その時に、予想よりもあまり時間をかけずに方法を考えることができた。今まで、真剣に自分について見つめることがなかったのでこのようなことになかなか気づけなかったと思う。苦手分野を克服するための方法が思いついていないものもあるが、少しずつ苦手を克服していけばいいと思うし、実際ネパールでも数ある苦手から一つ現地での活動を通じて克服できたのではないかと感じている。
- ・ 今回の短期留学の中で英語の語学学校に行ったが、自分がリスニング力が足りていないことが実感できたので、できるだけその苦手分野を伸ばせるように努力した。
- ・ 真面目というのは、活動を通して発揮できたと思う。自ら話しかけるのは苦手だが、海外では外国人に対して話しかけることができた。具体的には、車内で日本代表の服を着た人がいたので話した。

表3 自己評価結果（課題挑戦力）

【課題挑戦力】

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

|       |                       | 事前学修<br>(人) | 事前学修時 | 事後学修<br>(人) | 事後学修時 |
|-------|-----------------------|-------------|-------|-------------|-------|
| 【水準3】 | 見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。 | 18          | 20.0% | 22          | 30.6% |
| 【水準2】 | 見つけた課題を解決する方法を模索している。 | 17          | 18.9% | 17          | 23.6% |
| 【水準1】 | 解決すべき課題を見つけることができる。   | 51          | 56.7% | 32          | 44.4% |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。           | 4           | 4.4%  | 1           | 1.4%  |



—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【課題挑戦力】3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

●事前学修時

【水準3】

- ・質問ができるときには積極的に質問するようにしている。
- ・アルバイトではプロジェクトリーダーとして、塾の問題点を見つけプログラムを組み立てて行動したことがある。
- ・スピーキング力向上のため、留学生に積極的に英語で話す。
- ・私の第一の課題は受け身の学習をしてしまうことであり、インターンに行く前に下調べをしたり、留学先の大学の研究を調べたりと、情報をなるべくたくさん手に入れることで、積極的に学習する糸口を作る努力をしている。
- ・サークル活動で1回生がみんな楽しく活動に参加できるようにみんなに楽しくない部分がどこかを聞き、改善するようにしている。
- ・部活動で積極的に先輩に月ごとの課題を出してもらっている。
- ・先のことを前もって考え計画を立てている

- ・1人で解決しなければならない場合、仲間と協力できる場合など様々ありますが、出来る限り早期に解決するべく努力しています。
- ・課題とそれに対する解決策をリストアップする習慣がある。
- ・クラブ活動の中で生じた問題点に対して、新しい考えを提案して解決しようとしている。
- ・英語の発音でどの辺を直すべきかなど。
- ・自分がやりたいことをするために計画を立てたり、自分の目の前の問題を解決できるように過ごしています。
- ・勉学において、自分ができていない課題を見つけ、それを調べてみたり、誰かに質問してみたりいろいろな方法で解決しようとする。
- ・水泳の試合の時毎回動画を撮ってもらいよかったところと悪かったところを見直し、次の試合で生かせるようにしていました。

## 【水準 2】

- ・バイトなどで自分がよくしてしまうミスなどを考えどうしてそのミスをするのか、どうしたら直るのかを考えます。
- ・常に解決する方法を模索している。
- ・グループでより積極的に行動するにはどうしたらいいか、苦手な物理・数学を克服する方法など、課題を意識して解決策を探している。
- ・サークルで全員が参加できるようなプログラムの作成に取り組んでいる。
- ・語学の勉強や、派遣先に関する書籍を読もうと思っている。
- ・アルバイトで塾の先生をやっているのですが、どうしたら生徒がやる気を持って勉強してくれるのかを常に模索しています。自分の中でこれだと思えるものが一つあって、それは「バイトだからといって手を抜かない」ということです。生徒に熱意をもって接するほどやはり生徒の反応は良くなるということが分かってきました。
- ・ニューヨークでの目的地への行き方など、わからないことはできる限りインターネットや本で調べた。
- ・具体的に何をすれば課題解決につながるか合理的に考えて、その方法をいくつか挙げ実践するようにしている。
- ・ワシントン大学の英語研修で一般人にある話題についてインタビューを行い、得られた答えから課題を見つけた。(銃についてアメリカ人はどう思うのかなど)
- ・人にわかりやすく的確に伝える力を伸ばすために、努力している。
- ・このようなフィールドワークなどに参加するなどして解決にアプローチしようとしている姿勢があるから
- ・楽器演奏のうまくできない点を解決するため、練習を多くするとともにチームで問題点を共有し、相談している。
- ・実践農学入門で、活動の中で見つけた課題を解決する方法を模索している。

## ●事後学修時

### 【水準 3】

- ・英語力不足を痛感し、より勉強するようになった。
- ・もともと寝る前に振り返り、課題を抽出することは癖のようにやっていたが、それを翌日挑戦できる外国で課題解決に積極的になった。小さなことからなんでもやってみることを大切にするようになった。
- ・設計課題についてであれば、興味を持った社会問題について考え、それを解決するためのプランを提案している。
- ・RQについての関連する質問をフィールドワーク先の方々に実施して、帰国後要点をまとめて、最終的な研究の成果とするように取り組んでいる最中である。

- ・解決に向けて課題を明確にした。
- ・サークルのイベントに人を呼び込むためにすべきことを考え行動に移している。
- ・もっと自発的の行動できるように心がけている。
- ・まだまだ調査能力、事前学習能力がないので、それを養っている
- ・特に留学という一つの大きな節目に向けて課題を設定し、取り組んでいる。
- ・共通言語が英語、と書いてあったのに、実はフランス語だった、という状況下で、まず自分でフランス語学習し、なんといってるのか毎回人に聞き、ミーティングのときなどは英語で話してもらうようお願いしたり、と言語がわからないために一緒に活動ができないとなりそうだったところの解決を図った。また、語学力の低さに気が付き、現在フランス語を必死で勉強している。
- ・課題をリストアップし、それらに対する解決策を具体的にあげる習慣がある。
- ・マレーシアでのフィールドワークで課題となる疑問点を見つけ、解決するために工夫することができた。
- ・自分が現場に不満足だった場合、なぜ自分は不満足なのか考え、解決策を見つけて実行する
- ・人に頼ったり調べたりして解決しようとする
- ・失敗した際に何が原因だったのか考えて行動している。
- ・英語でのコミュニケーション能力にまだまだ課題があると感じ、単語レベルから見直している
- ・まだ語彙力が足りないと感じるときは多々あった。友達が私の知らない単語を使ったときは恥ずかしがらずに聞き返して調べるようにしていた。

## 【水準 2】

- ・常に課題に対する解決方法を模索している。
- ・将来、外国人や外国の企業相手でも仕事ができるようになるために、語学力を向上させたいと思っている。  
そのためにできることや必要なことを考えている。
- ・英語学習
- ・英語力の改善のためにアフタースクールなどに参加している。また、自分の将来の目標を達成するためにどうすべきか模索している。
- ・現地に行ったことで見つけた新たな興味分野や課題は明らかになったが、どのような角度から専門的学習に結びつけていくかの解決方法はまだ見つかってないと感じている。
- ・参考書を買ったり、取り組める時間を確保しようとしている。
- ・英語力の向上方法を模索中
- ・レポートなどを書く時、いつも時間がかかりかかって、効率が非常に悪いので、勉強やレポートに時間をかなりかけても成績や結果がそれほど得ない状況です。じっくり考えると、時々レポートと関係のない無駄な文章を読んだり、内容を読み取るのが遅かったりするのが原因だと思いました。なので今最初から役に立てる内容を速く読み取れるように努力しています。
- ・現地ではあまり英語が通じないので簡単なあいさつなどを習得しようとしている。
- ・大学生活で自分のしたいことを全てするにはどうすればいいか考えている。
- ・料理が苦手だったが夏休みを終えて料理をするようになった、英検 1 級・通訳案内士試験・簿記検定 2 級合格を目指している
- ・自分を客観的に見つめ、その課題が何なのか理解することは出発前からできることであった。ネパールを訪れ、普段しない行動をすることで新たに課題を見つけることができた。課題は見つけることができて、その解決方法は現地でつけることはできなかった。しかし、2-2 と同じように一度自分を見つめ直すことで解決方法を見出すことができた。
- ・上記のように、私は英語の聞き取り力があまりないので、帰国してからどのようにその力を伸ばせば良いかを調べた。

### 3-1-2. ルーブリック指標に基づく自己評価の経年変化（平成 28 年度参加学生）

平成 28 年度参加学生に対しては、平成 29 年度に改訂したルーブリック指標による自己評価を、回答に強制力のある教務システムの機能を利用して実施した。ルーブリックによる自己評価結果は、表 1～5 のとおりである。

また、それぞれに関するプログラム参加年度（事前学修時・事後学修時）と自己評価結果を比較したのが図 1～5 である。

3つのチカラ（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）の自己評価の経年変化について、共通して言えるのは「水準3」の割合が、平成 29 年度末では事前学修時より増加していることである。ただ、「チームワーク力」については、事後学修時より平均 8.3 ポイントの増加が見られるが、「自己修正力」「課題挑戦力」については、事後学修時よりも低い結果となっている。水準 2 以上の割合について言えば、「チームワーク力」と「課題挑戦力」では「事前学修時よりも高いが、事後学修時よりも低い」、また、「自己修正力」については「事前学修時、事後学修時のいずれよりも低い」結果となっている。

これは、改訂前のルーブリックにおける各水準の違いが若干わかりにくかったことや、学外学修参加直後の学生が具体的な根拠に基づくことなく自らの水準を高く評価していたことなどが原因として推測される。今回の自己評価の集計結果は、より客観的なルーブリックへと改訂したことにより学生が根拠に基づき自己評価を行った結果が反映されたものであり、ルーブリックの改善を試みたことに対する一定の成果が表れたと言える。その他、特に「自己修正力」をプログラム参加前よりも低い水準で評価している点を見ると、プログラム参加から 1 年を経過して、学生は自らの経験をもとにより高い水準のチカラが必要であると認識し、自己を厳しく評価するよう変化している結果であるとも受け止められる。

一方、各チカラにおいて、昨年度の事後学修時には該当者がなかった「水準 0」の回答が増えている。全ての項目で「水準 0」と回答している学生が複数名いることを確認しており、教務システムにより強制力を持たせて回答させたことによってアンケート色が強くなった結果、自己評価の意義を必ずしも十分理解せず、自らを正しく振り返ることなく回答した学生がいたことが窺える。卒業までに 3つのチカラを身に付け、そのことを正しく評価・記録するよう、参加学生に対しては今後も指導していく必要がある。

#### ① チームワーク力

「水準 3」と回答した学生は、平均 22.7% (1-1 : 25.9%、1-2 : 19.4%) であった。(H29 目標値 : 10%)

「ゼミでは幹事として 24 名のチームをまとめ上げた。安全保障という答えのない問題を前に議論づくりには苦勞したこともあるが、12 月の学生シンポジウムでは先生方から高評価をいただいた」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度もチームワーク力を高めていることが窺える。

#### ② 自己修正力

「水準 3」と回答した学生は、平均 19.9% (2-1 : 25.0%、2-2 : 14.8%) であった。(H29 目標値 : 10%)

「メンバーの意見を聞きながら、チームとしての総意と自分個人の意見とのズレを認識して修正していくことができた」などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度も自己修正力を高めていることが窺える。

#### ③ 課題挑戦力

「水準 3」と回答した学生は、23.1% であった。(H29 目標値 : 10%)

「今のままでは高度な分析ができないので、数学の知識と平行して情報学の学習をしている」  
などの具体的な事例・根拠に基づき水準を判断・選択しており、プログラム参加の翌年度も課題挑戦力を高めていることが窺える。

表 1 自己評価結果（チームワーク力）

【チームワーク力】 ※H28事前・事後学修時のデータは、旧ルーブリック指標の「チームワーク力」の数値（1-1, 1-2共通）

1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

|       |                                    | 回答数<br>(人) | H28<br>事前学修 | H28<br>事後学修 | H29<br>年度末 |
|-------|------------------------------------|------------|-------------|-------------|------------|
| 【水準3】 | チームの活動において自分の役割を遂行し、それが成果へと繋がっている。 | 28         | 3.6%        | 14.4%       | 25.9%      |
| 【水準2】 | 活動に参加する際、自分の役割に基づいて発言や行動をしている。     | 31         | 38.4%       | 62.9%       | 28.7%      |
| 【水準1】 | 活動に参加する際、自分の役割について意識し、理解しようとしている。  | 44         | 53.6%       | 22.7%       | 40.7%      |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。                        | 5          | 4.5%        | 0.0%        | 4.6%       |

1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

|       |                                          | 回答数<br>(人) | H28<br>事前学修 | H28<br>事後学修 | H29<br>年度末 |
|-------|------------------------------------------|------------|-------------|-------------|------------|
| 【水準3】 | メンバーと協力し、チームの目標を達成している。                  | 21         | 3.6%        | 14.4%       | 19.4%      |
| 【水準2】 | メンバーの意見や立場を尊重し、意思疎通を図りながらチームの活動に取り組んでいる。 | 40         | 38.4%       | 62.9%       | 37.0%      |
| 【水準1】 | メンバーの意見や立場を尊重し、チームの目標を理解している。            | 39         | 53.6%       | 22.7%       | 36.1%      |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。                              | 8          | 4.5%        | 0.0%        | 7.4%       |

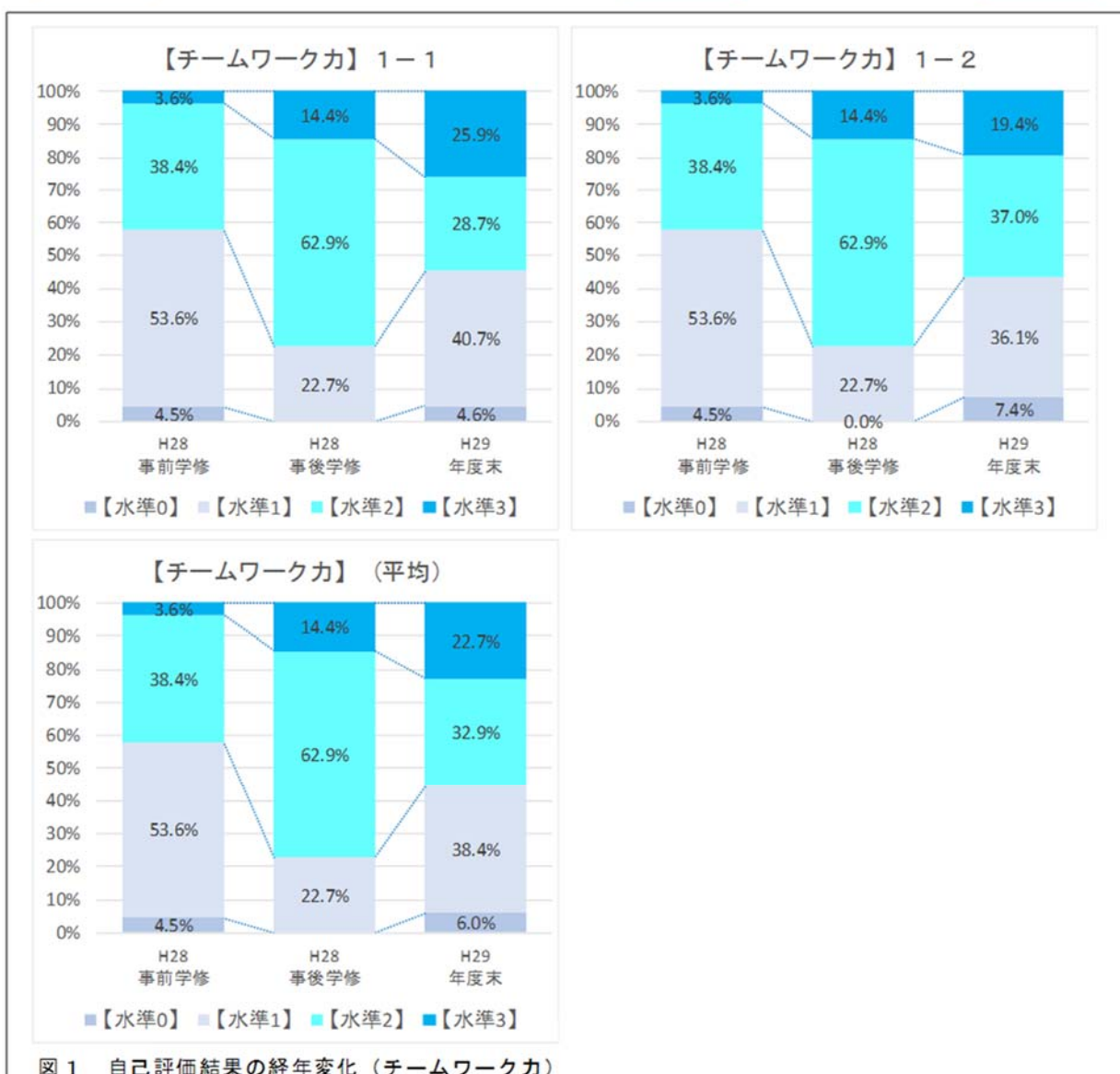


図 1 自己評価結果の経年変化（チームワーク力）

【チームワーク力】1-1. 学内外の活動へ参加し、自分の役割を担う

【水準 3】

- ・チームが立ち止まった時に、雰囲気をはらって変えられるような発言をし、チームを成功へ導けられるようになった。
- ・ゼミでは幹事として24名のチームをまとめ上げた。安全保障という答えのない問題を前に議論づくりには苦労したこともあるが、12月の学生シンポジウムでは先生方から高評価をいただいた。
- ・演劇サークルで音響を担当した時、初めてなりにも努力し、公演を作り上げた。結果として公演後のアンケートで好評を博し、公演を観た新入生は前年の4倍入った。そして参加した部員全員が良い作品が作れたと胸を張って言える公演となった
- ・ゼミ活動においてチームでプレゼンテーションを作成するとき、インターンシップでのグループワークにおいて自分の役割を理解し行動しチームに貢献した
- ・所属している部活動において、自分に課せられた役割や仕事に対し、常に求められるクオリティでこなせるように努力している。例えば、大会運営にあたってパンフレットを作成した際には、以前までの課題を踏まえてよりよいものが作れるように努力した。
- ・グループでの発表において質疑応答で得られた質問を元に学習につなげた。
- ・サークル活動で新入生歓迎イベントの改善にリーダーとして取り組んだ
- ・部活内で審判資格保有者として、ファールの減少に繋がるよう、チームのプレイヤーに指導したり、プレイヤーと相談したりしており、実際にチーム内でファールがなくなるよう意識する人が増えてきている。
- ・混声合唱部での合唱劇制作チーフとしての活動
- ・クラブ活動での統率力。
- ・アルバイトにおいて、売上を上げるために行動している。
- ・部活動で指導する立場となって、部員を率いて成果を上げれている
- ・新歓するに当たって、主体的に運営した。
- ・ボランティア活動にて。
- ・夏休みにカンボジアに行き、日本人の参加者と海外の参加者とともに、子供に英語を教えるときの計画から実行までを担当し、うまくいった。

【水準 2】

- ・ゼミ活動で、グループで論文作成やレポート作成をするときに意見やアイデアを出した。
- ・活動する際に目標を持ってそれに対して自分が何を出来るか考えるようになった。
- ・周りの人の質問の流れに沿って質問をする。
- ・チーム内での役割を理解し、自身が主導的に進めるだけでなく、メンバーに発言を促すような行動をとることができた。
- ・エースとしての責任をもち、練習や大会で結果をだした。
- ・わたしは、主にサークル活動において、自分の発言や行動をもとにまわりの仲間が励まされるように、自分の行動を律することをこころがけています。鼓舞するような発言であったり、面白い雰囲気をつくる行動であったりその方法はたくさんあると思いますが、日頃から信頼され発言力をもった人でありた

いと思います。GDP の学習の中では、先陣をきってその場の雰囲気ですぐ質問しやすくなり、反対に話す人が多いときは聞き手にまわったりする意識でプログラムに臨んでいました。

- ・ゼミで準備書面を書く際に、いつまでにどの程度まで仕上げるかを相談し、計画を立てて行動した。
- ・サークル活動内での役職就任
- ・ゼミのプロジェクトへの参加、まだ成果は出ていない。
- ・クラブ活動において、チーフとしての役割を確認し、組織をまとめるような言動や行動を心がけている。
- ・学部の新入生研修の学生委員長として、役割を意識して行動している。
- ・サークルで代表という立場を理解し、組織のマネジメントも考えつつ、末端までフォローをするようにしている。

### 【チームワーク力】1-2. メンバーと協力し、チームの目標を達成する

#### 【水準 3】

- ・部活動やボランティアに参加するとき、同じ役職や部署の人と、自分たちに必要なことは何かを話し合い、そのメンバーで最高のパフォーマンスができるようにしている。
- ・部活で、今年の目標である一部昇格が達成できるよう、部員全員で努力を惜しまず練習に取り組んでいる。
- ・混声合唱部での合唱劇制作チーフとしての活動
- ・クラブで、いい結果を残している。
- ・サークル内での個々の意見をしっかり聞き、納得のいく新体制を作り上げれた
- ・英語の授業のグループプレゼンテーションの際、みんなと協力し論理的に進行でき高い評価を得ることができました。

#### 【水準 2】

- ・自分の意見も主張しつつ相手の意見も肯定して受け止められるので、円滑な会議ができるようになった。
- ・留学生や他大学の学生が所属しているゼミだからこそ、多様な価値観を大切にした。北朝鮮問題を扱った際は韓国人留学生から貴重な意見を引き出した。
- ・作品のイメージを共有するために、演出だけでなく、役者や照明、その他部署の人と話し合いを重ね、自分の仕事に活かした。
- ・インターンシップのグループワークで。
- ・グループでの発表で何度も集まり意見交換することでよりよいものにできるよう努力した。
- ・自分の意見と異なる考えをメンバーが持っていても、最初から否定するのではなくどういう理由があってその考えに至ったかを必ず確認し、そのうえで議論をする
- ・サークル活動における幹部の集まりや、ゼミ活動で、発揮した。
- ・相手のことを意識するようになった。
- ・ペアでの活動時等、常に相談しながら円滑に進める。
- ・皆の意見を聞いて、できる限りそれを実現できるようにした。
- ・フランス語の授業でグループプレゼンテーションを作ったときに、テーマの設定や、役割分担に意見を出して合意をとりながら進めた。

- ・チーム内で作業を分担して進めるとき、互いの進捗状況を報告しながら活動を進めることができた。
- ・ボランティア活動にて
- ・神戸大学ボランティアバスプロジェクトの協力
- ・去年のプログラムのなかで、日本は縦の仕事が多く、チームとは違うという話を聞いたと思います。わたしのサークルでは、全員が自分で選択して所属し練習に励んではいますが、上下ではないといえどどうしても温度差などがあります。演舞を作って披露するというサークルなので、もっと全員からの意見をひきだせるよう、そのきっかけとなる人物になれば、と思います。
- ・2問目に同じ。
- ・訪問企業に対する提出書類へのメンバーの意見反映等。
- ・新入生研修やゼミなどで一人では達成できないことを協力していこうとしている。
- ・サークルメンバーや学科の友人たちと相談しながら、それぞれ雰囲気がよくなるようにイベントを企画したり、話し合いをしたりしている。

表2 自己評価結果（自己修正力）

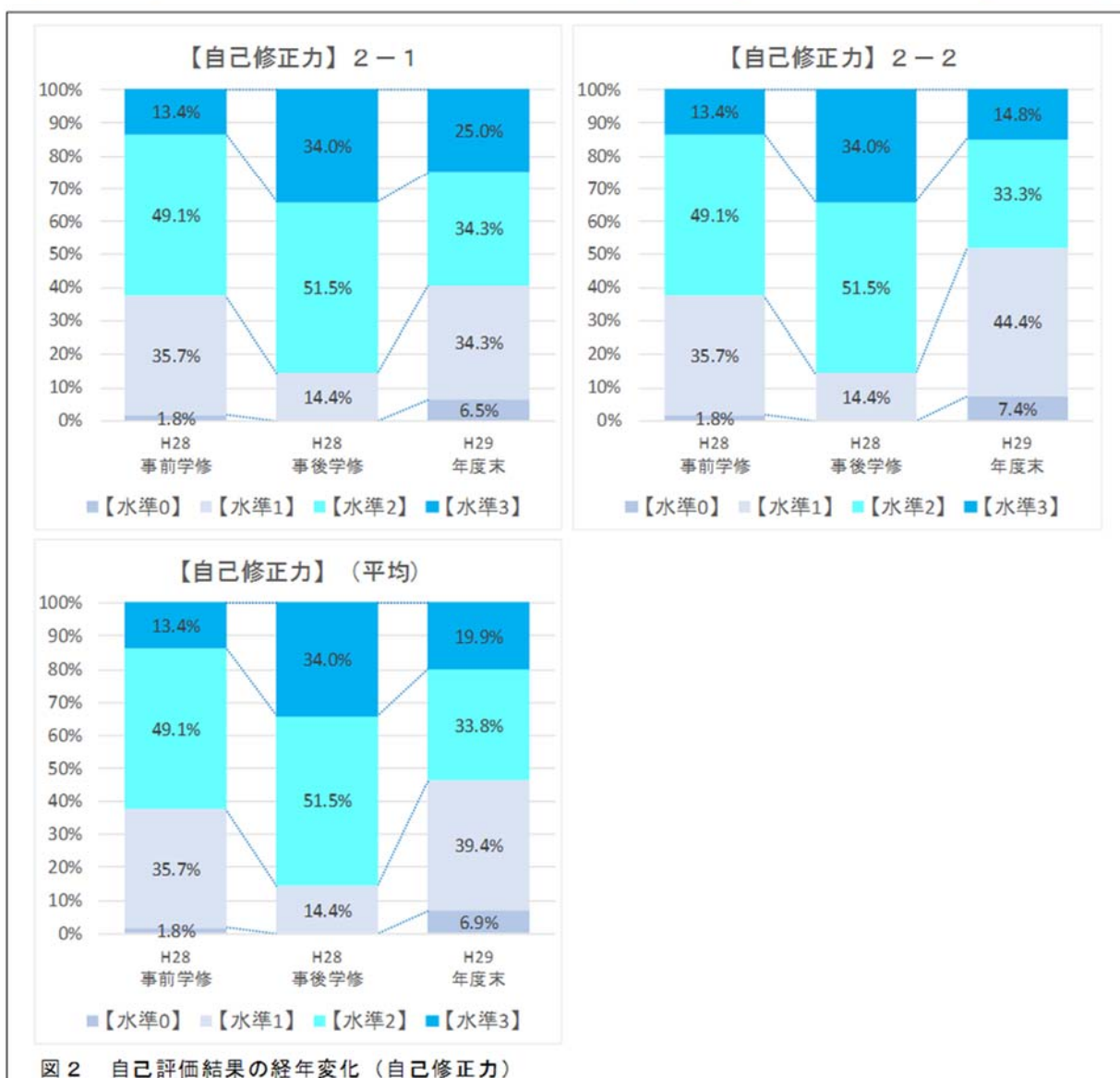
【自己修正力】※H28事前・事後学修時のデータは、旧ルーブリック指標の「自己修正力」の数値（2-1, 2-2共通）

2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

|       |                                        | 回答数<br>(人) | H28<br>事前学修 | H28<br>事後学修 | H29<br>年度末 |
|-------|----------------------------------------|------------|-------------|-------------|------------|
| 【水準3】 | 自分以外の人の考えや行動を参考にして、自分の考えや行動を見直している。    | 27         | 13.4%       | 34.0%       | 25.0%      |
| 【水準2】 | 自分以外の人の考えや行動を理解し、自分の見直すべきことについて理解している。 | 37         | 49.1%       | 51.5%       | 34.3%      |
| 【水準1】 | 自分の考えや行動について認識している。                    | 37         | 35.7%       | 14.4%       | 34.3%      |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。                            | 7          | 1.8%        | 0.0%        | 6.5%       |

2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

|       |                                     | 回答数<br>(人) | H28<br>事前学修 | H28<br>事後学修 | H29<br>年度末 |
|-------|-------------------------------------|------------|-------------|-------------|------------|
| 【水準3】 | 自分の得意分野を伸ばすため、苦手分野を克服するための実践を行っている。 | 16         | 13.4%       | 34.0%       | 14.8%      |
| 【水準2】 | 自分の得意分野を伸ばす方法、苦手分野を克服する方法を模索している。   | 36         | 49.1%       | 51.5%       | 33.3%      |
| 【水準1】 | 自分の得意分野や苦手分野について理解している。             | 48         | 35.7%       | 14.4%       | 44.4%      |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。                         | 8          | 1.8%        | 0.0%        | 7.4%       |



【自己修正力】2-1. 自己を認識し、他者への理解を通して、自分の考えや行動を見直すことができる

【水準3】

- ・インターンシップのグループワークで、他人を見習って次の機会にいかすようにしている
- ・部活動でのミーティングの際、様々な意見を見聞きし、自分の偏った見方を修正し、自分への指摘に対しては行動を見直すようにしている。
- ・友達が取り組んでいる様子を参考にして自分がやるべきことを考え、学習や課外活動の面で努力をしている。
- ・自分以外の人の行動をよく観察して、いいと思ったところは取り入れるようにしている。
- ・混声合唱部での合唱劇制作チーフとしての活動
- ・自分の行動が適切か確認できる。
- ・周りの人の意見で為になると考える内容は率先して取り入れる。
- ・メンバーの意見を聞きながら、チームとしての総意と自分個人の意見とのズレを認識して修正していくことができた。
- ・ボランティア活動にて
- ・経済学が社会にどう役に立つか考え、計量経済学を学びはじめたのですが、より高度な分析をするには理系の情報学の知識が必要であることがわかり学習し始めました。全てを学ぶことは無理なので経済学に応用できる分野から少しずつ学んでいます。
- ・TAやゼミメンバーから学んでいる。
- ・新入生研修やゼミの活動を通して、自分の考えを整理し、悪いところを探す・見つけることができています。

【水準2】

- ・相手のいいところを見つけ、どうしたら自分もできるのか日頃から考えている。
- ・就職活動の自己分析を通じて、自分の過去や性格を振り返ることが多かった。他者から見た自分を知らうと友人に自分の性格を聞く機会は非常に貴重で、自分を見つめ直す契機となった。
- ・意見が違う人と議論をすることが好きなので、相手と違う意見を持っている場合、納得のいくまで話し合う。それで自分の意見が変わることもあるが、多くの場合、自分と相手の意見や考えを融合して自分の意見にする
- ・意見を主張、反論する前に一度立ち止まって冷静になってから意見を述べる
- ・人の意見に対して、問題点などを発見できたこと。
- ・常に意識している。
- ・相手と意見が一致しないときでも、衝突することなく、相手の考えに耳を傾けて、自分と比較したり、長所短所を見極めること。
- ・子どもが好きではないけれど、家族内で甥の育児を手伝った。
- ・自分の目指す将来に近づけるように今出来ることを、先輩から話を聞きつつ考えている。
- ・相手がどのような状態なのかを見極めて、どのような伝え方をしたら良いかを考える。
- ・人の意見を聞くことで自分の視野の狭さに気づいたり、さまざまな角度からの視点を学ぶことにつながった。

- ・相手と自分の意見の相違や文化の違いは受け入れるようにしている。相手の見習いたい点があれば取り入れるようにしている。

## 【自己修正力】2-2. 得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する

### 【水準 3】

- ・語学が得意なので英語だけでなくドイツ語、韓国語の勉強を続けている。
- ・ボランティア活動で接客的に英語に触れる機会を作った
- ・常に意識している。
- ・ボランティア活動にて
- ・TOEFL 勉強等。
- ・相手に説明したり、自分の考えを文で伝えるのがうまくないので、聞き手や読み手まで想像して書くように意識している。

### 【水準 2】

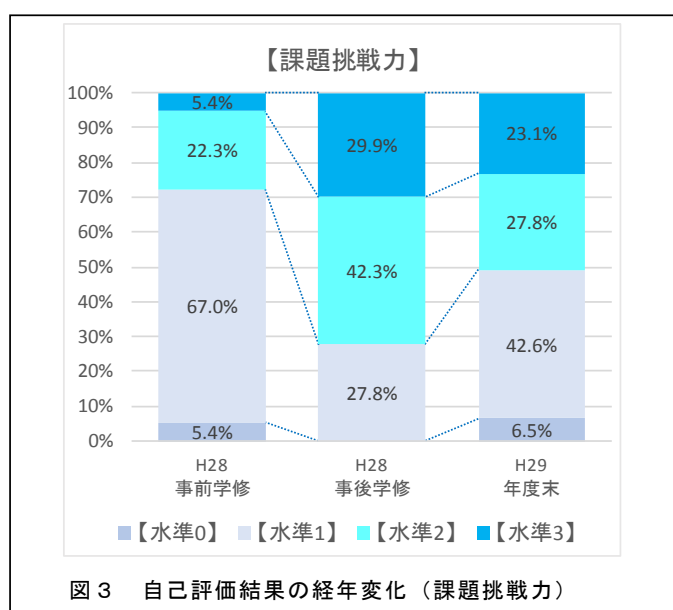
- ・苦手な事を捉え方を変える事で得意にしようと試みている。
- ・自分の長所や短所は考えれば考えるほどわからなくなる。その時々で最善が尽くせるよう、努力している。学生生活も残り一年のため、得意分野を伸ばし、苦手分野を克服する方法を確立したい。
- ・部活動で、部員からここが上手いと言われた部分は率先して仕事をするようにしている。苦手分野に関しては、他者からアドバイスをもらうようにしている。
- ・学習面や語学力において必要ことに取り組みながら苦手なものも克服できるようアドバイスや本を参考にに取り組んでいる。
- ・混声合唱部での合唱劇制作チーフとしての活動
- ・英語で経済学系の教科書を読む。
- ・英作文を上達させるために、あえて大変だと分かっている英語の再履修のクラスを選んだ。
- ・今の勉強法を見直し、より効率的に苦手分野をなくせるような方法を模索している。苦手なことにも積極的に取り組むようにしている。
- ・何がいけなかったのかを反省しているが、それをどう繋げるかは考えきれていない。
- ・政治学に比べ、法学の成績が悪いことをどう改善していくかを模索している。また、英会話力の衰えに際し、英語で実施される授業の受講などを検討している。
- ・クラブ活動において、リーダーシップを図り団を引っ張っていく力を身に付けたいと努力している。
- ・代表をしていますが、仕事を割り振ることが苦手で全体をまとめることができるようになることが目標となっている一方、専門の演習などでは比較的発言ができる程度に勉強を深められている。しかし、不十分なので、克服を目指している。

表 3 自己評価結果（課題解決力）

【課題挑戦力】※H28事前学修・事後学修時のデータは、旧ループリック指標の「課題挑戦力」の数値

3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

|       |                       | 回答数<br>(人) | H28<br>事前学修 | H28<br>事後学修 | H29<br>年度末 |
|-------|-----------------------|------------|-------------|-------------|------------|
| 【水準3】 | 見つけた課題の解決に向けて取り組んでいる。 | 25         | 5.4%        | 29.9%       | 23.1%      |
| 【水準2】 | 見つけた課題を解決する方法を模索している。 | 30         | 22.3%       | 42.3%       | 27.8%      |
| 【水準1】 | 解決すべき課題を見つけることができる。   | 46         | 67.0%       | 27.8%       | 42.6%      |
| 【水準0】 | 水準1に達していない。           | 7          | 5.4%        | 0.0%        | 6.5%       |



—水準選択における具体的な説明（水準2・水準3）—

【課題挑戦力】3-1. 課題を見つけ、解決をはかる

【水準3】

- ・チームの課題でも自分自身の課題でも、すぐに見つけ解決策を提案していける。
- ・ゼミでは常に課題の連続だった。運営等は悩むことが多かったが、先輩や院生の皆さんの意見を参考に自分なりの創意工夫ができたのではないかと考えている。今年度も活かしていきたい。
- ・部活動での課題に対しては、他の部員と意見の共有をしたり、自分の立場でできることを探して取り組んでいる。
- ・人よりも考えたり行動したりするのが遅いため、常に先のことを予測して行動したり、時間をかけて物事に取り組んだりしている。
- ・漫才での課題修正力
- ・常に意識している。
- ・はい
- ・焦ってミスをするところを落ち着いてと自分に言い聞かせるようにしている。
- ・今のままでは高度な分析ができないので数学の知識と平行して情報学の学習をしています。
- ・上記にあるような課題を設定し、取り組みながらより良いものを目指している。

- ・自己修正力と重なる。

## 【水準 2】

- ・学力や社会で必要なスキルを身につけるために今後どうすべきか考えながら行動している。
- ・課題を課題として認識するだけでなく、自分の講堂なども振り返りどう取り組んでいけばよいかを考えるようにしている。
- ・周りの人に相談したりして、確実に解決できるよう考える。
- ・直近の課題は大学院試験にむけて自身の力を完成させていくことなので、それに向けて常にもっとも効率的なインプットとアウトプットができるように方法を模索している。
- ・一度全ての記述箇所を記入したのですが、時間がかかりすぎたため送信できず、うりぼーねっとから締め出されてしまいました。授業の抽選があり時間がないため、記述箇所を省略させていただきました。回答する意思は非常に持ち合わせておりますが、回答しなければうりぼーねっとのトップに飛べないのは少し面倒です。ですので、回答せずともトップページに移動できたり、アンケートをやり直せたらすると有難いです。まともにアンケート答えなくて、すみませんでした。
- ・今後、大学生として自分が将来のためにできることを探している。
- ・対人関係におけるコミュニケーション力の不足をどのようにおぎなうかを考え、人の入れ替わりの激しく毎度メンバーの変わるイベント系アルバイトにとりくむなどしている。
- ・課題はあるが、精査されていない。

### 3-2. プログラム参加後のアンケート結果

平成 29 年度に実施した計 11 コースの参加学生を対象に、コース内容の満足度や学修成果等に関するアンケートを実施した。学修支援システム BEEF (BEEF Venture) を利用してアンケートを実施し、プログラムに最後まで参加した学生 96 名（複数回参加者を含む）のうち、65 名から回答を得たところである。

#### ◎各設問の集計結果について

##### ・コースについて

コースへの参加理由については、「内容に興味があったから」（76.9%）、「海外に行ってみたかったから」（69.2%）となっており、自由記述からも、本プログラムの趣旨・内容を踏まえて参加していることがわかる。

また、参加したコースの内容については、「満足している」（80.0%）、「おおむね満足している」（18.5%）と、満足度は非常に高い。自由記述からも、様々なコースの学修活動が参加学生にとって学びの動機付けや気づきを得る良い機会となるとともに、英語によるコミュニケーション等を経験したことで次のステップへの意欲がわくなど、充実した内容であったことが読み取れる。

##### ・学修成果について

学修成果については、「達成できた」（41.5%）、「おおむね達成できた」（47.7%）と、9 割近い学生が目標どおりの学修成果を得ている。自由記述からも、語学能力の向上に加え、派遣先の日常生活やフィールドワークを通じて、異文化理解を深めていることがわかる。また、自らの学修に対する姿勢を振り返り、今後の学修意欲に結びつけようとしていることも窺える。

##### ・プログラムへの要望について

回答数は多くはなかったが、本プログラムのコースに含まれていないアフリカなどの地域での活動や高学年でのプログラムへの言及など、自らの興味や意欲をもとにした積極的な意見があった。

##### ・さらなる留学等について

本プログラムへの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいかの問いについては、「そう思う」（63.1%）、「どちらかといえばそう思う」（23.1%）と、合わせて 86.2% の学生が再チャレンジへの意欲を持っている。また、関心を持ったテーマについては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」をあわせて 95.4% の学生がより深く学修したいと回答している。長期留学等の国際的な活動へのチャレンジやより専門的なテーマへの学修意欲の向上等、本プログラムが全体を通じて設定している「学びの動機づけ」という目標が達成されていると言ってよいであろう。

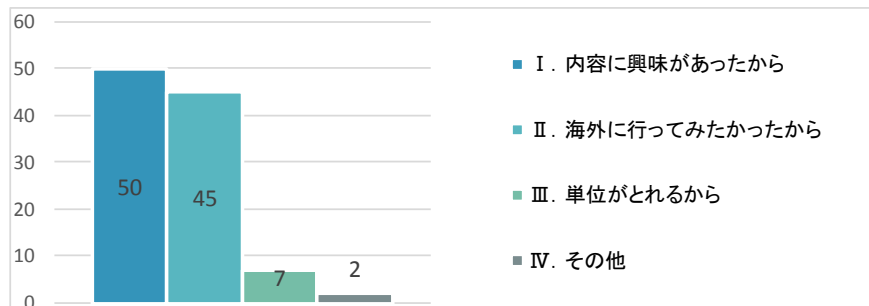
なお、プログラムは開始 2 年目であるが、アンケートで得た高い満足度や学修意欲を反映して、参加した学生のうち 13 名はすでに本プログラムの別のコースに参加しているなど、海外での更なる活動に積極的にチャレンジしている。

## 神戸グローバルチャレンジプログラム 参加後アンケート集計結果

回答者数 65名

### (1) コースについて

●どのようなきっかけで今回のコースに参加しましたか。（複数回答可）

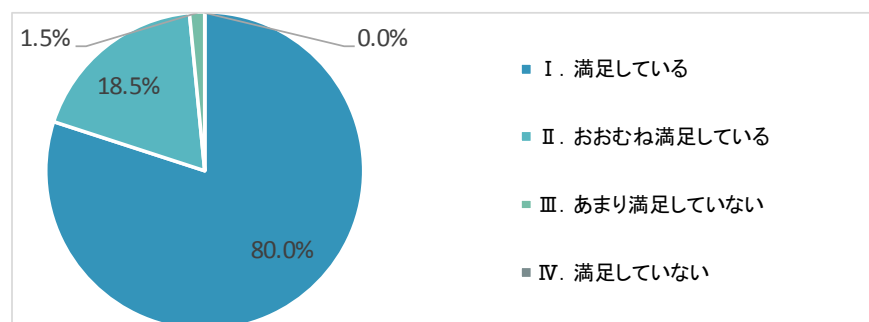


|      |    |       |
|------|----|-------|
| I    | 50 | 76.9% |
| II   | 45 | 69.2% |
| III  | 7  | 10.8% |
| IV   | 2  | 3.1%  |
| 回答者計 | 65 |       |

### (自由記述)

- ・留学を見据えて、海外で生活できるかということに挑戦したかったから。
- ・英語を上達させたかったから
- ・英語のコミュニケーションスキルを磨きたいと思ったから。
- ・英語力を伸ばしたかったから 将来海外勤務を視野に入れているため
- ・All English の世界に身を置いてみたくて、学校からの補助も出るので参加しました。  
学校のプログラムなので安全だろうという考えもありました。
- ・自分が本当にしたい学びのできるフィールドを選択させてもらえるものだったから。
- ・交換留学先での合同ゼミがあったため
- ・先輩にいいコースであることを聞いていたから。また、留学前にヨーロッパに行っておきたかったから。
- ・長期留学の前に、ヨーロッパに行って、少しでも慣れたいと思ったからです。
- ・ヨーロッパという地方はどのようなものなのか感じてみたかった。
- ・3年生の秋以降、欧州へ長期留学するので、その事前学習のつもりで参加しました。

●参加したコースの内容に満足していますか。



|     |    |        |
|-----|----|--------|
| I   | 52 | 80.0%  |
| II  | 12 | 18.5%  |
| III | 1  | 1.5%   |
| IV  | 0  | 0.0%   |
| 計   | 65 | 100.0% |

ーその理由を以下に記述して下さい。ー

<満足している>

- ・語学を学びながら、アートやニューヨークの歴史を様々な場所を訪れることができたから。
- ・語学研修、ホームステイ、フィールドワーク、現地学生との交流、観光など様々な経験をする事ができたから。
- ・興味のある内容も実践的な言語も学べたから。視野が広がり自己の再発見があったから。
- ・普通に自分でニューヨークに行くだけでは絶対知ることのできないことを知れた。
- ・初めての海外で不安もあったがハンブルク大学側の手厚いサポートがあり安心して行けた。  
内容も充実したものだった。
- ・交流の幅が広がった
- ・楽しんで学習できたから

- ・ドイツ語を学べた
- ・初めての海外で心配なことがあったが、価格も高くなく、安全に行けたから。
- ・初めて中国に行ってみて、自分の知識だけではなく視察を通して分かったことがたくさんあったから。
- ・関心のあったことを経験できたから
- ・中国のマイナスのイメージがなくなった。
- ・英語力の向上が図れた。
- ・英語が上達しただけでなく、日本とフィリピンの両方でかけがえのない友達ができただけから
- ・自分に必要なフィールドワークが出来た
- ・期間も費用もちょうど良かったから。
- ・日本人同士でも一生ものの仲間ができたし、現地の学生とも交流できたから。
- ・初めて海外へ行き、日本とは違う文化や生活に触れることができて新鮮でした。宿泊施設も、プログラムもしっかりしていてとても楽しかったです。
- ・英語も学べ、日本にもフィリピンにも最高の友達ができました！
- ・とても楽しく充実した3週間だったから。人生の宝物だと思えるから。
- ・長期にわたり海外に滞在するのは今回が初めてであり、海外の人と親密な交流をするのも初めての体験だったので、将来にとって非常に有効な経験になった。より海外を身近に感じ、勉学への意欲もわいた。
- ・海外への興味をもつきっかけになった。
- ・現地のファシリテーターとの交流など普通の留学では経験できないことをいろいろできた
- ・多くの人と出会えたのが良かった。
- ・三週間で短く感じられるほど、充実していた。信頼できる友人ができた。
- ・とても楽しかったし、かけがえのない友達がたくさんできたから。
- ・英語でのコミュニケーションに対して恐怖感がなくなった。
- ・色々な人との交流ができた
- ・費用的にも自己負担がほとんどなかった上に、夏休みの間に行けてその後の勉学の契機づけとすることができたから
- ・事務的なサポートも手厚く、安心して海外研修ができた。
- ・十分な準備期間ののち、国内、海外インターンを経験することができた支援金も援助していただいたため。
- ・短期間だったので英語が飛躍的に上昇したわけではありませんが確実に力がついたと実感していますし、海外に対する不安が少なくなりました。
- ・海外で講義を受けたり、現地企業を訪問したり、現地学生と交流したりなど幅広い活動ができたから。  
また、事前研修も整っていて海外派遣にむけてしっかりと準備ができたから。
- ・貴重な経験ができたから。
- ・単なる海外での語学研修ではなく、工学と絡めた学習ができたので貴重な体験になった
- ・事前、事後学習があったのが本当に良かった。経験、だけで終わらない、次に繋がる海外経験になった。  
それに、先生方も本当にあたたかくて、海外にいるときも、サポートしてくれる姿勢、体制が、海外で活動する中での心理的な安心にもなった。
- ・準備期間も活動期間も指導や助言をしてくださったので、安心して活動できたから。自分が想像していた以上に終わった後、進路に関する気持ちが変わったから。
- ・発展途上国というなかなか行かない場所で貴重な経験ができ、多くのことを学ぶことができたから。
- ・海外での日程を自分で決めて移動したり、外国人の友達ができただけで自信になった。同年代の外国人とコミュニケーションをとりながら活動したことは初めての経験で、自分の英語能力を知る事ができ、英語を勉強するきっかけになった。
- ・自由な時間が多く、自分で工夫して様々な活動を行うことができたから。また、語学力向上や、フィールドワークでの調査など、自分がしたかったことでしっかりと結果を出すことができたから。
- ・ただの旅行や留学だけでは経験できないことができ、また、たくさんの人と出会えたから。
- ・実際にヨーロッパでフィールドワークをすることで、文献調査だけでは得られない実体験を得ることができた。また、仮説を立てて自ら主体的に活動する中で、自己修正能力や協同する能力を身につけられたと自覚しているため。
- ・前準備が至らない点もあったものの、それを上回るレベルで班員全員が協力し合い、訪問先で新たな発見をする

ことができました。現地で実際に働く方々のお話を伺えたことは学生生活のこの時期において非常に重要なことであつたと思います。

- ・普段関わることが出来ない大人や異国の学生に会うことが出来たから。
- ・学生でないと中々できない経験をたくさんさせていただきました。国際機関に実際訪問させていただいたのも、とてもためになりました。
- ・単に自身の目的をはたしただけでなく、欧州のいくつかの大学の学生さんたちと交流したり、OBの方たちの話を聞けたからです。
- ・初海外として行くには十分なサポートがありつつ、旅行では体験できないようなプログラムで、充実感があつた。行ってみないとわからない経験が多く、これまで海外に行くことに積極的でなかった自分は勿体ないと強く思った。
- ・異文化に触れることで、日本はどのような国なのか外から考える経験を積むことが出来た
- ・興味があつたボランティア活動ができたし観光も楽しめたので、多くの面で楽しみながら学ぶことができたから。
- ・ラオスについてよく知ることができた
- ・自分では行けないところにもいけたし、充実したコース内容だったと思う
- ・1人や友達と海外に行くと企業訪問や現地の人と話すのは難しいが、留学だとそれらの経験ができるから。

#### <おおむね満足している>

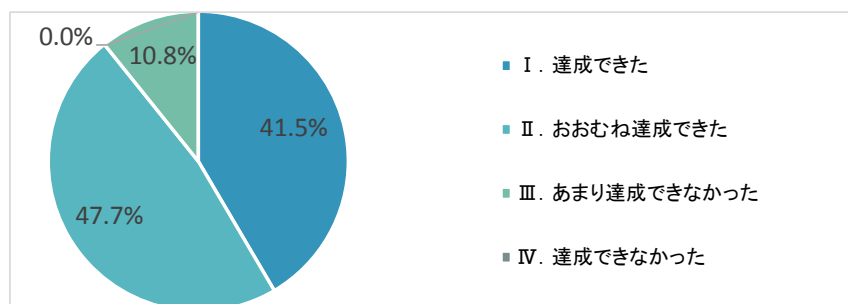
- ・もう少し授業時間があつても良かったと思ったから。
- ・学校の授業の他にも十分な時間が用意されており、様々な体験ができたから。
- ・英語を通じたコミュニケーションを積極的にとれるよう工夫されていたため。
- ・「自由」な時間がもっと欲しかったです。昼休みに自分たちから積極的に現地の人たちに話しかけたりしましたが、ファシリテーター以外のフィリピン人と知り合うことが難しく、想像していたよりも友人を増やせなかったことを後悔しています。
- ・海外の学生の様子や簡単な模擬授業を受けることができたから。
- ・ギャップタームを実施するのが1年目ということもあり、コースの内容についてまだブラッシュアップできる部分があると感じたから。
- ・いままでずっと興味のあつた英語圏であるカナダに、プログラムを利用しながらも自ら計画を立て、航空券の準備から現地での活動まで一人で行動したということが、とても自身にとって大きな意義のある経験になったからです。
- ・メキシコでしかできない経験(ウミガメ保護を初めとして生活諸々)ができたし、海外での生活がいかなるものか少しわかったから
- ・密度の濃い研修となったから
- ・ヨーロッパは感じることはできたが予定が詰まっていた少し疲れた。
- ・学生自身でアポイントを取り、フィールドワークの日程を決めることは学習への主体性を高める上で効果的だった。また、現地の大学生との合同プレゼンでの交流は留学前の良い刺激になった。
- ・海外に行つて日本と異なるものを見れたり、語学につながつたので満足している。大学とCIEEと2つ手続きをするのが大変であつた。

#### <あまり満足していない>

- ・自身のドイツ語のレベルが低かつたということもあつての結果ではあるが、クラスでのドイツ語学習の難易度が若干低く、進行も遅かつたように感じた。

## (2) 学修成果について

### ●目標どおりの成果が達成できましたか。



|     |    |        |
|-----|----|--------|
| I   | 27 | 41.5%  |
| II  | 31 | 47.7%  |
| III | 7  | 10.8%  |
| IV  | 0  | 0.0%   |
| 計   | 65 | 100.0% |

ーその理由を以下に記述して下さい。ー

#### <達成できた>

- ・語学だけでなく、価値観や考え方などを捉え直すきっかけとなった。
- ・積極的にドイツ語で会話できたから。
- ・日常会話レベルのドイツ語を理解できるようになったから
- ・合格できたから
- ・湖の調査について、積極的に取り組めた
- ・中国のマイナスのイメージがなくなった。
- ・英語の向上。
- ・帰国してから英語の上達に驚いた節があったため
- ・留学前に立てた計画が達成されたから
- ・大学入学と同時に失っていた英語を学ぶ意欲を取り戻したとともに、将来のことについてさらに深く多面的に考えるきっかけとなった。
- ・海外の文化に触れることができたから。
- ・行った後に英語がより聞き取れるようになっているのが自分でもわかりました！
- ・後悔をしていないから。
- ・とりえず海外を経験することが目的だったので、その目標は海外の学生との交流や実際に街に繰り出してみることで達成された。
- ・なにか困ったことがあっても仲間同士で切磋琢磨して乗り越えられた
- ・プログラム参加者が皆熱心な人ばかりだったので、私も何事にも一生懸命取り組めたから。
- ・楽しく充実したプログラムだったから
- ・自分の英語力を再認識するとともに、国内海外インターンを経て、多くの刺激を受け、これからの学習意欲に繋げることができたため。
- ・事前学習と事後学習でしっかり学んだことを残すことができた、
- ・設定していた目標を100%とまではいかなくとも、納得できる水準まで達成できたと感じたため。
- ・目標としていたことをしっかりと学ぶことができ、さらに目標以上のことをすることができた。
- ・現地の人が日本や日本企業にどのような印象を持っているのか、フィールドワークのみでなく、日常生活の中でも知ることができたから。フィールドワークもしっかりサポートして頂き、目標を達成できたと思うから。
- ・事前にたてたりサーチャクエスチョンを元に、参考になるお話をたくさんお聞きすることができました。
- ・自分のやりたいことに合致したコース内容だったので、主体的に活動に参加することができた。これまでにないくらい質問も積極的にできた。
- ・ミャンマーでの生活で自分がどのようなものを大切にしたいのか言語化することが出来た
- ・目標であった異文化を知ること、平和について考えることを達成することができたから。
- ・ラオスやその周辺国の現状、支援の活用の方などがわかった。

#### <おおむね達成できた>

- ・自由の女神やエリス島、テネメントミュージアムを訪れたことで、自分の関心分野である移民の歴史を身をもって学ぶことができたから。

- ・今回のプログラムで私は、移民の街であるニューヨークにおいて、移民の現在と過去の生活を学ぶこと、黒人音楽について学ぶことの2つを大きな目標としていた。そして実際、移民1世として暮らす現地学生にインタビューを行ったり、教会にゴスペルを聴きに行ったりする中で、断片的ではあるが、目標としていた2項目について知識を深められたと考える。
- ・体調をくずしてしまったものの、自分の力で行動できたから。
- ・たくさん得るものがあった。だが言語の授業においてもっと積極的になれればという点があったから。
- ・今となればもっと見たかったことややりたかったことが残るのが悔しい。
- ・海外から日本をとらえるのはできた。しかし、もうちょっと主体的に行動したかった。
- ・学習を通じて異文化経験ができたと感じるから
- ・英語の発音を改善することができたから。
- ・日常会話をえいごではなすことができたから。
- ・海外の文化について触れる機会となったから。
- ・その後の英語学習の、きっかけにできた。
- ・発音の仕方の基礎を知ることができた。現地の文化に触れられた。
- ・英語を話す機会が多くて勉強になった
- ・2週間で海外事を知ったり、多少の英語力の向上に繋がったし、また、更なるレベルアップを望むならもっと長期で留学に行かなければならないと感じたから。
- ・現地の文化に何とか対応しつつうまくやって行けたと思います。
- ・海外に行って様々なことを体験することで価値観を広げることができたから。
- ・視野を広げるという目標が達成できたから。
- ・英語で話さないと言葉が通じないので、英語を話すしかないため英語力が上がったから。
- ・想像以上に、現場、というのは厳しいものであり、それ以上に様々なことが起こりうるカラフルで充実したところだった。だから、自分の目標達成をいつも頭においておける余裕もなかったのだが、その中で一つ一つに真摯に取り組んでいるうちに、その積み重ねが、あとで振り返ると目標を達成していた、というようなこともあったから。
- ・まず、現地での活動期間中はほぼ英語漬けの日々だったので、英語力を高め、かつ英語力の重要性を再び実感したことや、たくさんの異文化に触れられたこと見識を深められたこと、また日本にいるときのように何か困ったことがあっても気安く助けてくれる人が身近にいない状況の中で、自分で判断し責任をもって行動しなければならず、そのような意味で自己管理能力も高められたと思うからです。
- ・実際活動してみると準備不足のところがあったり、もっと取り組めることがあったのではないかと感じたから。
- ・英語に関してはやはり3週間では上達は少しだったがコミュニケーションの力などはついたと思うから
- ・自分たちでアポを取り、リサーチクエストに基づくインタビューができたため
- ・リサーチクエストに対する答えをおおむね発見することができたため。ただし、これからの課題なる点もあるが、それらは専門科目やゼミなどでの研究につなげていきたいと考えている。
- ・自分のフィールドワーク対象である自動車産業にアポイントを取ることができず、同じ班のメンバーが取ってくれたアポイントメントに先に頼ることになってしまい反省しています。訪問先で得た情報は学習に大きく役立つものでしたが、自身の努力が足りなかったことも同時に感じさせられました。
- ・食料品の中小企業にインタビューすることは出来なかった。
- ・移民について調べた。移民が多い地区に住むことができて治安の面など実際に感じることもできた。
- ・アポイントを取った新聞記者の方等に、計画通りインタビューを行うことができ、難民支援のカフェや公共の教育機関など現地でしか知り得ない情報を得ることが出来た。次回はもう少し正確に情報を聞き取ることが出来るよう英語のリスニングを向上させたい。
- ・繊維分野においてあまり情報を得られなかったからです。
- ・当初の目的以外にもさまざまな出会いがあり、将来に役立つ経験ができたと思うから。
- ・フィリピンでは途上国の生活の一部を自分の目で見ることができた。ドイツでは自分で計画実行することができた。両方共に語学力向上に直接つながらなかった。気づきは得られた。

#### <あまり達成できなかった>

- ・日本人だけの授業だったため、他の国の生徒とあまり交流することができなかったから。また、2人でホームステイをしていたので、家では日本語を使う機会が多く、英語の練習をたくさんはできなかったから。

- ・フィールドワークを行うための行動や下調べが不十分であった。
- ・留学すれば流暢に英会話ができるようになっていたと思っていましたが、3週間では短すぎたということを理解できました。
- ・英語で話す力をつけることを目標としていたが、まだまだ努力が必要だと感じたから。
- ・学修目標の5項目のうち、いくらかは達成できたが他はそうではなかった。特に、「動物の保護と人間の発展の調和」、「国際問題の解決への過程、道筋」については、ウミガメの保護をする中で、人がどこまで動物の保護をするべきなのか悩んだ。
- ・語学研修がプログラムのひとつであり、私の目標のうちのひとつに英語力の向上があったが、2週間はあまりに短かったから。
- ・協調性を培ったかったが、やはり集団行動は苦手だと再認識する生活になってしまったから。現地の人と話したかったが、あんまりできなかったから。

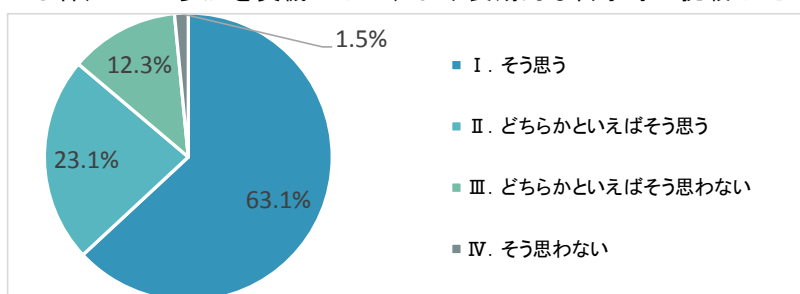
### (3) プログラムへの要望について

●新たに企画してほしい学外学修プログラムがあれば教えてください。

- ・北欧。
- ・NASAなどの訪問
- ・北欧やドイツなどの進んだ教育制度または環境意識について学ぶ企画。アフリカにいき、貧困問題の解決について考える。
- ・フィリピンは比較的他の国より安く行くことができたが、同じくらいの経費のコースがあればいい
- ・特にありませんが、あともう一週間ほど延長してもらえたら、さらに楽しめたと思います。
- ・四年次に、研究室の間に少しの間抜けて海外の工学を学ぶプログラム
- ・海外の大学での滞在期間をもう少し伸ばしてほしい。
- ・中東行きのプログラムがあればいいなあ。イスラエルのキブツ視察、とか、学校現場にボランティアとか。
- ・他学年の人とも一緒にできるようなプログラムがあればいいかなと思います。
- ・アフリカへのプログラムなどあればおもしろいと思います。
- ・十分な多様性があると思う
- ・学生が一人で海外での活動に取り組む学外学習プログラム
- ・現地で病院に行く機会があったのですが、日本とは違うと感じたので医療についてのプログラムがあればいいかもしれない。
- ・教授の研究の補佐みたいな留学だと研究室見学みたいでおもしろいかな、と思います。

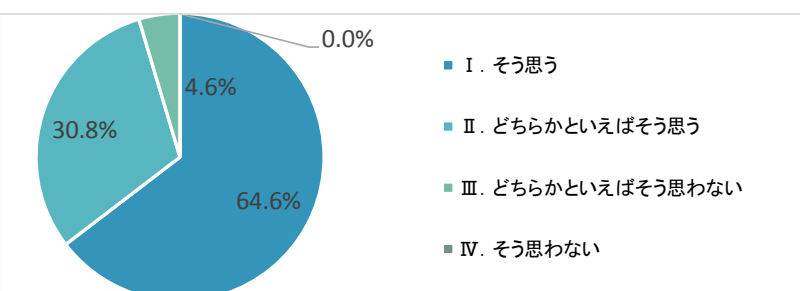
### (4) さらなる留学等について

●神戸GCPの参加を契機として、より長期的な留学等に挑戦したいと思いますか。



|     |    |        |
|-----|----|--------|
| I   | 41 | 63.1%  |
| II  | 15 | 23.1%  |
| III | 8  | 12.3%  |
| IV  | 1  | 1.5%   |
| 計   | 65 | 100.0% |

●関心を持ったテーマについて、より深く学修したいと思いますか。



|     |    |        |
|-----|----|--------|
| I   | 42 | 64.6%  |
| II  | 20 | 30.8%  |
| III | 3  | 4.6%   |
| IV  | 0  | 0.0%   |
| 計   | 65 | 100.0% |

### 3-3. 大学教育再生加速プログラム(AP) 中間評価結果

平成 29 年度に受審した「大学教育再生加速プログラム (AP) 中間評価」について、平成 30 年 3 月 16 日付け文書にて評価結果の通知があり、本学の総括評価は【A評価】であった(資料 1)。今後は改善を要する点として記載されている内容を確認するとともに、フォローアップ調査、及び事業終了後の事後調査で問われることとなる、AP 事業の必須指標及び独自の事業目標に対する達成度(資料 2)についても分析・対応を進めていく必要がある。

※平成 30 年度はフォローアップ調査を実施予定。

#### (資料 1) 大学教育再生加速プログラム(AP) 中間評価結果

##### 大学教育再生加速プログラム(AP) 中間評価結果

|      |                            |      |      |
|------|----------------------------|------|------|
| 整理番号 | 49                         | 大学等名 | 神戸大学 |
| テーマ  | テーマⅣ 長期学外学修プログラム (ギャップイヤー) |      |      |

#### 【総括評価】

A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

#### 【コメント】

##### <優れている点>

- ・本テーマの取組「神戸グローバルチャレンジプログラム」は、神戸大学の学生の海外経験の主要な部分を担っており、全学的拡がりが期待できるプログラムである。本プログラムにおいては、「神戸スタンダード」の枠組みの中で「学びの動機付け」と成長が図られており、学生が提出する「チャレンジシート」と「リフレクションシート」をセットにして学生の成長を跡付けている。また、海外同窓会ネットワークによって本プログラムが支援されていることは評価できる。
- ・活動資金のサポートとして神戸大学基金から費用の一部支援を受けるなど、全学的支援体制の確立がうかがえることは評価できる。
- ・学生の海外派遣プログラムに精通した他大学教員を外部評価委員として任命し、また、本プログラムに参加した学生も加えた外部評価委員会を実施して、その意見に基づきより客観的なループリック指標の検討等の改善に努めたことは評価できる。
- ・事業成果の広報・普及については、全体報告会、パネル展示、ホームページによる発信、AP 事業テーマⅣシンポジウムでの紹介など積極的に行っていることは評価できる。

##### <改善を要する点>

- ・学生を海外派遣する場合の安全性の確保については十分留意し、「海外同窓会ネットワーク」等への協力を要請する必要がある。
- ・ループリックを利用して、より客観的な評価ができるように期待したい。また、評価結果の経年変化の分析が必要である。

(資料2) 必須指標及び独自の事業目標に対する達成度 (中間評価調書 (H29. 8. 4 提出) より抜粋)

②必須指標及び独自の事業目標に対する達成度かどうか。【目標に対する達成度】

| テーマにおける必須指標           |           | 27 年度<br>実績 | 28 年度   |         | 29 年度<br>目標 | 30 年度<br>目標 | 31 年度<br>目標 |
|-----------------------|-----------|-------------|---------|---------|-------------|-------------|-------------|
|                       |           |             | 目標      | 実績      |             |             |             |
| 長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 | 全学生       | —           | 1. 61%  | 0. 98%  | 1. 77%      | 2. 17%      | 2. 53%      |
|                       | 1, 2 年生   | —           | 3. 12%  | 2. 17%  | 3. 97%      | 4. 82%      | 5. 67%      |
| 長期学外学修プログラムを経た学生の成績評価 |           | —           | 0. 20   | 0. 04   | 0. 27       | 0. 34       | 0. 41       |
| 退学率                   |           | 1. 12%      | 1. 12%  | 1. 21%  | 1. 03%      | 1. 00%      | 0. 98%      |
| 学生の授業外学修時間            | 全学生       | —           | 5. 8 時間 | 7. 3 時間 | 6. 0 時間     | 6. 2 時間     | 6. 5 時間     |
|                       | プログラム参加学生 |             | 7. 6 時間 | 6. 5 時間 | 8. 0 時間     | 10. 1 時間    | 12. 0 時間    |
| 進路決定の割合               |           | 92. 11%     | 92. 37% | 94. 14% | 92. 51%     | 93. 37%     | 94. 09%     |
| 学生が企画する活動数            |           | 37 件        | 72 件    | 52 件    | 100 件       | 124 件       | 150 件       |

| 本学の独自指標                                                    |           | 27 年度<br>実績 | 28 年度  |        | 29 年度<br>目標 | 30 年度<br>目標 | 31 年度<br>目標 |
|------------------------------------------------------------|-----------|-------------|--------|--------|-------------|-------------|-------------|
|                                                            |           |             | 目標     | 実績     |             |             |             |
| 長期学外学修プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」 | 水準2に達した学生 | —           | 37. 5% | 78. 3% | 50. 0%      | 62. 5%      | 75. 0%      |
|                                                            | 水準3に達した学生 |             | 0. 0%  | 26. 1% | 10. 0%      | 20. 0%      | 30. 0%      |
| プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合                      |           | —           | 5. 0%  | 0. 0%  | 20. 0%      | 35. 0%      | 50. 0%      |

<進捗状況 (■:必須指標 ●:独自指標)>

■長期学外学修プログラムに参加する学生の割合

単位を授与する長期学外学修プログラムについて、平成 28 年度の参加者は目標値を下回る結果となった。しかしながら、本プログラムにおけるコースの拡充に加えて、平成 29 年度に設置した国際人間科学部では学生全員が自らの海外での学びの場を選択し、学修の具体的な課題を自ら設定して、海外研修と国内外でのフィールド学修に参加するグローバル・スタディーズ・プログラム (GSP) を導入するなど、長期学外学修に関する取組を進めており、今後は目標値達成が期待される。

■長期学外学修プログラムを経た学生の成績評価

平成 28 年度夏期コースに参加した学生と不参加の学生について、GPA の変化を比較した結果、目標値は達成できなかったものの参加学生の方が成績評価の推移は良好であり、プログラム参加により一定の学修意欲の向上を得られたものと言える。

■退学率

近年、本学の退学率は 1 % 台前半で推移している。成績不振による退学者を出さないために、平成 28 年度から、全学部において、GPA を成績不振の基準の 1 つとして活用し、成績不振学生への修学指導に取り組んでいる。

■学生の授業外学修時間

平成 28 年度から、全学部生の学修時間を調査する「学修の記録」を導入した。1 年生 (98. 6%) をはじめ各学年で高い回答率を得ており、学部生の学修時間のおおよその実態を把握できた。全学部生では目標値を上回ったが、プログラム参加学生では下回る結果となっている。調査の方法には改

善の余地があり、今後はより正確な学修時間の把握に努めるとともに、経年変化等を分析しつつ、学生の授業外学修時間を増やす取組を進めていく。

■進路決定の割合

平成 28 年度は目標値を上回る結果となった。就職率を維持・向上させるため、今後も学内外の就職支援組織等と連携した取組を進めていく。

■学生が企画する活動数

平成 28 年度は目標値を達成することができなかった。様々な分野の交流の場としてラーニングコモンズの活用を進めるなど、学生が企画を推進できる環境の充実に全学的に取り組んでいる。

●プログラムに参加した学生がプログラム終了後に身に付けた能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」

ルーブリック指標を用いて参加学生が自己評価を行った結果、学外学修活動への参加により水準 2 に達した学生は 78. 3%、また水準 3 に達した学生は 26. 1%と、いずれも目標値を大きく上回った。各コースで高い満足度が得られており、充実した活動内容が各能力の向上に繋がったものと思われる。今後も各能力水準の維持・向上に努めていく。

●プログラムに参加後、在学中に留学を含む海外での学修活動に参加した学生の割合

平成 28 年度に参加した学生に対して行ったアンケートでは、「より長期的な留学等に挑戦したいか」という質問に対し、「そう思う」が 59. 1%、「どちらかといえばそう思う」が 36. 4%の回答結果を得ており、次年度以降はさらなる留学等への挑戦により目標値の達成が期待できる。

(テーマ：Ⅳ、大学等名：神戸大学)

### 3-4. プログラム全体の自己評価総括

#### (1) 自己評価総括

【自己評価】4：計画を十分実施できた

プログラム全体の実施状況（2-1）、平成29年度実施コースの各取組状況（2-2）、ループリック指標に基づく参加学生の自己評価（3-1）及びプログラム参加後のアンケート結果（3-2）により本プログラムの実施状況を点検した結果、多くの学生は本プログラムへの参加を通じて「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、「学びの動機づけ」を得て「主体的な学修姿勢」を身につけており、神戸GCPの目標達成に向けた活動は計画どおり進行している。

#### (2) 課題への対応状況

昨年度の自己点検・評価では、今後の課題として「① 学外活動学修での気づき・経験を次のステップに繋げる取組」「② プログラムの認知度向上」「③ 経済的支援(参加費用の一部補助)を行うシステム作りの強化」の3点を挙げた。①については、海外プログラムから帰国した学生に対するフォローに関するFDを行い、他大学の具体的な取組・手法の紹介や学内外の教職員による意見交換により、事前・事後学修やその後の継続的な教育について理解を深めた。プログラムを開始して2年目であるが、参加した学生のうち13名はすでに本プログラムの別のコースに参加しているなど、海外での更なる活動に積極的にチャレンジする環境作りを進めている。また、②については、前年度参加学生の活動成果報告会を組み込んだ説明会を4月に実施し、新入生を中心に延べ460人の学生が参加した結果、海外で学修活動を行うプログラムに参加した学生数は98名（平成28年度：75名）と昨年度より23名増加した。その後も学生生活オリエンテーションでも神戸GCPの取組を紹介するなど、認知度向上に向けた取組を継続している。③の経済的支援については、神戸大学基金からの支援の確保に加えて、JASSOに申請した結果、平成29年度は追加採択、また平成30年度は採択とそれぞれ100名相当分の支援をJASSOから受けられることとなり、昨年度よりも体制の強化を図ることができた。

#### (3) 今後の課題

##### ①広報の充実

学内の広報の充実を進める一方、本事業の取組の成果に関する社会への情報発信を行う必要がある。これまでは、ホームページによる情報発信のほか、AP事業テーマⅣシンポジウム(新潟)で取組を紹介してきたが、AP事業テーマⅣに採択された12校中すでに9校が行っている単独等でのシンポジウムについては本学ではまだ開催していない。地元地域を中心に情報を発信することを目的としたシンポジウムを開催するとともに、テーマⅣ幹事校の新潟大学が中心となり進めている書籍出版への協力(執筆)など、広報活動の充実を図る。一方、学内においてもプログラムに関する学生への広報の充実を各所で図るとともに、教員に対しても本取組の周知を図る必要がある。

##### ②必須指標及び独自の事業目標に関する達成度の分析

AP事業では達成すべき必須指標及び独自の事業目標を定めている。中間評価では特段の指摘はなかったが、必須指標等の達成度を分析し、事業の目標を達成するために長期学外学修プログラムへの参加人数や授業外学修時間を増やす取組を進めていく必要がある。特にプログラム参加学生数については、平成29年度末として設定した目標数値を達成できていない。各コースにおいて応募人数をさらに増やすべく、各コースの学修目標・学修内容や期待される学修効果について、学生への一層の周知を図ると同時に、実施コース数の増加・確保を図る必要がある。さらに、新設学部である国際人間科学部では、学部学生全員が海外研修とフィールド学修に参加する実践型教育プログラムである「グローバル・スタディーズ・プログラム」(Global Studies Program:GSP)が実施されている。神戸GCPは、

1・2年生を対象とし、国際的なフィールドでの学外学修活動を通じて、「学びの動機づけ」を得ることを目標としているが、AP事業としての目標を達成するには、GSPをはじめとする、各学部が実施している国際的なフィールドでの学外学修プログラムとの有機的な連携を図る必要があるように思われる。

以上、次年度以降はこれらの課題に対応しつつ、現在の取組のさらなる充実を図り、本プログラムの発展・目標達成へと繋げていく計画である。